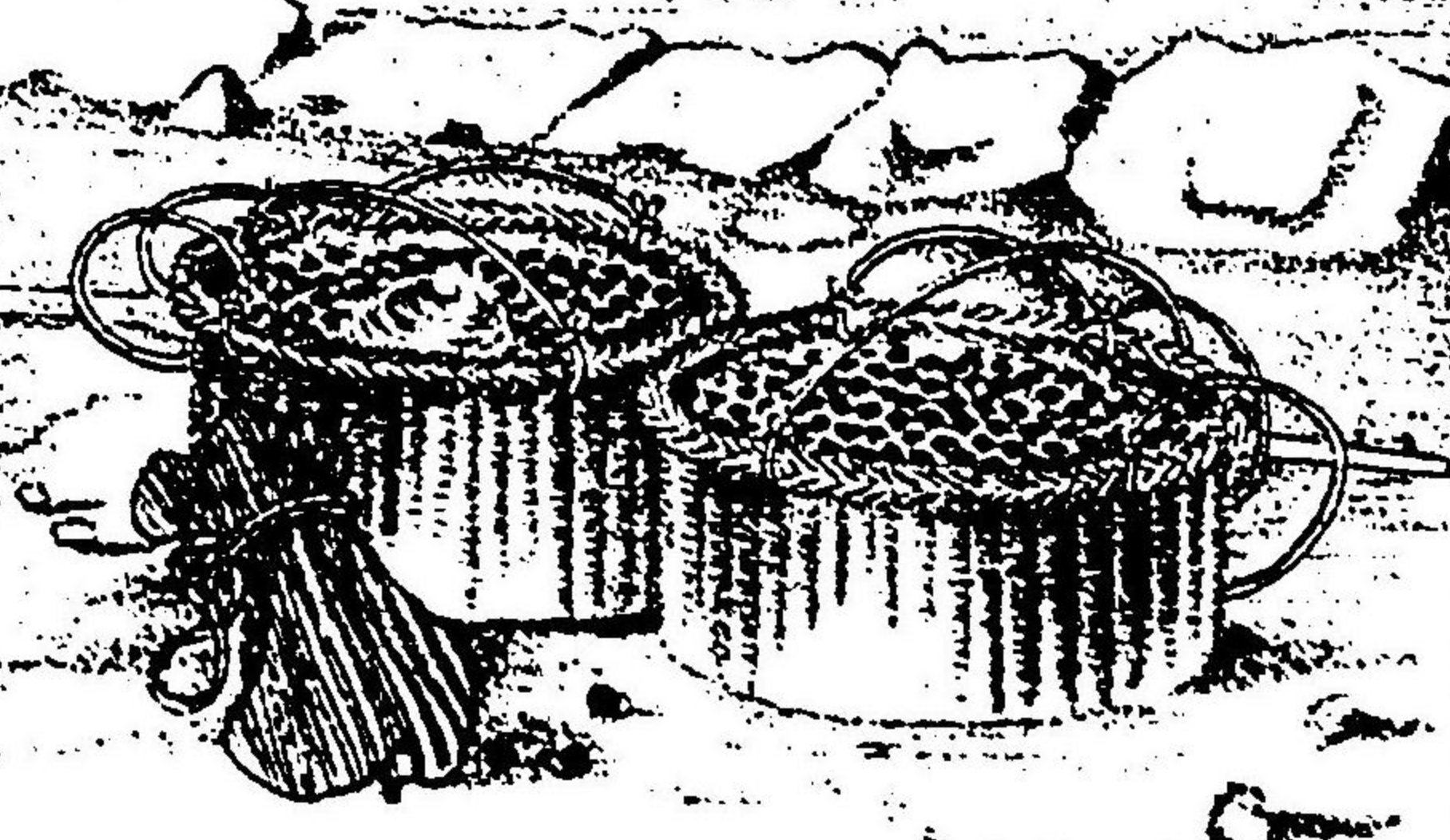


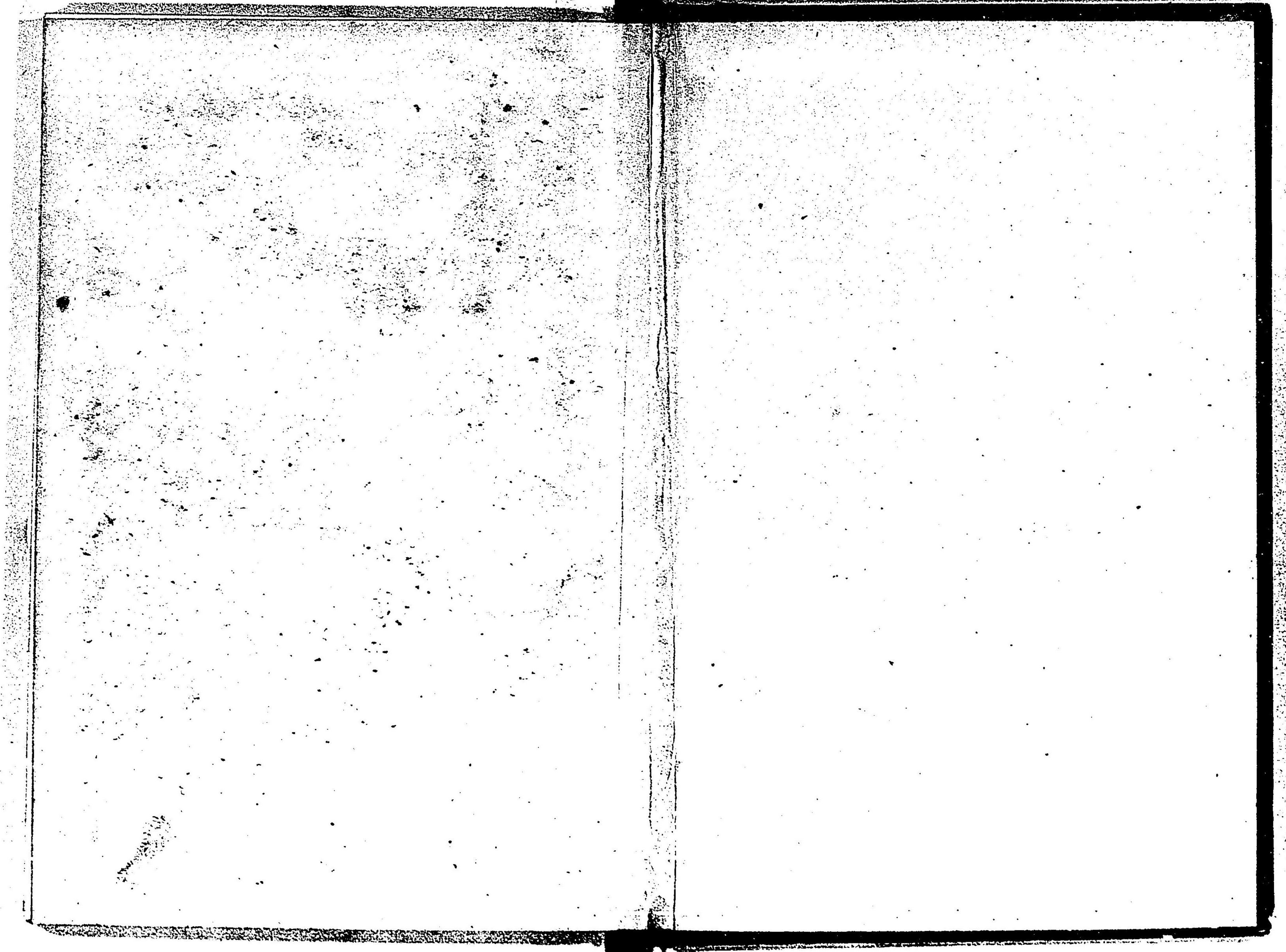
118
8
361

5270

繪本
嵐小僧實記
全

東京
金泉堂
梓



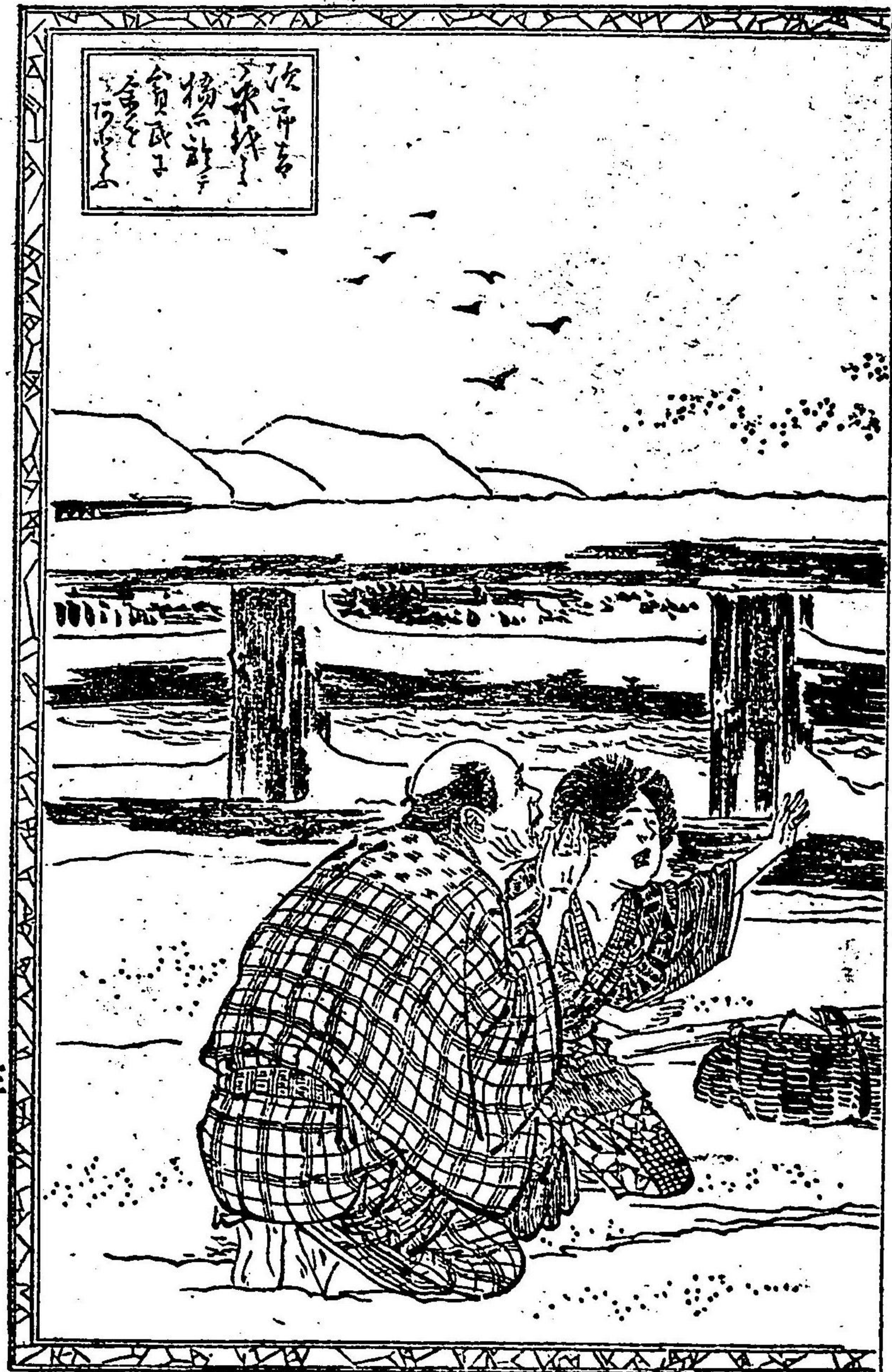


明治十九年十月十三日 内務省文部一ノ三

序

箱に充てめて、主家の富を削り、齒の白き子鼠
 是頭上の黒き溝鼠の種類よしして、終よ升落し
 よ違ふ事あり、茲に富家の有餘れる資金を加へ
 を助け、大黒天の奴僕よ似たる鼠小僧なる者ハ。
 言ど、余輩ハ其志を可也として、其行ふ處ハ不可
 せとす。人の正理よ適ハされば、終よ身を全ふする能ず。依て此一
 小冊ハ思ふ可し、讀者其取る處捨る處あるを、以て序書をなす

秋琴亭緒依



後原
治平の事



鼠小僧實記上巻 目錄

- 鼠吉兵衛拾子を拾ふ事
- 并 幸藏生立の事
- 吉兵衛初次郎が助命を願ふ事
- 并 鼠小僧上方出立の事
- 幸藏信濃屋女房を計る事
- 并 お松密夫を引入る事
- 伊勢屋の番頭内濟を頼む事
- 并 幸藏戀慕の念を晴す事
- 鼠小僧悪者に付らるゝ事
- 并 清兵衛夜盗の手引をする事
- 鼠小僧吉岡村働きの事
- 并 伊勢参りと相宿する事

○ 幸藏金子を奪はるゝ事

- 并 幸藏お吉の忘想を夢見る事
- 幸藏途中病氣貧家を頼む事
- 并 孝女を憐む事
- 幸藏大坂へ到着の事
- 并 近江屋喜左衛門が事
- 鼠小僧淀辰よ對面の事
- 并 淀辰奇術を見する事
- 強盗淀辰素性の事
- 并 初代淀辰鰐右衛門よ殺さるゝ事
- 三右衛門幸藏よ豪家の手引する事
- 并 鼠小僧織越の家を計る事
- 幸藏大金を土中へ埋むる事

并三右衛門三ヶ條異見の事

○幸藏次郎吉と改名の事

并先の半次圓覺寺の繁昌を告る事

○三賊十生目村よ到る事

并三太郎後家物語りの事

○三賊圓覺寺へ忍び入事

并住持を生捕事

○鼠小僧天井働きの事

并三賊穴熊が金を奪ひ去る事

鼠小僧實記中巻 目錄

○與助大太郎が悪事と白状の事

并次郎吉宿屋の亭主を欺く事

○次郎吉金子を騙つて水口を出立の事

并關の地藏尊由來の事

○次郎吉首盜を助ける事

并幽霊よ止めらるゝ事

○次郎吉孝女が家を忍び出る事

并吉岡村の落着を聞く事

○赤坂街道よ兩賊旅人を殺す事

并次郎吉旅籠屋を騒ぐ事

○亭主相宿の金子詮議の事

并兩賊旅人よ金を奪るゝ事

○次郎吉大井川の逆浪と越る事

并鞠子宿にて危急と通るゝ事

○次郎吉狐付と成る事

并徳助と計る事

○次郎吉山中の里を賑はす事

并庄屋徳助演説の事

○孫太郎稻荷利生の事

并次郎吉娘が身賣を聞事

○次郎吉お峯が身の上を聞事

并金を残して欠落する事

○次郎吉江の島へ参詣する事

并七里ヶ濱にて盗人を救ふ事

○次郎吉恨みを忘れて恵みを施す事

并悪者素性を語る事

○三吉非を悔て古郷へ歸る事

并次郎吉品川へ泊る事

○次郎吉旅屋の女房を頼む事

并お峯が父有家を尋來る事

○おみね父を諫る事 并與左衛門後悔の事

○次郎吉高輪へ世帯を持事

并父母の退轉を聞事

鼠小僧實記下巻 目錄

○次郎吉途中大雪よ逢事

并觀賣菊松を憐む事

○花澤七兵衛困難を助る事

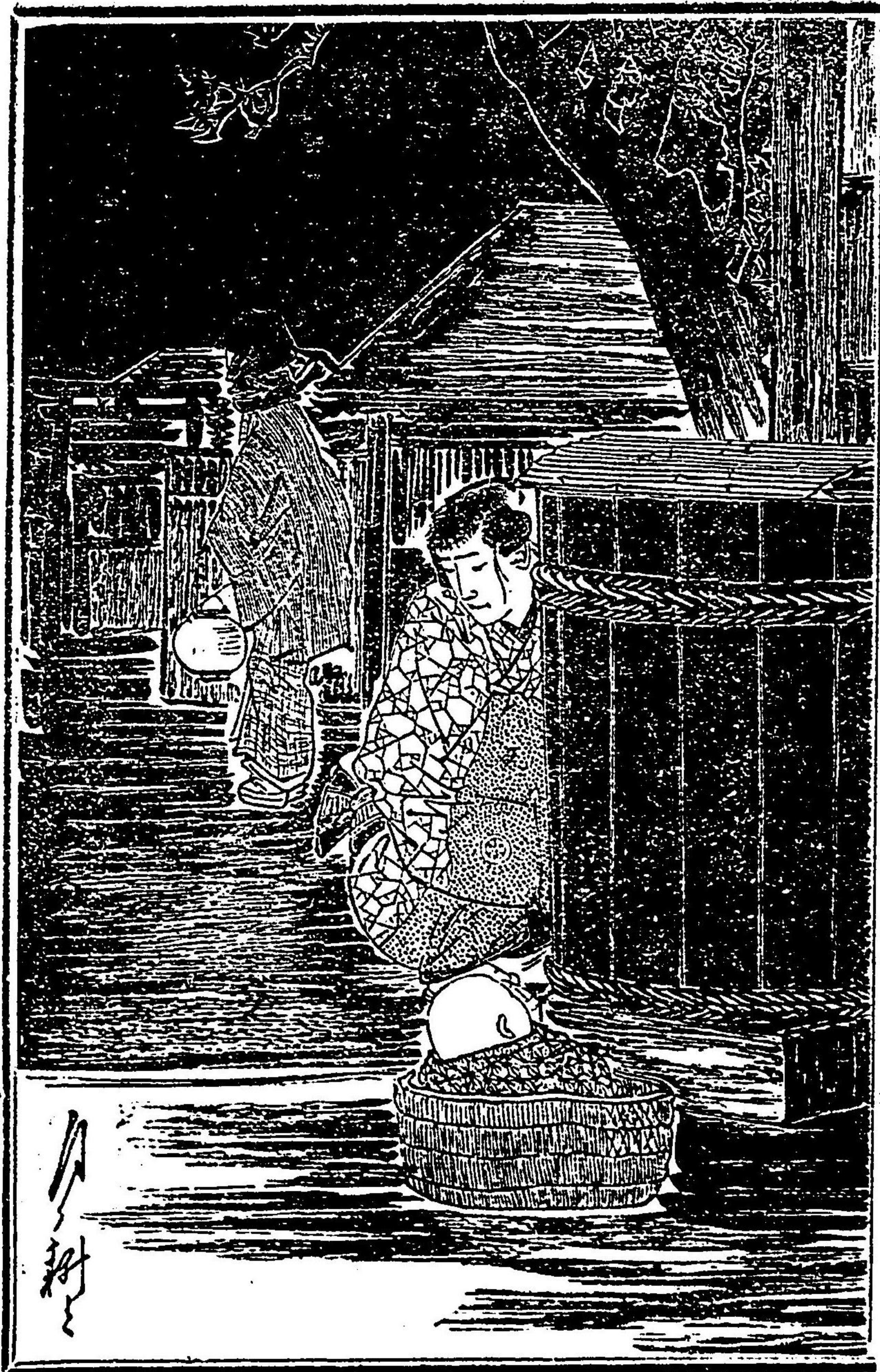
并鼠小僧麴町よ夜盜の事

○次郎吉酒店の難盜を聞事

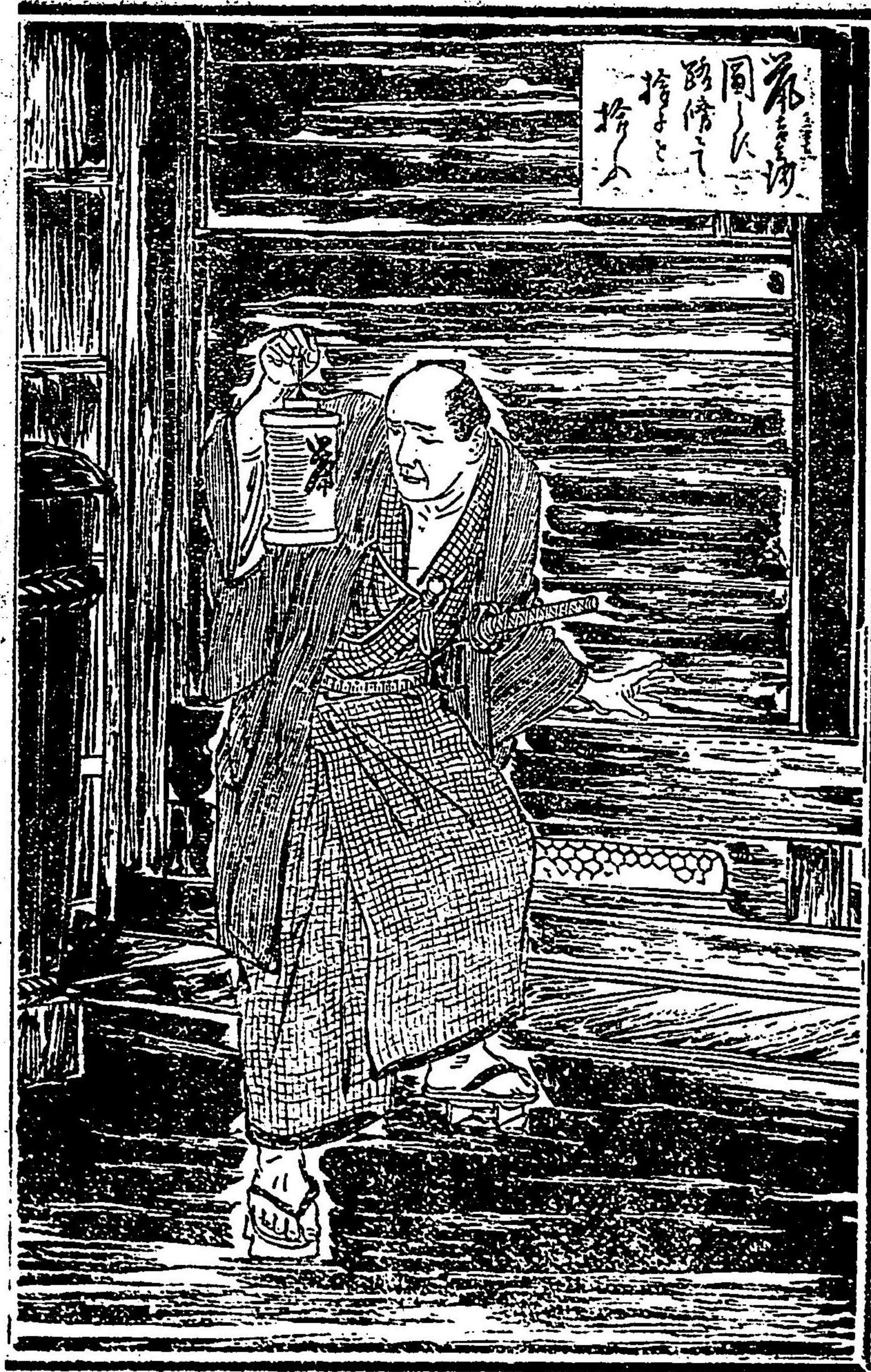
并三河屋へ再び忍び入金子を返す事

差覗く見の捨らるゝと露知ぬ佛心にすやくと眠るをそつと手は渡す女房の此世の別れかと
 死別れより彌増る實子に今宵生別れあら悲しやと臥轉ぶ心を察して藤左衛門も共々張裂胸の
 中いと堪がたく思へども斯ての果むと心を鬼よし未だうら寒き如月の子ゆゑ迷ふ宵闇人
 目を包む懐ろに稚子抱き行先ハ夫と當處は無れども屠所の羊の歩行して道拂どらで其處此處
 と捨る場所をば尋ねつゝ只ある立派の商人の門へ捨置き其儘に二三間も隔れる家の前なる天
 水桶の窠に身をば隠しながら様子を伺ひ居たりし見の肌寒くて聲立れど其家にてハ氣も附
 ざりいか來かゝる人が目を附て提灯さしつけ進み寄り能く稚子の顔を見て玉の様成この男子
 を捨子とせしハ能々の仔細有ての事あらんか我等よ子供の無きこそ幸ひ天より授け賜しやと
 うち悦びて拾ひ上げ直懐ろへと抱ぎ入れいそぐ其場を立去りぬ藤左衛門ハ其家よて拾ひ呉
 んと思ひの外往來の人に拾はれしに最本意なくハ思へ共人の捨たる子を拾ふて喜ぶ程の者な
 れは悪くハせまじと思ふより其後ろ影を伏拜てて我家へこそハ歸りける扱幸藏を拾ひ上げし
 ハ豊島町ハ程近き江川町ハ住居する吉兵衛と云者よして鼠と渾名を呼びなせる博奕打の親分
 あり其身ハ人よ立られて何不自由も新木なる格子造りの派出構ひ其座敷には大いなる薪吐火
 鉢ハ唐金鑲嵌した勝手よハ惣銅壺磨き上げたる身上も一六勝負の親分株二階よ於てハ大形に

六七人の食客が晝夜を分ぬ慰み遊其全盛ハ言ん方なく又吉兵衛の女房も元ハそれしやの上り
 よて姉御くと立られる鬼の女房ハ鬼神と言へど拾ひ上たる幸藏をいと可愛がりて早速ハ乳
 母を抱へて何くれと實子の如く育てしに光陰荏苒ハ押移り早幸藏も十二歳の春を迎ふ至り
 一が其頃よりして博奕を見習ひ子分共と一所よなり所々を押し廻し歩行よつけ性質利口發明よ
 て子柄も人よ勝れて好く殊ハ金銀を少も惜まず湯水の如く蒔散て乗くの人ハ與へけるに
 ど終に其名も高くなり鼠吉兵衛の子成故鼠幸藏と云ふべきを年も經ぬに賢き故よハ鼠小僧
 と呼なせり然る處ハ鼠小僧も今ハ次第に奢りを好み廊通ひを始めより自と金に差支へしが
 或夜一人藏前邊をぶらく通行なしたるに呉服店よハ相應に暮す者とも見受らるゝ家の表の
 戸を明て窺かに忍び出る者あり幸藏是を見る處扱ハ此家の手代ども二人連にて吉原へ遊びよ
 行のと察せしより跡へ廻て手早くも戸閉りあらぬ門の戸をそつと明て忍び入最大膽よハ土藏
 へ這入揚板を上げ穴藏の堅き錠をば捻切らんと力よ任せて引廻す其物音に此家の主人が目と
 覺しつゝ起上り土藏へ盜賊這入たり皆々出よと呼はれハ若者より小僧まで棒よ細よと立騒ぐ
 其混雜を聞付て是ハ大變と幸藏ハ早くも藏をそつと出て身を中庭に潜め居るに家内の者ハ藏
 の前へどやく集り來りたれど若や賊めハ刃物でも持てハ居ぬかと思ふより左右なく中へ入



山崎



第一
同
拾
人

もせず只口々に響るのみ彼方の店より一人も最早居らざる様子故幸藏店へ忍び行有合せたる
賣溜の金を九兩と五六貫の銭を手拭よぐるく巻以前の表の戸を明けて難なく外へ出しゆる
此家の者一人も心付へきやうのなし是ぞ幸藏が自然と備へる盗みの手始めと知れたり

○吉兵衛初次郎が助命を願ふ事

并鼠小僧上方出立の事

彼吉兵衛の世話になる食客の其の中に初次郎と云ふ者あり元此者の父と云へる福原重左衛
門と唱へたる或る諸侯の家中なるが鼠吉兵衛の其以前殆んど命を拘はるべき罪をば助け救は
れたる大恩人の事なれば其厚恩を報へんと只管思ひ居し折柄其子息なる初次郎ハ廿一才の若
者也へ随分身持放埒にて遊女通ひをふすのみならず猶又武士に有間敷博奕をなして裸体にさ
れ終に殿の御納戸金七十兩を盗み取欠落せしが夫さへも何時の程にか遣ひ果し身の置所なき
儘に親重左衛門が縁を以て鼠吉兵衛に依頼り厄介と成て隠れ居しが或日初次郎ハ井戸端にて
水を汲で居る折しも見覺るの有る屋敷の者が四五人通り掛りしに早くも此方ハ目を付て逃
隠れしを彼等も亦是ハ御尋ねの初次郎ハ相違有じと思へにぞ吉兵衛の家へ付入て今此家へ初
次郎と云へる若者走入たり彼に少しく用事あれハ直様是よて逢ひたしと云へハ子分ハ右の由

を親分吉兵衛に傳へたるよ吉兵衛急ぎ出来り貴君方には何方より來り給ひて又如何成御用の
筋のある事やと問ふに屋敷の者言ふ様我々は諸侯の探索掛りなるが彼初次郎と言ふ者ハ去年
殿の御納戸金七十兩を盗み出し其後更に行衛知れず依て殿に御怒り強く容易ならざる事あ
れば我々共ハ手分して所々を詮盤せし處今日計らず見付し故是非引立ねばならぬなり夫に付
ても彼が父重左衛門の胸中の其苦しきハ何計りぞ子として親を苦しめる不幸者の初次郎疾出
すべしと懷中より捕縄出すよ吉兵衛ハ不意の事ゆゑ仰天なり先々御待下さるべしと押寄めし
が心の中さる罪人とあるからハ此儘濟す解よハ行ず然ハ言へ親御重左衛門殿ハ大恩受し此身
ゆゑ今初次郎を彼等よ渡しみすく命を取するハ親御に對して義理立ずと思案なすつ、奥へ
入り用算筒より七十兩の金を揃へて取出し是にて助命を願へんと彼役人等の前へ出で其趣き
を頼むしに夫ハ兎も角其方の量見先初次郎を同道して直ちに屋敷へ參るべし就てハ大切の囚
人あれば本細迄よハ及ばずとも手錠を下して連行んと言はれて吉兵衛も御尤もと初次郎を連
來れハ役人達ハ手錠を下し吉兵衛俱々引立て其屋敷へと急ぎ行き大罪人を縛りし由頭役人へ
告たるより早速白洲へ呼出になり一應調への濟し後差添人たる吉兵衛が私し事ハ初次郎を然
る罪人との心付ず彼是世話を致せし處今日計らず御見出よて委細舊惡承まはり誠に驚き申候

右よ付私儀ハ初次郎親父重左衛門殿より豫て大恩請し者ゆゑ斯る時こそ厚恩と謝し申度候へば初次郎が盗み取し金子ハ今日私しより上納仕つり候間何卒犯せし罪の所を御免あるやう願ひ度く然すれば重左衛門ハ勿論私しまでも何計リか有難き儀に存じますれば御開濟の御慈悲をハ偏願ひ奉つると泪と俱に願ひけるよ此時掛りの役人なる磯中權太夫の言ふやうハ何様其方の申所も何彼と子細の有事ならん併し等閑ならぬ罪も其金子の儀ハ此方が暫く預り置く間右の趣き書面を以て願ふべいと有しかバ吉兵衛ハ畏まりて委細認め差出すを一應讀で權太夫ハ吉兵衛よ對ひ其方の明日再び呼出す迄私宅へ歸つて相待居れ初次郎事ハ御法なれば一先繋ぐべいとの差圖よ吉兵衛ハ兎も角も御慈悲を願ひ奉つると尙繰返して願ひ置き我家へ歸つて其翌日同道人を別願み俱々屋敷へ連立て御沙汰を待うら白洲へ呼れ重左衛門等諸俱に權太夫より言渡さるゝハ初次郎儀大切なる金子を奪ひ欠落せ一段御上を輕んじ且ハ又親の難儀を辨へず忠孝二つの道を欠く事其罪甚だ重くして助命ハ叶はざるの處折能くも御上よて御法事の在せられ殊よ吉兵衛も重左衛門が恩儀を謝せんと罷り出で心切成上への願ひ神妙の儀に思し召親重左衛門ハ永の御暇又初次郎事ハ門前拂と御評議の上の御沙汰なり又吉兵衛が差上たる金子ハ御取上の上不淨金に相成べし右有難く御受申せと聞て何れも有難く御禮申

て下りけるが吉兵衛ハ道に待受重左衛門等と我家へ連行き彼是厚く世話をしたれど重左衛門ハ初次郎が金子を取逃なせしより格外心痛いたるにや夫等の爲よ煩らひ出し逐日病氣の重りしと吉兵衛大ひに心配して醫師よ藥と一方成ず介抱すに初次郎も七十兩の大金を償ひ貰ひし其上に斯許り世話となりければ或日吉兵衛に打對ひ親重左衛門も長々の大病なれば全快ハ覺束なしと思ひし處萬事の御世話よ此頃ハ漸次快氣に趣く容子重ねくの御厚恩何の世よハ報すべきと泪乍らよ禮と述べ夫より後ハ我と我身の放盪と悔悟して何時か本心に立歸り朝夕親の介抱より吉兵衛の身の事までも萬事よ氣を付私しなく最眞實しく働き居しが重左衛門も年の爲にや一時ハ次第よ快くなりし病氣も再び重くなりて終に空しく成しよぞ初次郎の歎き言ん方あく扱有べきよ非ざれば形の如くに吉兵衛が野邊の送りとなさしめしが扱世の中不幸不幸昨日と替る人の身も替らざりしハ此方なる吉兵衛が家の賑ひにて晝夜の分ちも新玉の年立かへる始めより博奕酒食と全盛ある中よも拾子幸藏ハ兎角よ家に靜居す所よと遊び歩行しが四五日家へ歸らぬ故吉兵衛夫婦ハ狂氣の如く案じ暮して俱々よ彼の發明の生れなれば人よ欺され遠國へ行くやうな事ハよもあるまじ然れば天狗杯に攫はれしかと此處乃占ひ彼處の祈禱と日々物入大方ならず彼初次郎ハ大恩ある夫婦の心配する事故食事も忘れで晝夜と

なく所々を廻りて幸藏が行方を尋ね求むれ共風の便りもあらざれば斯と夫婦に告たるよ今は詮方泣ばうりの諦らめられぬ胸の中を押沈めてぞ居たりける夫と知らざる幸藏の自分一人で育ちし如く思ひ定めて我儘にも先から先へと遊び居一が或日且ある居酒屋よて獨り酒汲み居たりしに相客の者の咄を聞けば是も博奕打ちらき四五人遊よてありたるが一人の男の言ふ様何でも今ハ大坂の彼淀辰よやあ勝ふめへ手下も四十五人もあり博奕者の親分じやあ世間に隠れぬへ人だが實は大盗人といふ事で嚴敷御吟味ある處を何處をどふして凌ぐり知ぬがなかく近頃の働き者だと云る噂を聞濟して幸藏獨り思ふ様遠き昔一の時代でハ熊坂長範石川五右衛門近代にては日本駄右衛門又神道徳次郎杯末世に知られ一盗人我も乗懸りし船なれば假令悪名なりとても名を残さんと思へ共中々容易よ出来ぬ事就ては世間の金銀は此節兎角不廻りよて金持彌々金を集め貧人次第よ貧しくなり富人三分よ貧人七分の實よ慇然の世の中なれば我は是より力を盡して世よ無慈悲なる富人の金を奪つて一面よ貧しき人よ時散し安樂世界よして遣らん然すれば我名も世に知られん去れども斯云ふ大仕事は後橋なくては成就せまじ幸ひ今聞淀辰を頼んで望を果せ一上生涯榮耀よ暮さんと大膽至極よ志し其居酒屋を立出づ懐中にある僅の金よてそとく旅の用意をなし路用は道よて持んと出掛はせしが心の中我

願ひとは言ひ乍ら斯我儘よ旅立なさハ嘸兩親が案じられんと思ひ出いて此方を振向き頼て歸つてお詫申せば赦させ給へと伏拜と流石不敵の幸藏も親の情に後髪引る、心を勵して足を早めて行程よ早芝田町一丁目の角の處へ差かゝりぬ

○幸藏信濃屋女房を計る事

并お松密夫を引入る事

扱も鼠幸藏は今田町迄來かゝりしよ向ふの方より來りたるは廿五六の中年増上着の小袖は結城縞に黒七子の通し半襟下着は小紋縮緬にて厚板の帯を和はり纏微醉機嫌のほんのりと櫻色なる其眼元の仇成姿よ幸藏は生れ付ての女好き故一目見るより見惚つ、思はず跡を付て行しに或裏店へ這入たり此方ハ側りの水茶屋へ腰を掛けて休み乍ら若姉さん今此所を通じて行た仇な女は何れ近所で評判だらふと餘所乍に尋ねしに茶屋の女は打微笑貴方も御氣が有ますかと云れて幸藏笑ひながら氣のなきにしも非ず夫だが不んの眼の正月お庭の櫻で詮方なし併しあれは圍ひ者か但し一人の女房かと再び問ば女の言ふ様今のハお松さんと言ふ亭主持ではございませが此節ハ御亭主の信濃屋藤助さんハ毎歳の通り糸反物類を上州へ仕入に御出なすつたので只一人にて御留主中と問ぬ事迄語るをば幸藏聞て思案あし腰より矢立を取出し用意の紙へ

さらく手紙の横成ものを認め懐中なして茶代を置き大きに厄介と其處を立出夫より御殿
山又ハ泉岳寺杯漫ろ歩行して日を暮し漸々入相の鐘を聞て先見覺へ置し裏屋へ這入彼女の
家を尋ね格子戸を明て内へ這入田舎詞の作り聲ハイ些御頼み申ますと言へば女房お松が立出
何處から御出なされましたと言ふに幸藏會釋して藤助様の御宅ハ此方ハ私ハ上州より參つ
た者委細の事ハ此手紙にと以前の手紙を差出せばお松ハ取て押戴き是ハ御世話様マア此
方へ御懸遊ばせと煙草の火杯愛想よ出して尙も挨拶しながら手紙を見るよ上書よハ江戸芝田
町信濃屋藤助宅とあり封を押切讀下せば

一筆申入候此御方ハ年々上州へ參る節商賣物の仕入よ付御世話ハ相成る御方ハ候其上返
留中は御家内方も御深切に御世話下され候處今度江戸へ御用向よて御出成れ候儘何卒
く我等よ替りて御禮申上べく定めし一日か二日の御逗留可有之とすれば旅籠屋へ御
出も資成故我等方へ御宿申御馳走さるべく猶我等事は指を痛め候まゝ代筆を頼み申送
り候吳々も御頼み申入候し

お松の

と認め有故お松ハ少しも疑はず幸藏に向ひ扱は夫藤助よりの手紙よて委敷承知致しましたが

毎度宿にて御世話さま成ますとの事サ、何卒御上り遊ばす様と始めよ替る愛想に幸藏ハ仕
濟したりと心の中に悦べど夫とハ言ず辭儀をして否是より馬喰町へ參つて宿をとりますと
言ふを松ハ無理よ押し止め左様よては私しが跡で夫ハ呵られます故兎も角貴方一夜成とも何
卒御泊り下されませぬ御草臥でござんせう何御遠慮にハ及びませせん先洗湯へ行つてと日和
下駄杯貸與ふるに幸藏ハ草鞋を脱ぎ折角の御深切左様あら御厄介よ成ませうと風呂敷包をお
松よ預けて洗湯へ行ければお松ハ酒肴の支度をなし歸りを待に程もなく幸藏が立歸りて座敷
へ通れば此方のお松ハ膳を拵らへ差出して今日は生憎時化にてお口よ叶ふ物のあけれど先御
一ツと差出す猪口を幸藏受戴き尙叮嚀に會釋して手土産さへも持參らぬに斯様の事にてハ恐
れ入る決して御拵ひ下さるなと言つ、受し盃蓋の酌ハ見初しお松が手元貌を肴よ心嬉しく相
と頼めば此お松も少しは飲る様子故是では頼ひも叶はんと程を計りて猪口を納め飯もお松よ
盛せつ、十分ハ腹を拵らへし後お松が二階へ床をのべサア御休み遊ばせと煙草盆杯持上るよ
幸藏ハ仕事ハ夜中と心の中然様なればお先へと二階へ上つて床よ臥し此二階の真中よ明り
取にや三尺四方の格子あるにぞ是究竟と此窓より密と下を差覗けばお松は邊りを取片付其處
へ自分の床をのべて悠々煙草を蒸し居しが遂に屏風を立廻して獨り寝いり様子なり幸藏こ

れを見済して暫らく考え居る折柄早二更とも覺しき頃入口の戸を剝啄くと窺かよ叩く曲者あり幸藏聞て怪しむ乍ら又も格子より差覗けばお松の無言よてそつと起出門の戸を明ると頭巾よて貌の定かよ見えぬ共年の十八九位の艶男入來るをお松の手をとり屏風の中へ引入ながら二階の方へ指さしするハ泊り客の有事を知らずる故と知れたり斯て二人ハ床の中果敢なき夢を結ぶ様を見る幸藏ハ心の中此奴密夫と察せし故二階をそつと忍び下り妙をハ得たる手練よて門の戸明て表へ出彼奴の歸りを待との知ぬ二人ハ又の逢瀬を約し送らるゝ戀中に人目あらじと門の戸明け脊打叩くお松よりハ彼若者ハ有頂天心も空によろめく足元うかれながら踏一めていそくと一て歸り行

○伊勢屋の番頭内濟を頼む事

并幸藏戀慕の念を晴す事

斯て幸藏ハ若者の跡をば附て行たるよ芝七曲りなる土藏作りの米屋の門口打叩けば内より夫と潜り戸を明ると待受け若者ハ直に奥へと通りたり幸藏續いて這入や否や大聲揚て吐鳴やうサア信濃屋の間男を慥に見届けた上からハ直ぐ家主へ懸合て上へ願ふと聞よりも年頃六十許りなる喜助と云る番頭が忙て其處へ走出一先々靜に頼みます斯夜更ハ何事よやと言に幸藏猶

聲高く夜が更やうとも明けやうとも那信濃屋の亭主の留守へ忍び込だ密夫ハこの家の亭主ハ息子カ知らぬが斯見付し上ハ表向と言ふと喜助ハ押宥め先々靜よして下され能お咄しを聞し上何様とも御相談致しませ私し事ハ此家の番頭喜助と申者なるが知るゝ通り此家も世間知られし米伊勢屋其様咄しが發としてハ實も蓋もない不評判さて其方様の信濃屋の御亭主なるかと問かけるを幸藏ハ頭を振り私ハ信濃屋藤助殿ハ餘義なく頼まれて上州より態々今度來りし者其仔細と云ハ外ならず藤助殿ハ上州へ商ひ物の仕入よて此節留守の事あるが親類中の何某より手紙を送つて知せたハ留守中家内のお松どのハ不取締の様子故早々歸て始末を付よと拾置難き事なれど肝心要めの仕入物が未だ極りも附ずに居れば中途ハ歸る譯ハ行はず依て取敢ず私を頼み先々家の様子を見届けいよくお松が男狂ひをして居るやうな事あらハ相手ハ家主へ預け置きお松ハ一先里へ歸して萬事私ハ歸る迄留守して呉よと願れしも兄弟分の好身故と請合て此地よ來り昨夜彼家へ泊つて居て見願はしたる密夫も此味のある米伊勢屋相手よ取て面白いサア是から家主へ男の預りとりよ行ぞと出んとする番頭喜助袖を捕へて幸藏を種々様々に宥めつゝ心の中に思案するやう扱々不計事こそ起れり若表向にある時ハ其當人の若旦那又親旦那の言もさらなり此番頭の喜助迄が實ハ世間の物笑ひ兎角内濟より外なしと直

様帳場の引出より金子五十兩取出し段々どのお咄しを聞まして面目もなき此仕合若此事が表
 向と成上の御當人の勘當とも成べき騒ぎ故其處を貴方が呑込で丸く納めて下されよ是は私
 が心許りの進上もの酒杯飲で何分にも御亭主さんへの内々にと只管頼むを押戻して番頭さん
 此前許り只宜様に言ひなされるが左様へ行ぬと云ふ仔細今此事を私にが穩便に済したとて後
 日に至つて願はれた時私も兄弟分の好身を欠き又商ひ先をあくすと言ふもの夫や是やを思ふ
 又付け此相談の御断りとすげなく言れて番當の成程夫も御尤も併し斯云ふ事柄の世間よあ
 と言ふでもなし又表向願はれても首代七兩二分出せば内濟よなる事なるが何分世間の評判を
 厭て頼む御相談と言ふ折奥の方に當り是喜助さんくと呼ぶ聲聞て番頭喜助の暫く待て下さ
 れと奥へぞ立て行にける跡は幸藏心の中扱の息子が呼しならん密夫代も直段が増んと嘲笑つ
 待て居る中喜助再び出来り是はく御待遠でござりました扱只今の一件も段々と夜も更お
 前さんも旅の御方手間を取ての御迷惑と御察し申して此金子百兩差上申しますれば是で何卒
 能様は内濟の事を頼とます夫とも其方で何有ても不承知ならば是非があい望みの通り家主よ
 り預りでも何でも出させませうが夫での餘り飽があく殊更互ひに不評判を求める譯ではあり
 ませんかと云れて幸藏仕済たと歡び段々との御譯合番頭様の御心盡して折角出されし其百兩

私か確かよ請合ましたと百兩の金を懐中して左様から番頭様今迄の事は是切よと其家を出て
 又再びかの裏家へと立歸り入口の戸を剝啄く叩け居て居るお松の目を覺し又米伊勢屋の
 息子が來しかと咳嗽ばらひいて例の如く入口の戸をそつと明れば豈計らんや昨夜泊りし上州
 客よてありしよぞヲヤク二階よれ出と思ひの外今頃外から御歸りありしは是や何の間に
 られしと呆れしお松が様子を見て幸藏の笑つ共所へどつかと安坐をかき何の問などとお
 内室様夫りやあ前前の事せう此門口を叩くのハ米伊勢屋の若旦那より外にハ決して有まい
 と平常に極た譯かハ知らぬがエハハの咳拂ひの合圖で明て貰ふのが私も誠も戀しくなり
 一寸敲いて見たのさと云れてお松の仰天し尙此事が上州の夫よ知れなば一大事と胸轟て仰向
 を幸藏の背中を敲き御内室様那程の御樂が有乍ら今更何の初心らしく鬱で居る事が有もの
 かね此私進も木や石で拵へたと云ふ譯でいなし是ハ斯だと御咄しから其處の壁に云ふ通り魚
 心あれハ水心さ上州に居なざる藤助様も實ハお前の顔形の美しいのよ心配して江戸へ行なら
 外へ泊らず私の家へ寄て様子よ氣を附け若男狂ひでもして居るなら先の男の家を見定め女房
 の里へ一先返し跡ハお前が留主をして私の歸る迄待て呉よと夫ハくくれくお頼みまだ
 外種々と話し合た事も有ますが其前とて一人寐の淋しき儘に色狂ひも深みへはまら

ぬ其中に心を改め翌日から堅く留主を成るがい、其所で米屋の色男も今私が能懸合て再び此家へ來ぬ様に固く約束して來まゝた夫に就ては御内室さん其方の何と思ふか知らぬが私の身よも成て見あさい那二階の格子から床の中での楽しみを熟々見て居た心持それを是から此夜更よ又も二階へ上り込で獨りで寝られる物でせうか否でも有ふが夜明迄其方と一所よ寝かて下さい其所が魚心めれば水心で藤助様への話向い私が歸つて何とでも其方が歸りを待たせて心から苦勞をして居るとか何と彼とか嘘で丸めて甘く安心させるのは是此私が胸一ツお松の手を取引寄せれば此方も少く安堵して氣を揉む事も長煙管烟艸吸付差出い今と成ては其方様へも何だが誠にお耻しく何卒今宵の一條へと口數利ず流し目よ見やる眼元よ幸藏の心の中に此烟草が三々九度の盃盞ならんと押戴いて吸終りに松の床へ轉がれば否應なしよ引廻す屏風の中の睦言夫を重ねる小夜衣筑摩の鍋の尻癖早き淫婦が馳走の居膳を幸藏素より解辭義おしに其取箸も膽太き已れが氣質の盜喰淺間一かりし事共なり

○鼠小僧悪者に付らるゝ事

井清兵衛夜盗の手引する事

扱も鼠幸藏の計らず途中で見初たる女と枕を替せしより其煩腦の思ひを晴し翌日出立なさん

とせしに松の猶も密夫の事を隠し貫のんと思ふより金十兩を差出い餘別なりと送るよぞ幸藏の牡丹餅で頬邊叩く心地して此處よ名残の惜けれど氣を取直して松は向ひ藤助さんへの私の腹で宜なり計らひ置ませうと安心させて立出つ、計らず大坂への路用も出来先宜つたと獨り歡び前夜の事など思ひ出して笑ひあがらよ六郷の渡しを越て川崎の宿を打過行きたるよ我行跡より聲を揚て若旦那くいやはや誠よ久し振是うら何處へ御出なると言はれて幸藏返り熟々見るに其状の小さき風呂敷包みを背負股引草鞋に半合羽で旅刀を差込だ一向見知らぬ男故不審いどの思ひ乍らも大方親父吉兵衛が博奕仲間の者ならんと思へば程宜く調子を合せ實の私にも思ひ立て伊勢へ抜參りをする旅あれば決して親父へ沙汰なしにと言ふのを聞いて彼男が夫の素より承知く私も幸ひ名古屋迄用有て行譯ゆる夫なら一所よ參りませうと言へるの何だか怪な事と胸に當りし幸藏が此奴の貌を情々見るに一癖あるべき面つきゆる一番此奴をお先に遣て一働きをせんものと空さず咄を一作ら行よ此男も心の中よ此野郎の高の知れた晝飯位の代呂物と蔑視あがら言ふ様へ最ふ若旦那晝飯の如何でせうと勸むると打點頭て幸藏のさうと時分も宜らうと神奈川驛の或茶屋を見立て二人共處へ這入れば茶屋の女が三四人何れも江戸の者と見え愛想を能く饗應すよ二人の直様足を洗ひ俱々奥の座敷へ通り女

を相手に酒肴を十分出させて酒宴をなす中彼男の言ふやうの若旦那此道を御存じあるか知
 ませんが是から先の程が谷で夫より戸塚の宿まで凡そ二里餘もありませうが此戸塚の宿と
 言ふの昔一盗人數多有て處々方々へ押込だり又の旅人を惱めて益々亂暴しておた處爰は不思
 議な事の有たの彼盗人等が或家の夫婦を惨虐に打殺して金銀衣類を盗み取とサア其夜から往
 來へ二人の靈魂顯れ出て逢人毎に泣叫び恨みを返して下されと悲しい聲で頼む處或夜一人の
 武士が通りか、つて幽霊に逐一仔細を聞たより其盗人の吟味嚴しく終に十人召捕れて直襟に
 架られたを所の者の崇りを恐れて十の塚を立たの由を實の十塚と言ふべきを今戸塚と書と
 か云ふ故事來歴ハ斯の通りと知たり貌に話しかけるを時の興として幸藏が然言譯かと云ひつ、
 も元より如む酒故に茶屋の女に戯れ乍ら尙彼男と献つ酬つ頻り飲で居る中に此方の十分飲
 食は腹を滿へた事なれば時分の宜と立上り鳥渡手水をして來様と庭口差て出かけるを見て取
 る幸藏跡より續ひて私も行て來ませうと立てて此方の南無三寶といつハ一番間が抜たと素知
 む振にて小用を濟せ座敷へ歸れば幸藏も矢張元の座よ着きて又も酒酌替す中微笑ながら幸藏
 が一体其方の名ハ何と云なざるやと尋ねれば私しハ清兵衛と申す而して御前様ハと問ふ幸
 藏ハ心の中切ハ此奴ハ親吉兵衛の近付でも何でもなく全く此方が旅馴ぬ風体を見て付込だ彼

道中の騙子かよ〜〜然云ふ譯ならバ其膽魂を抜て吳んと胸を定めて懐中より小判を一枚取
 り出し清兵衛さん是ハ餘り少しだが道中の草鞋錢よでもれしあさい夫から女中を呼て吳など
 清兵衛に三四人の女中を呼せて幸藏が大きに御世話に成ましたマア一ツ宛飲ねハ肴ハ是だ
 と二分金を女に一ツ宛渡せば愛想初めよ百倍して悦ぶ様子よ清兵衛ハ大に膽を潰一ツ、ほん
 の壹飯位の稼と思つておたよ此有様是ハとんだ大目違ひ併ハ斯言う目違ひハ幾許有ても障り
 な〜と心の中よ思ひながらも彼小判を押戻して御心ざしハ有難ひが御前さんも御伊勢様へ抜
 參りとの事なれば路用も多く入事でせうまづ〜是ハ納めあさ〜ハかの譬よも江戸子の登り
 大名下り乞食と云た通りの理合で其行懸ハ有丈の金を残らず奢り散し歸りの柄杓一本で報謝
 を乞ひつ、漸々に江戸へ着のが間々ある習ひと深切ごかしの空辭儀を夫と知れ共幸藏ハ態と
 恐り一面地して一兩位じや不足と言ふのか夫なら十が甘でも欲くば随分遣りもしようと邊り
 を處々見廻して女共の今ハ居らぬを是幸ひと聲を密め己と一所よ心を合せ此海道の分限者ハ
 是ら手引する事から其方が一生安樂よ暮せる程に盗んで遣ふと言ふよ清兵衛ハ呆れ果〜が
 同じく聲を密めつ、夫じや御前も己が仲間の騙子かと笑つて問ハハ幸藏大いに嘲笑ひ夫な
 けら者じやめね〜併し騙子位よハ稼を手引ハ出來め〜と云れて清兵衛小膝を進め左様侮

つた者でないといふ云ふ我等の仲間中で日頃どうかと付現へて用心能故手出のせぬが處ハ三州の田舎でも吉岡村の新田の太郎左衛門と言ふ大百姓ハ凡う四五万兩程の大した分限と云ふ咄一何と是より其家へ行てハ如何と勘める詞に幸藏大よ打悦び能々是から直へ行かふ夫じやあ案内して呉と身支度するを清兵衛ハまめく鳥渡御待ちあせへ私の手下の文吉ハとんだ氣轉の利た奴故彼奴を一諸に連れて行ば随分益にならふと思へば暫の間と立出しが問もあく同道して來り先幸藏へ初對面の挨拶させて密事を告るよ去ば行んと幸藏ハ其處の酒食の代を拂ひ三人連立道中の路用の幸藏が賄よて晝夜奢りと極めつゝ三州路へと趣きぬ

○鼠小僧吉岡村働きの事

并伊勢參りと相宿する事

借騙子清兵衛とかの文吉が案内に任せ鼠幸藏ハ日を重ねて三州岡崎へ到りよ扱清兵衛が云ふ様ハ彼吉岡村と云ふハ是から乾の方ハ當れば其方角へ行ませうと先へ立つゝ在へ這入道程三里許りも行て爰だくと云ふゆゑ幸藏其處立止り太郎左衛門が家の様子を篤と見定め二人は向ひ一先岡崎へ戻らんと元の道へ立歸り或旅籠屋ハ宿を求め湯杯へ入りて打寛ぎ酒酌乍ら幸藏ハ二人は對つて聲を密め御前達の何程の金銀を捕る了簡だと言へば二人ハ口を揃へ

夫ハ慾に限りハ無れど先持る丈けハ千兩でも又二千兩でも欲しいものと言ふ幸藏點頭て夫ら細引の用意をせんと先ハ此家へ來る時覺え居る故文吉に直差圖して求めさせ時刻を計つて宿の亭主ハ私共ハ用事が有て何某方へ行ますから少しの間此荷物を預つておて下さいと願で置て三人連立彼吉岡村へ出行しが太郎左衛門の方へ行きしハ木芽も眠る丑滿頃ゆる時分ハ宜と幸藏ハ様子を伺ひ先達て黒板塀を乗越つゝ文庫倉の方へと廻り竹階子を尋ね來り藏の窓へ掛るや否や自然備ハる幸藏が猿猴の梢を傳ふ如く忽ち上へ駈上り窓の筋金を二三本手早く折て土戸を明け二人を招きて安々と藏の二階へ忍び入幸藏早くも懐中より摺火打を探り出用意の蠟燭へ火を移して藏の下へ至り見るよ座敷めきたる處あり其處の襖を開き見れば何十といふ金箱が積重ね有よ幸藏悦び彼細引にて二千兩と先清兵衛が脊中へ脊負ハせ又文吉が脊中へも二千兩と脊負せて己れハ其處に出ておたる三百兩餘を胴巻へ入て睨くと体へ結付け蠟燭の火を吹消て元の窓より忍び出竹階子を下りて二人を待よ二人ハ何分重さハ重し且金箱が窓へ支へて自由を得ざる處より首を出してハ引込み又文吉も首を出してハ引込みする故幸藏ハ是を見て儲ハ金箱の支へるので重みよ堪兼居るならんと早くも察して小聲にて荷を軽くして下て來と言と彼方の兩人ハとすく大金を捨行ハ残り惜いと思ふより遁れ出んと種々よ心

を碎いて居る折柄兼て非常の夜廻りが見付出せしものなる人聲聞へて提燈の火影が近く見えたるよ幸藏焦つて兩人が顔を出ず度手間似で知せ早く出よと氣を揉めど二人の一向埒明ず尙ぐつくとして居るに最う詮なしと板塀を乗越さんとする折柄忽然耳に音高く亮貝の響聞ゆるよ流石の幸藏膽を潰し漸やく塀を乗越て内の様子を伺へば早竹階子の直下へも火の影ちらちら見ゆるのみか村中の者四方より集り来る様子故今の二人を助ける所此儘此所居る時の俱よ自滅と思ひしより獨り其場を逃出せしが追々亮貝を目當よして竹鎗等を携へたる百姓共が太郎左衛門の家へと寄来る有様見付られしと幸藏の稻叢の中へ身を隠し様子如何にと伺ひ居るよ大概二百人許り太郎左衛門が方へ行しよ驚きながらも幸藏の先己だけの安心したと獨り事を言ふ間もなく又十四五人其前を通り乍ら言やうの彼亮貝の盗人だらふ何にせよ行懸に此稻村を竹鎗で彼方此方と突進さば若逃出した盗賊が隠れて居るも知れねへと咄し合のど聞く幸藏脇の下より汗を流し漸々其所を逃出して本街道へ出たれど宵は宿りし旅宿屋へ今更寄るのも間拔な咄し僅の荷物に置土産と一人心は黙頭つゝ矢矧の橋を左りよ見て池鯉鮒の驛に差懸り彼二村山の古歌の如く玉くしげ二村山の白々と明行末の波路成なりと云るに似たる幸藏が此邊りよて夜を明し彼清兵衛と文吉の末の波路と成果しやと流石よこれを不便よ

思ひ並木を越て漸々に間の驛へと辿り着き朝の支度をせんものと或る茶屋へ入り酒を飲みやうく心も落付たと獨り心は悦ぶ折此家の店の門口に雲助共が二三人寄集つて高聲いやはや夕部の騒動で寐なかつた故か眼が濛いと咄すを聞て此家の亭主が其騒動を如何云ふ譯と言へば雲助差寄てお前さんも知ての通り吉岡村の本身乃太郎左衛門様へ盗人が三人這入込だ所其中二人の召捕たが一人の何所へ逃たので四方八方の出口くへ手を廻しての殿しい詮議と語るよ亭主の打驚き那用心堅固の御宅へまんまと忍び込むと云ハ就中々の盗人だらうが其迹たと云ふ一人の奴も金でも奪れた譯かなと聞け雲助笑ひながら何でも怒りかけねもの跡に残つて捕つた二人の奴の強慾で二千兩宛背れた故藏の窓から出損つて如何する事も出来なかつたが逃た一人の盗人の三百兩餘を持って出たど殊よ跡で調べた處二人の逃て行た奴とハ素より知た中ではなく唯道中から欺されて連れて来た者だと云ふ事何よ成ても利口な者ハ違つたものだ其主の其處よ居るとハ知らずして猶種々とする噂を側に聞居る幸藏ハ飲酒さへも味くねへと思ふ折柄雲助等が問屋をさして行なゆゑ早々其處を立出つ足に任せて歩む中熱田の宮も打過けるが何分獨り物淋く嘶し相手のあれかしと心懸つゝ行折柄年頃廿七八の穢ならしき伊勢參が跡よ成先よ成亂視くしたる風体を見て幸藏ハ呼止め前ハ何處から

出をすつたと問へば此方の會釋してハイ私しは過日頃江戸近邊から出まゝたが終油斷して出懸からお金を遣ひ過まゝして誠に恥かしい事ですが今日は御飯も喰ません御慈悲に一膳振舞つて下さへませんか旦那さまと言ふを幸藏可笑と耐へて夫は嘸かし空腹だらう御前の名は何と言ふハイ八藏と申ます然か實ハ己も一人旅で長の道中淋しいからはからお前と一所歩ふ夫でも私の様を者が何して御道連よなれませう何其遠慮よは及ばぬと或る古着屋まで拾一枚并よ繻袢股引杯買調ひて八藏を呼びこれを着替よと言へば八藏は大きき悦び以前の破れ着物を脱きすて貫ひし衣服と着替る時目早く見しは脊中の彫者身形よ似合ぬ脊中の奇麗さ扱は此奴も騙子かと幸藏心に可笑くなりコウ八公爰等で一抔遣らふりと言ふに八藏日ごとしを見て旦那最り七ツ近ふ御座りますすが今晚ハ此宮の驛へ御泊んをすつちや如何でんすと田舎めきたる作り聲幸藏も實ハ夕部の騒ぎで一夜眠らぬ疲れ身ゆゑ彼が詞よ打任せ夫なら此處へ泊らふと或る宿泊り着て早速に酒と肴を誂らへつゝ座敷へ通つて幸藏はコウ八公一風呂先へ這入て來るから此懷中者を預けると鼻紙入を差出せば八藏は請取て左様ならば御脊中でも流しませうかと言ふを押し止めマア茶でも呑んで待て居なと風呂場とさして出行ぬ

○幸藏金子を奪はるゝ事

并幸藏に吉の妄想を夢見る事

彼伊勢參り八藏と言へるも幸藏が察しの通り彼清兵衛文吉等が仲間の騙子にして此日も己が姿と簀一能き仕事もがなと思ふ折柄年尙若き一人旅の金ありさうある者を見し故付來りしを彼方より却て身形を拵へ呉懷中物さへ預けたるよ八藏心よ思ふやう彼奴ハ若や我を釣る上の役人でのなきかと薄氣味悪くありしもの、彼鼻紙入を探り見れば八九兩の金子あるに何しろ是ハ我稼ごと懷中にして店へ出私ハ少一買物あれば一寸下駄と貸呉よと日和下駄を借受て何國共あく逃去ぬ斯とも知ざる幸藏ハ湯より上りて座敷へ來り彼八藏を尋るよ何處へ行や更に見へず併し預けし紙入ハ其儘其處に有ゆゑよ手に取り中を改むれば小遣ひよとて入置一九兩足ずの金子が見へぬよ扱ハ持逃せしならんいはや小量あ心の奴と少しも悔む氣色なく宿の女を呼びながら胸巻より一分銀を取出して茶代なりと差出せば働き女ハ驚きて一人客が茶代として是まで呉るハ二百か三百夫をバ一分呉るとハ能き福徳の客人と其家の主人に渡しければ主人も早速禮よ出て追従たらしく持運ぶ誂らへ物の酒肴酌にハ家の娘分よてれ吉といへる十五計りの未通娘を粧り立て馳走がてらに差出すよ女好ある幸藏も殊の外氣よ叶ひ藏謙言と言ひ乍ら終飲過せし草臥體今ハ屹度御出よと云ひつゝ、れ吉の手を取に此方ハ未だ小

娘の只耻しきはかりよて赤らむ貌に袖を當てあよなきいと云ふ折しも働き女が床を伸に入
 來りたるに幸藏の其儘お吉の手を放せばお吉の後へ送りながら夫でハ先々お客様御後り御休
 み遊ばせと禮儀を述で行んとするを見て幸藏が眼で知らず娘も心有明の行燈引寄せ甲斐
 なくしくさらよ油を繼足して下女と連立出行ける跡よ幸藏徒然と床よ入しが何分よも昨夜ハ
 一夜寝ぬ故に獨り枕に付や否前後も知らぬ高軒其夜も次第に更行て旅店の者も一統に寐鎮り
 たる眞夜中頃此家の娘分の彼お吉が宵よ約せし言の葉の情よ引され忍來て寢居し幸藏を揺起
 すに此方ハほんの戯言と思つて居たを誠として忍び來りし可愛さにお吉さん先刻から來か
 くど待ての居たが矢張彼宵の待夜中の恨と曉の夢で無益な事だと思つても夢でも宜から御
 前を見様とつい恍々と寢て居たに能く來て呉たと手を取て床へ引入れ初契り結ぶ縁の小娘
 が幸藏よ向ひ云るやう今更お咄申すも益無事とハ思ますすが面強私此身の上茲の家ハ始
 より實の子のなれ處から知合中とて私一が稚い時に貰れて子とハ成て居ますすが此頃聞ハ或人
 の媒人とかで取極た夫ハ一實よ否を男を嫁にするとの事勿論それハ一里先の名主さんの弟
 で其家よハね金が澤山有故二親も欲よ目が昏二ツ返事で受合れ否だと思ふ私しにハ無理往生
 とさせますも育てられたる恩めれば不承知云ふも出來ない悲一とお恥しい事乍ら且那の様な

お方ならと跡の顔とハ赤くして差俯向に幸藏も猶更お吉が可愛くなり私も御前の様を嬢なら
 直にも卑に成度が是非大坂迄是から行ねば事の欠る用が有から早速用事を済して後又來てか
 らの咄じよ仕様と言へばお吉ハ首を振り否々何處へも遣ませんと緊擲着れて幸藏も今更捨て
 行の不便と思ひ返してれ吉を抱寄せ夫あら今より私と一所に直よ此家を亡命して大坂へ行
 氣ハあいかと言へばお吉ハ點頭て如何様事でも御前様と一所よ添れる事ならハ假令山荆林棘
 の中でも私ハ少も厭ひません左様なら早く支度を爲なせへ而して何處から逃たら宜らう
 夫ハ此庭の横手よ塀が有ますから其開きを明て参りませう併し外に大きお溝が有て私ハ
 行れませんから御前さん先へ出て其溝の上へ何なりと渡して置て下さへな其内私しも密りと
 身支度を一て來ますからと其座を立て行跡に幸藏も亦仕度をあしれ吉よ教られた通り庭の塀
 の開きを明け其外の溝を飛越傍りに在し古板を拾つて溝の上へ渡し今やくと待うちこれ吉
 ハ小き風呂敷へ着替の衣類を二三枚外に櫛笄ひなど取纏めやうやく居間を忍び出て庭へ出ん
 とする所を思ひがけおく後より腕と押へた母親が是お吉何所へ行宵からの様子が怪しいと思
 ふた故よ付て居しぞ兼て卑さへ極りに了簡違ひハ何事ぞと涙と俱に異見する此方ハ親仁が
 庭を下り彼開きより立出るに聞き夜なれば幸藏ハお吉が來たと思ひ違へ危ひから手を出しな

と何の氣なしと近寄るを親仁の其手を腕と捕へ待せました御客人私に娘の父で御座る宵から御前と娘の様子少訝しいと見て居た所案の如く娘めが今逃出さふとせし故に母が見付けて取押へ彼是異見のしてゐるもの、實に娘の罪とて未だ結納の取替せを済したと云ふ譯でハなし夫よ就てハ御前様ハ江戸の生れのお方と云ふ事好た中から片々ハ断りますから是客人罪よ成てハ下さらぬかと頼む詞に幸藏も流石に何分間が悪く頭を掻きく云やうの今更となり親仁さんハ誠よ面目次第もないが罪よ成れる位なら斯して逃ハしませんと云ハば親仁ハ泪聲よてハ前も娘よも聞か知らぬが吉ハ私の實子でなければ幼い時から育つた娘御前に連れて行れてハ相續する者絶ると云もの然れば御前も私ハの頼みを聞いて呉ぬと云ふ譯なら障りのないやう此儘に今宵の事ハ諦めて跡で思つて下さるな少一なれ共草鞋錢よ是を進ると懐中より金拾兩取出して頼むと幸藏押返一私ハ素より金づくで色事あど致しませんお吉様と言ひ替へた事も有故別れる共又別れぬ共逢ふての話し金よ目が昏れ約束と無よするやうお事をしてハ實よ男が立せまんと言ふと親仁ハ打案一夫ハ素より御前の氣質併し是ハ私の寸志マア兎も角もと近寄て袂ハ入んとお一けるを其ハ受取じと争ふ機會に如何なしけん幸藏ハ足を這らし大溝へ眞逆様よ落入ける嗟嘆と一聲叫び一が此ハ是南柯の一夢よして早明近き鐘の聲よ驚き覺し

幸藏ハ身の冷汗を拭ひ乍らア、馬鹿氣た夢を見たと起上らんとする折柄彼娘分のお吉が来て煙草盆を出しつゝ御目覺なれば客様御手水を御遣ひ成いませと言ふ貌情々打見遣は昨夜見しとの雪と墨顔よ付たる白粉の處班らに兀たる跡へ痘瘡の痕さへ顯れ一よ色氣も覺し幸藏ハ一人心に可笑くなり朝の支度を調べてそこ一此家を立出つ七里の渡一も打越て既に桑名に懸り一よ夕部酒をハ飲過て最も敢果なき妄想よ心氣を痛めし譯なるよや俄かに瘴氣の差込みしが宿よは離れ一處故藥を飲よも詮方なく且見れば大概半町計り横手の方よ蕪膏の小家あり一と幸ひと其處を便りて到りける

○幸藏途中病氣貧家を頼む事

并孝女を憐む事

幸藏ハ彼小家に這入私ハ旅の者成が急よ瘴氣で難義する故少し此所を貸て下され猶無心乍ら湯を一つ振舞はれよと云と聞き實子の上一二枚折の古き屏風を建し中より歳ハ十四五位の娘その顔形ハ相應なれ共未だ春寒き三月の下旬あるに古襦袢を一枚其身よ纏しのみ髪の状態一何結びしや油氣もなく茫々とする影もなきが出來りて夫ハ嘸御困で御座りませうサア御遠慮なく且那樣此方へお掛あさいましと姿に似合ぬ物和らかく甲斐一しくも欠椀一温湯を

汲で出すにぞ幸藏これを押し頂き懐中よりして丸薬を出して漸く飲終り暫く休み居る中に思
 の外より早く落付先安心と煙草をば蒸し乍ら夫となく内の様子を窺へば柱の屈曲壁の落彼の破
 れたる屏風の中に人の喚く聲のするにさては那方に病人にても居る事ならんと思ふ中彼娘の
 子が水を汲て裏の方より来りて故幸藏娘に打向ひ御蔭で大きに快く成まゝたがあの屏風の中
 に寝て居なさるの御病人でありますかと問はば娘は打萎れハハ御親父さんで御座りますと言ふ
 又幸藏又聞やう見れば御前とアノ小さい男の子計りの様子外にハ別に看病の仕人もないので
 あるかと聞けば娘の涙を浮べてハハ私しの御母さんハ四五年前に亡なりまして弟の太吉ハ未
 だ八歳御親父さんハ今年で丁度五十一でござりますすが去年からの長煩ひ此村の庄屋様も種々
 御世話もして下されど何を言ふも老の煩ひも醫者様の仰やるにハ人參とやらを盛さへすれ
 ば屹度愈ると言事あれど夫を買はハ大壯のお金が入るとの事故も私しも當惑致しましたか或
 人のお話にハ勤め奉公とやら行けばお金が出来ると申事ゆゑ直其人に御世話と頼み今日
 參る約束よして置きました事なれば頼て連に來て呉ませうが何私ハ御親父さんの此病氣さ
 へ愈りますれば何な苦しむ勤めでも堪へて致します心とハ申しあがら私ハ居らずば跡の看
 病は僅か今年八ツも成此弟には出來ますまいと思へば夫が何分よも心懸りで御座り升と泪と

共よ物語るを聞く幸藏も胸塞り貫ひ泣する袖の雨涙を拭ふて娘に云ふやう不思議の縁で此私
 も俄かよ發りて病氣が癒り今又御前の孝行を聞け開程我不孝親を見捨て遠國へ斯の通りの我
 儘旅年は御前よ増る共心の劣る私の上就てハこれはほんの寸志と金三兩を取出し是で病
 人や弟の着物且ハ御前も寒からうから早く何でも着るが能い又其残つたお金を以てお米を買
 て來るが能い私も一膳御馳走よ成度からのふ姉さんと云はれて娘ハ飛立許り嬉しけれ共心の
 中始めて逢へ其人に金を貰ふの所謂はなと思へば疾よハ受取ぬを夫と察せし幸藏が種々様
 々よ慰めければ娘ハ悦び押戴き夫でハ仰せに隨ひまして買調へて參りませうと襦袢の前は合
 せても膝から下の顯出しの脛をハ包む前掛ハ形作りて出行ぬ跡に幸藏ハ彼弟の太吉が遊び居
 るを見ながら煙草を蒸し居る折柄年頃三十位の男田舎者よハ氣の利ハ小紋の羽織を引懸しが
 内を覗てお市さんはお市さんと云乍ら這入來れば娘ハ居らず其所に幸藏が居るを見てハハ御
 免下さいますし私しは近所の者過日既に此村の庄屋殿始め相談よて此家の娘のお市さんを勤奉
 公に買入る其約束も調ひまして金子を持參致せしが娘ハ何處へか參りましたかと問れて幸藏
 會釋なし是ハハ 此間中から色々深切の由承まはり眞よ有難ふ存じます私ハ事ハ此家に
 些遠縁のある者よて疾より難澁致す由ハ送り越したる手紙にて承知ハ致して居りましたか何

分商賣の闘しさに終々出兼ました處漸々此度大坂へ用事を兼て出立致し今方参り合せたばかり那市よハ種々買物をさせ遣はしましたのが最私しが参る上の勤め奉公も及びませぬ故折角の骨折乍ら此事ハ破談よ頼申たし是ハ誠に輕少乍ら着でもと金を一兩紙よ包んで與ふるに彼男ハ悦びて夫ハ誠に結構の事實ハ私しも斯様の事よて活計を立て居ります此家の娘のお市さんハ實に評判の孝行者家業よ致す私一さへ心快ない勤め奉公夫を貴君が御出に成て是が破談よ成りましたハ誠に機宜の事私一も嬉しく思ひます併し多分の御祝儀を頂きまゝては濟ませぬが折角の思し召れ有難く頂戴と金を懐中よ受納め左様おればお容さませ又々御目よかりますといと早足よぞ立歸る跡に幸藏ハ心の中金さへ貫へハ能のだらふよ世辭を言て行をつた夫ハさうと市とやらも最早歸つて來るだらうと眞黒よ成一自在竹に茶釜を掛て居爐裏の中へ枯枝杯を差入つ火を焚待こそ殊勝なれ

○幸藏大坂へ到着の事

并近江屋喜左衛門が事

幸藏假令悪人なるも富有の人の金を以て他の貧人を救ふと云ふ其志操は格別なり然れば不淨の金銀も孝女の爲には天の恵み娘お市は庄屋へ行て救助を受し事を話し夫より街道の藥種屋

よて一兩目の人參を求め又質よ置し病人の夜着布子杯より弟太吉が晴着とする松葉色の裕と春駒を染出した小立の綿入自分は亡母が手織の布子彼是俱に受出し其外米味噌買調へ近所の友達娘を頼み其品物を二人運にて携へつゝも立歸るを幸藏手傳ひ運び入れ其友達娘よも小遣ひ杯を遣はして猶彼是と世話をやくにれ市は彌々喜びて何から何迄調ひまして此様嬉しい事は有ませんサア御飯を焚てと云ふを幸藏堅く押し止め實は私ハ空腹ないが御前が遠慮をするゆゑに先刻の様よ云ふたのゆゑ飯拵へは跡の事早く病人に藥を上げて能く看病をして進ませい夫から先刻勤め奉公よ世話をする人が來けれ共私が江戸の縁者と云ふて夫を斷つて歸した故其邊の事は其積でと云つゝ又もや懐中より金子廿兩を取出し御前能く聞なよ此金を上るか何か商賣でもすると云物か田地でも買といふ物か庄屋様よでも又は外に深切の人を頼み申とも能様にきて貰ひなさい何でも御親父さんを大事にせるが一番肝腎の事だよと金子と市よ渡ければ此方は大いに肝を潰し此様よ澤山頂きましては濟ませんからと押戻すを幸藏は手よも取す私ハ路用も澤山あるから決して遠慮よは及ばない若も人が此金は誰から貰つたと聞たなら以前御親父さんの懇意の者が江戸へ出てから運が向き今は立派な商人よなり此度幸ひ大坂へ仕入に登つた道すがら尋ねて今の難儀を救つて呉たと言て置きぬ夫でハ御親父さ

んも能く寝て居なざる様子故私は逢ずに行程に宜敷申ても呉よと言ひつゝ幸藏立上るを市
 は襦袢の袖さへも嬉し涙は絞ながら只今御膳も出来ませうからと止るを幸藏袖振拂ひ縁が有た
 ら又逢ませうと道を急ぎて行過る跡にお市は後影の見えず成ても伏し拜みぬ切幸藏は道々も
 能き善根としてけりと心の中は悦びつゝ幾日か重ねて目ざしたる大坂へと到着し其頃天満の
 邊りにて近江屋喜左衛門と言ふ評判の大家の旅籠屋へ宿を求め我は江戸の者成が尙連の者も
 三四人跡より此家へ来る約束故何卒か別間を借たしと小判一枚茶代に出せ黄金の色に迷ひ
 ぬるは何所も同事にして直に心を奥の間の離れ座敷へ案内して下へも置ぬ饗應先幸藏は湯
 へ這入酒と肴を誂らへて夫々女は祝義を遣り緩々酌をさせ乍ら姉さん一寸御願ひだが内の旦那
 那が在宅ならお目よ懸つて私一が御開申度事があるから御開敷も少の間来て貰ふやうに傳ひ
 てお呉と頼むを聞て其女が夫は誠よ憎生さま程程日那は他出して未御歸りにありません故
 如何の事か今晚の逆も御間には合ますまいと云るよ幸藏打黙頭イヤ何強て急ぎはせぬゆゑ歸
 られたら翌日でも宜から亭よ云ふて下さいと頼みて其夜の床よ臥し初翌日も草臥直しと朝
 より酒を取寄せて女と相手に飲ながら亭主の歸りを待居りしに其日の巳の刻過る頃主人喜左
 衛門が歸りし由にて昨日の茶代の禮とて酒の肴を持参して只今御目に懸りますと下女の知せ

よ幸藏の然であるかと打悦び相手の女に酒肴を猶十分誂へさせ亭主の來るを待中よ四十計
 りの人品能き男が程なく出來り我等の當家の主人なる喜左衛門と申す者と時候の挨拶杯をし
 て何か私へ御尋ねの御事有と申事如何成子細よござりますや早速仰らるべしと述るを聞て幸
 藏は尙叮嚀よ會釋なし先一献と盃蓋を献せ主人は受戴き暫しが程は四方山の咄し時を移せ
 し折酌の女が店へ行しを見て幸藏は喜左衛門に我等が御身に尋度と云しは別の義も非ず今
 此大坂よ名の高き淀辰といふ博奕打の親分ありと聞居たるが定めて御身も御存知ならんと問
 よ主人は胸の中飛だ事を聞奴なり殊よ年は若けれ共一癖有べき面魂ひ何よもせよ試さんとシ
 テ其淀辰と云ふ者に何か御用有ての事か勿論土地よ名は高けれど誰とて顔を見知り者なし御
 身様は何の譯で御尋なると問返され夫と打明云れぬ事ゆゑ別よ差たる用事はあけれど名高
 い人故一遍は逢て置き度と思ふふあり就ては亭主の世話にて引合せ下されまじきや如何
 でせうと又問主人は少し思案せしが夫は随分私しが其手續きを以て開合さば知れざる事ハ
 有間敷然らば今夜隠密と我等と一所に出出れ此所の博奕の流行土地也其道の人を頼みて
 見んと云れて幸藏大に悦び左様ならば何分よも宜敷は頼み申ますと夫より酒宴よ日を暮せし
 が喜左衛門の夜に入しより時刻を計り率とて幸藏を催がせ幸藏も亦身支度して俱に道程一

里も行しに既に大坂の町家を放れ何と云る所か知らねど大川へと来りければ喜左衛門の岸に繫ぎ一小船幸藏を乗せつ、俱に向ふの岸より移り夫より平山を打越て生茂たる並木を行に其木影より八九人の大の男が長脇差を横へ乍らのさくと其處へ出掛て来りしに幸藏不審の者共と思ふ折柄其者共の喜左衛門に打向ひ頭今夜の早きは出と云を喜左衛門の打笑ひ今夜の珍ら敷客が有て一緒に連れて来しなるが何か得者の無つたかと云へば彼等ハ口を揃へて未だ此通り宵で御座れハ別段得物もありませぬ後程は目も悪らんと何國ともなく立去ぬ

○鼠小僧淀辰よ對面の事

井淀辰奇術を見する事

扱も幸藏ハ喜左衛門の様子を見しより盗人と推量せし故心中阿笑く思ひて云ひけるハは亭主今の人達のハ身の手下と見受しが开も實名の何と呼ぶ、匿まず聞せて下さいと云へば此方の笑ひながら何と隠さう此私の浮主が尋る淀辰なり今のハ實に察しの通り私が手下の者共よて外にも四十人餘あり先きには主が淀辰よ逢ひたひものと云ひしか共壁よ耳ある世の中故頼にハ名乗明さいりしが私もは主を仲間の者と早くも推察なせし故爰迄連れて来た譯じやと云ふよ幸藏打驚き扱ハ此地よ名も高き淀辰親分よて有しか然とも知ず先刻より慮外の段ハ眞平

は免斯申上る私しハ江戸江川町に住居なす鼠吉兵衛と申博奕者の倅幸藏と云ふ者なり何分此後ハは懸意よと禮義を盡して又云ふやう扱親分が私しを仲間の者と知れハ如何の譯と怪しみ問バ夫ハは主ハ知るまいが昨日茶代と出して呉た那小判ハ豫てより慥かよ見覺へある金よて岡崎驛の在所成吉岡村よ知られたる太郎左衛門が所持の金証據と云ふハ小判の端よ片假名のクの字の極印夫も一枚か二枚なら又兎も角もと云ふべきなれど二三兩所持の様子ハ今日酒盛の其時よ此黒い眼で見抜しなり殊に巖垣彼家へ盗人三人押入て四千三百の大金を奪ひ去んとしたる時二人ハ其場よ召捕れて四千の金は取戻されハが三百兩を懐中せし一人ハ行衛知れざるより其被縛し二人の者より逃し一人の容子を糺し人相書にて詮議をば嚴敷すると云ふ事を手下の者が聞傳へ昨夜私への咄迄により主ハ其夜逃去し一人に相違なからうと私ハ驚より察したりと云れて幸藏感心あし流石ハ親分眼ハ高い實ハ御察しあすつた通り吉岡村を逃去し一人と云ふハ即ち此身且又外の二人と云ふハ清兵衛文吉と云ふ奴よて高の知れたる護魔の灰元來餘まり強欲にて私が金をば減せと言を物惜みして彼是とぐづぐづしたより召捕れ憂目を見たハ懸然あれど夫ハ今更詮方なし借今我等が遙々此地へ来たハ外あらず世上の金銀不廻よて貧乏人のみ澤山なれば我心願よハ富有の者の金を残らず盗み出して湯水の如く遣ひ

捨我身の榮耀を爲すの勿論又困窮の者共へ施し呉んと思ふなれども中々江戸の中にては多くの金を取出し難く此大坂の昔日より金の集まる處なれば此地に於て働かんと思ひ極へたもの、我一人の力にて成し負すべくも非ざるより豫て江戸にも評判ある親方の名を慕ひつゝ助けを受度参りしなり何卒今日より力と成て私の願ひを遂せさせてと言を聞より淀辰の其大膽を譽そやして其の面白く私も手下の多くあれどまさか江戸まで此身の名が通つて居るとの知ざりしが斯まで聞えて居し事か此高名の身の譽れ但しは是が不仕合か身の浮沈みは知れぬ世の中何しろ人の相見互ひ此末早晚私とても江戸へ行まい物でもない就ては主へ近在の印よ今宵大坂の手始め仕事は直是から能い手引の處あり先々當座の金儲とさせてやらんと言ふ詞は幸藏こよなく打悦び此上共に宜様よお頼み申と云寄を聞く淀辰は點頭て去れば主は暫時の間私が言語に従はれよと先兩眼を共し塞がせ夫より一個の切包みの様あるものを幸藏の懐中へと押入れつゝ此身が可と云ふ迄の眼を開ひてはならぬいと堅く戒め手を取て二足三足行ければ俄に聞ゆる三味線太鼓其音さへも調子能く殊の外ある賑ひよて女の聲杯手に取る如くやんやんの大騒ぎよ是の妙だと思ふ折柄いざ眼を開ひて見よと云れ幸藏發と眼を開け此處や彼所に提燈燭臺燈し連ねし有様の晝を欺く許りにて數多の女が舞唄ひ全盛言はん方も

なし然るよ斯程多勢の中よ幸藏のみ見物すれど誰とて咎むる者もなきよ不審を起して居るを見て又淀辰が目を塞げと差圖するゆゑ幸藏の以前の如くなしけるを又もや二足三足歩行せ薄闇の所に至りしと心に思ひ當りし時又目を開けと云ふ故よ再び目を開き見るよ其兩側よ金箱がひいと積重ねありければ幸藏俄かに横手を打ち成程是の不思議なり先金箱を一つ取んと手を出し懸れば忽ちよ今迄少し明るかり座敷も何時しか眞の闇さて残念と思し何と何と愛迄来たものを取らずも歸るも馬鹿氣た談しと何探り寄て其箱へ手を懸持とあつたるに何とかしけん底をも知ぬいと大なる落し穴へ眞逆様に陥りたり此方の淀辰聲をかけ首尾の如何だ問けるも幸藏夢の覺たる如く只忙然として居るを淀辰大ひに打笑ひ是式の事に驚く事か確りせよと言れたるよ幸藏甚だ膽を潰し扱々奇代の妙術か親分とも頼みし上此妙術も請たしと言へば淀辰考へて成程餘人の兎も角も膽を見抜くは主故我此奇術を譲つても苦しからざる事なれど是の容易になし難し扱其仔細如何と云ふ術を受れば一生涯女の肌ハ觸ぬなり若誤つて身を汚さば立處に命を落さん然れば是はよしよして外に與ふる守符あり是を肌よ付置時ハ走走る事自由自在必ず大切に所持すべしと懐中より取出し渡すを幸藏取て押頂き肌よ付れは淀辰言ふ様外に咄しも澤山あれ共今夜ハ一先此場を去て家で緩々休ふと元來し道へ立歸

るよ彼守りの功驗なるにや幸藏歩行よ足輕く僅行しと思しよ既近江屋の旅店に着ぬ

○強盜淀辰素性の事

并初代淀辰騎右衛門に殺さるゝ事

幸藏既に淀辰が奇術を感じて其傳授を頻りよ請度思ひしかども一生女の肌を觸る事のならな
い術なりと聞てハ此つも思案もの人間僅の壽命を保ち彼樂しみを盡さずば術を受るも甲斐な
しと念を止めし幸藏が其夜ハ終よ打臥しが翌朝食事も濟し折柄淀辰來りて云へるやう夕部は
嘸のし勞れしならん夫よ付ても聞たきハ吉岡村の極印の金は何程ある事や此地は目明澤山に
て油斷ならざる土地なればお主が彼物を請散さば夫より忽ち足が付き遂よ大事とならん程に
私が悉皆取換て遣ふと云ふに幸藏悦び實ハ江戸の田町よて云々斯云ふ手術を以て百兩の金を
取一故道中多分の金も入らず此地へ斯して來る迄ハ彼三百兩ハ封の儘少しも遣はず持て居て
一昨日始めて其封を切りもの故氣も付かざりしが兎よ角三百兩の内一兩減りのみありと其
事情を告せつゝ極印金を淀辰に渡して宜敷頼みますと云ハ淀辰受取て夫でハ慥よ請取たと
己が居間へと持行しが程なく金を取換來り數を改め幸藏に一々渡して云ひけるハ此大坂ハ金
錢の集る所と云ひ乍ら盗み取るよハ困難く中々骨の折る土地我手下にハ随分共に働く者も

あるなれど四五百と言ふ大金を盗むハ賊に稀なことお主も能々心を用ひ先々氣長に働きたと
云ふに幸藏禮を述べ其金員を懐中しながら今日の眞に天氣も能く家に居ますも氣鬱故所々を
見物致し度いと云ハ淀辰領づいて夫でハ幸ひ道頓堀に我片腕と頼んで居る墨屋三右衛門と
云ふ者あり是も矢張旅籠屋なるが機轉の利た者なれば是へ便つても見なさい私が手紙を添へ
程にと紙面を認め渡されしよ忝けなると幸藏はそを懐中して暇を告げ此家を立出で其道よて
手土産などを買調ひ道頓堀へと行よけり

傳に曰く淀辰と云ふ者の素性を尋るよ親ハ寛政の頃大坂よ隠れなき船乗よて淀辰五郎と言
ひ一者なり此辰五郎が盛りの折日吉丸と言ふ船よ荷物と積込江戶を指て出帆せしよ時しも
五月雨頃にして俄に暴風吹起り船ハ今よも覆へらんとせしにぞ辰五郎始め六七人の船頭共
丹誠を抽んで働きたり然れども風ハ彌々裂しく空ハ一面よ曇り雷鳴轟き山の如き逆浪船を
宙天に打揚げ又ハ打下し海路ハ眞黒にして黑白を分たず人々生たる心地なく只神佛の名を
唱へ死を待より外なかりしに辰五郎ハ鬚を切て海中へ投入祈誓あしけるハ何卒龍神念りを
止め此船を恙なく江戸へ着しめ給ひさすれば此後海上へ出る毎よ人間一人宛を性機よ捧ぐ
べいと一心不亂願ひしよ何成惡龍神の聞入れしよ又ハ暴風の止む時なるかや次第く

海上穩かよなり空も晴行星の光りも見ゆる様に成しかば辰五郎扱は我一心を龍神が納受有りと見えたりと天地を拜して悦びつ、船中の者を見れば皆々色青さめて更に正体なかりけるにぞ辰五郎の嘲笑ひ扱々言ひ甲斐無奴原哉と言乍ら四十有餘の一人の船頭を引立て其儘海中へざんぶと投たり外の船頭驚くとコハ龍神に誓ひし性穢也と言ふて辰五郎は船を港へ着け破損杯を繕ひ悦びの酒酌交へ而して難なく品川沖へ船が、りし荷物を送て後今迄用ひ古帆を賣拂ひ新よ白帆を修ひ丸と龍と言ふ字を染出して龍丸と名付ぬ是龍神の爲に助けられしを表せしならん夫より後難風よして船路の通行仕難き時は賃銀を倍増に取て請合しが船を出すよ何よても船頭を一人宛投込たり斯て思ふ様に乗切る事の出来るよ後々は我手の者を殺さんよりは他の船の者を性穢にせんと船先よ仕懸をて海上よて態と他の船に突當ては其船を打毀し人の三四人宛も一度又殺しける事七八年此事自然と所々の風聞と成て船頭共言ひ合けるは若も海上にて龍と言ふ字の帆を掛し船を見れば手早く逸去べしと其噂高かりしが其頃奥州は鰐右衛門と言ふ船頭あり彼の身の丈六尺九寸ありて筋骨逞しく名高き船頭なりし處近頃龍丸の大悪人辰五郎の噂を聞て憎き奴なり我彼奴を退治して諸人の憂を除かんと姿を變て大坂へ登り僅の商ひを始め辰五郎方へ手續を求め立入て我も商賣の片

手業に船の手傳ひせんと思へば御遣ひ下さるべいと頼み置しに或時難風の折柄辰五郎船出をなせよ其時海上よて他の船を見掛りしかば我同船の者を性穢と爲の外なし就てハ幸ひ鰐右衛門を誘引しゆると海上三四里も出で處よて貯へ置し酒をし鰐右衛門は酩酊海上安全の神酒なれば十分と飲べいと云ふ鰐右衛門扱ハ我を酔つぶさせて殺さん心なりと察せし故態と眞裸になり我も難風行の船の乗始めあれば親方へも一盃上げんと大茶碗へあみくと酒を酌ぎ一喫と一口よ飲乾サアト云ひ乍ら茶碗を取て辰五郎又打付コレ辰五郎我を誰とか思ふ奥州の鰐右衛門と云ふ人に知られし船頭あるぞ汝が此年月多くの人を殺すと聞海上の災ひを拂はん姿を變て仲間よ入込み此難風を同船せしハ汝を殺さん爲なりと首筋掴み引寄れば辰五郎も打驚きしが何程の事やあると鰐右衛門に立向ふよ思ひの外力量強く小兒の如くよ取扱ハれ半死半生よ打叩れ働きもあらぬと鰐右衛門ハ細引にて縛め乗合せし船乗共に彼が年來の悪事ハ何れも知りつらん殊よ此頃風聞高かく他の船頭此龍丸を見る時ハ皆々道を除て見られぬ様よあせば自然性穢よするに乗合の者を殺す様に成ぬ然ハ汝等が命連も何時しか彼に捕る、處且今迄殺されし同業の仇なる此辰五郎とさいあみ殺せと云ふに皆々悦びて鰐右衛門が下知に従ひ辰五郎が體へ細引を結付海中へ投入又ハ引揚げ投入れて終

よ細引を切捨ければ逆巻浪よ包まれて行方も知れず成にける扱も其船ハ恙なく江戸品川へ着しければ毎もの如く荷物を揚終に大坂へ歸帆の上町奉行所へ逐一に辰五郎の事を訴へよ御吟味の上辰五郎の家財ハ關所仰付られ妻子ハ親類へ御下よ成ぬ又鰐右衛門事ハ上の評議有て數多の御褒美を賜り晴の錦を飾りて古郷奥州へ立歸りしと又親類へ引渡されし辰五郎の妻子ハ所持の金子も澤山あるゆる旅店を出し辰五郎の一子を近江屋喜左衛門と改名させぬ去共是も親に似て大膽なる者故壯年よして妖人よ奇術を習ひ盗人と成しより親の名を受て淀辰と言ひ觸せしが今よてハ四十人程の手下も付て榮花よ月日を送りける

夫ハ扱置幸藏ハ彼淀辰の引付よて道頓堀の族人宿なる三右衛門の宅へ至れば女共が取次て先此方へと叮嚀に奥二階へ案内されしに幸藏一間よ座り込て主人の出るを待折しも後の唐紙おし明て上意くと左右より捻上んとする不意の捕方早くも幸藏見を換せ捕方二人が襟髪を取かと取て押へ付け猶も眼を見明いて逸りよ心を配つたり

○三右衛門幸藏に豪家の手引する事
并鼠小僧織越の家を計る事

其時道家の主人ある三右衛門が出来り是ハ幸藏殿は手の内感心せり金藏才助兩人も大に

御苦勞くと座を改めて挨拶なし扱今お主が持参せられし彼書面よて様子も知り且ハ度胸を試し見よと淀辰よりの詞も有る故子分が居しを幸ひよ鳥渡間似合の似捕方必らず心に懸玉ふあと云れて幸藏安堵みし先三人よ近付の詞を述る其中に早持來る酒肴四人一座の酒宴も同氣求むる相性よて三右衛門ハ幸藏に是より一里半許り道程離れ一在所にて字を花又と云ふ處に仕事よなるべき豪家あり夫れハ勿論此頃の出来分限でハあるけれど織越茂十郎と云ふ百姓で仲間ハ忍び入らんと度々狙ひハ付るもの、中々よ用心嚴くして入事成ぬいまくとされ主此地の手始めよ一ト働きてハ如何と言れて幸藏大に悦びつ、夫ハ一人で遣て見た一併し私も上坂たばかりで土地不案内の事なれば白晝の中よ其處へ行て様子を見届け置たりと言ハ三右衛門も尤もなりと夫より漸々盃蓋を納め率とて子分ハ宿に殘し三右衛門と幸藏兩人花又を指て行きければ程もあらず織越の家近くへ來りしよ三右衛門ハ幸藏に目立ぬ様とて目くばせよて様子と大概致へし上我等は少々用事もあれば何れ明日逢んとて其儘袂を分ちたり幸藏跡よ只一人織越の家の様子を見るよ成程何分嚴重にて忍び入るやうあらざるより工風な一ツ、路を轉じて古道具屋を尋ね行き其處にて直安の大小を求め旅侍士の如くに扮立ち且竹杖に絶りながら其日の暮る頃ほひよ織越の家よ到りて我等元來浪人なるが長の煩ひよ路用を遣ひ難

儀至極を致す者大家と見受て一宿をば無心で度参つたりとさも哀れ氣よ言述べれば内より此家の重立し召遣ひの者なるよや四十有餘の男が出て成程御見受す所未御年若の御見よて御大儀の其御様子一夜位の事なれば御止すして進たけれども御存かひ知りませぬが此頃當所近邊ハ盜賊多く徘徊致し誠に物騒の時節なれば假令御病人にても見知らぬ御方を御止め申すハ何分参らぬ事なりと譯を話して斷るを幸藏尙も手を突て御尤もに存ずれど尾羽打枯せし瘦浪人殊にハ病氣上りの事よて最早僅の道程も歩行兼たる難儀の身體何卒御家の祈禱とも思召れて一夜の御慈悲を下さるやうにと只管頼めば兎も角暫く待給へと彼召使ひハ奥へ行しか良有て出來り委細の事を主人よ告一よ夫ハ定めし御難儀ならん一夜の事あら御宿せと主人も承知致せし事もハ先洗足して御通りあれと云れて幸藏打悦び種々禮を述つゝも足を洗ひて案内に連れ一室の中へ通りければ間も無膳を持來りて夕飯さへも進められしに尙々厚く禮を述て漸く飯も喰終れば又彼以前の召使ひが夜着布團をバ持來りて先御勝手に御休み有べ一小用へ行よハ那を廻つて向ふの方へ突當れば雪隠なりと教へ置き又幸藏の枕元へ手燭を置て出行ぬ幸藏床に入りし後暫し考え居たりしが家内の様子を伺ひつそつと寢所を忍び出聞き處を探り奥の一室に到り見れば襖越しハ火影の見ゆるよ是ぞ主人の居間あらんと身と忍ばせて透

間より内の様子を窺へば年頃六十有餘の老人十露盤を前へ置き張面を調べ乍ら百兩包を拵へてハ小簞筒へ入るよぞ幸藏篤と見定めて元の座敷へ切かき歸り又床よ入て夜更を待よ早丑滿過とも成しを時分ハ宜と起出て今度の手燭へ灯を燈し臺所へと到り見ればいと大なる居燵裏の上の自在竹に茶釜を掛あり又其側にハ松葉枯枝澤山積てありければ幸藏そつと其中へ其燵燭を差入つす火の移る様にあし元の寢床へと忍び歸りそら軒して居たりけるよ彼燵燭より燃上り次第くよばちくよ音の烈しくなるまよ黒煙家内よ行渡れば人々驚き目を醒し火事よくと立騒ぎぬ

○幸藏大金と土中へ埋むる事

并三右衛門三ヶ條異見の事

扱織越の家よてハ夜中に至り臺所より燃上りたる鹿相火よ家内の周章大方ならず殊に主人の茂十郎ハ寢卷の儘にて馳行て水よくの差圖よつれ家内ハ殘らず臺所へ行集まりし様子を計り幸藏ハ見覺え置し主人の居間へ忍び行き手早く錠前押明て彼小簞筒より百兩の包を五個取出し以前の如くよ錠前を下し夫より庭へ下立つゝ圍ひの板扉を安々乗越え畑の際へ飛下て盛上てある畑の土を深く堀て其中へ今盗み來一五百兩の金を埋て元の如くし又其上へ細き竹を

挿て己が見覺とし以前の塀を乗越て庭より内へ這入ながら其處等のメリを能くなして自分の
 寐間へ歸り一頃の漸々失火も鎮りて人々安堵の折なれば此方の都合が宜つたと獨り笑ひを合
 るつゝ布團の上よ坐し居しよ早東雲と成し時昨夜世話をなし呉一かの男が入來りて折角休み
 居られしを不事の事よて客人よもさぞ騒々しく在せしおらんと挨拶されて幸藏ハ氣の毒
 顔に座を改め誠に不時の災難よて御家内何れも大なる御心配にて有しならん併し早速消れし
 ハ恐悦の事なりと當座を繕ひ夫より猶も言ひけるハ斯御取込に長居致すハ却て御邪魔よなる
 事故最早御暇仕らん然ば御主人へハ御身より宜く御禮と申吳よと禮を述べ彼男ハ先々御湯
 漬杯喰て緩々出立致されよと留ると此方ハ絶て斷り來り一時の竹杖ハ踉蹌々々として其家を
 立出様子如何よと伺ふに織越方ハ鎮火せし悦びなりとて酒酌替一村より大勢集り居れと表ハ
 未だ薄暗く人の往來も非されハ彼庭口の塀の前なる見覺え置し竹を引抜き土を返して改むる
 に是ハそも如何よ入置し金子の今ハ非ざるよ流石の幸藏仰天して正しく爰よ埋めしに人よ見
 られて盜れしかと暫く茫然たりけるがまよ只取る金錢よ心配してハ間よ合ぬと足を早めて
 三右衛門の宅へ歸らんと道頓堀へ來ハ來りしが何分よも手よ持居たる油揚を驚よ攫ハれし心
 地して氣色悪さよ幸藏が今日ハ劇場でも見物して夕方疊屋へ歸らんと角の芝居の邊りへ來る

よ兄貴くと呼ぶ者ありはてあと幸藏振返れば三右衛門が子分なる彼金藏にてありたりき其
 時金藏云ひけるハ親分が御身よ逢度と今朝此私と才助と道を違へて歩行ハ何所へれ出か分
 らあかつたが幸ひ爰で御目に懸り先々胸も落付た就てハ疾々御出めれと云よそんなら一所に
 行ふと打連立て至りければ例の二階へ誘ひて三右衛門ハ幸藏に昨夜の首尾を尋るよ幸藏頭を
 掻あがら今親分に咄すの實又面目ない譯だが兼て言れハ其通り用心厳しき那家の構ひ中の
 様子を知ずして無闇に忍び入も危ふく依て斯様くにして首尾能く五百兩盗みしが其儘逃て
 ハ我仕業と直に知るハ目の當り夫故態と塀際の畑の中へ埋め置き明方行て尋ねよハ蛙さへ見
 ぬ贅骨ハ高の知たる五百兩又能き事も有ふかと延義直しに芝居でも今日ハ一日見物仕様と思
 ひし處へはしあくも金藏殿よ行逢へばおまへが用が有との事故連立歸りし譯と言ふよ三右衛
 門ハ額ハ手を當ち主が手段ハ随分宜し然れども火業をなしたるハ眞よ拙い策略この世の中よ
 盜賊の仕方も數多あるなれと罪なき人を殺す事人の住居よ火を放つ事他人の妻女を奸淫する
 事此三ツハ悪事の極にて古昔よりして名ある賊ハ右の悪事をなさぬなり幸ひ昨夕ハ風もなく
 殊に家内の人々も早く心付し故大事よならで宜しかりしが以後ハ必らず慎じみ給へど盜人に
 も又一理ある疊屋三右衛門が異見を聞き幸藏大ひに恥入て實に親分の言る、如く我も心よ快

氣の思ひし譯にあらざれ共外は是ぞと趣向もなく折角土地の手始めは這入込だ甲斐もあく空しく歸るも残念といはば苦し紛れの徒ら事此後ハ屹度慎しみますと後悔面に顯れる、よ三右衛門ハ大に感じ實は御主ハ見上し者あり我等が出過た異見をば腹立もせず得心せしハ流石大氣の江戸育ち夫に付てハ御主が盗み一彼五百兩ハ一枚も不足を生ぜず爰にあり受取られよと言ながら手箱の中より五包を率と計りよ耳を揃へて幸藏が前へ差出せば此方ハ大きに呆れ果て何して親分此金をと云ると三右衛門打笑ひ昨夜お主が行跡未だ土地馴ぬ不案内を案じて見れば寐られぬ儘に寐よとの鐘の亥中頃徐々織越が村へ行て家の廻りに伺ひしよ八つ過る頃家内の騒ぎ火事よくと云ふ聲は猶も忍んで居たり折誰とも知らず庭口の塀を乗越え煙の中へ物を隠して又元の塀を越て内に入る故跡へ廻つて堀出し見れば夫なる五包是ぞれ主が仕業よと思へば其儘打捨て立歸らんとせいかども石も物云ふ此世の中若も他人に見付られなば却つてつまらぬ譯なりと懐中なして歸りしハ何せ此家へ歸らるゝお主ハ手渡しする心と言れて幸藏疑ひ晴扱もくと三右衛門が其親切を謝して悦び扱改めて言やうハ我等が一旦なき者と思ひし金の手よ入りしハ全く親分の御蔭故此金の貸方と私と二つ分此後ハどうか兄弟分よして下されと言ふ詞よ三右衛門も打悦ひ兄弟分ハ我よりも實に願ふ事なれどもお主の盗

んで来た金を假令半分なりとても我等が貰ふ所謂なし只お主よ言ふべき事ありあの淀辰の手下共ハ四十餘人も有なれば彼等へ何程か仲間入の印を遣はば何かに付萬事都合も宜らんと言ふを此方ハ承知して夫ハ疾から思ふて居る事そんなら兄貴此金の無き物として五百兩の内三百兩ハお前と淀辰又此私と割符して残りの二百兩ハ近江屋の手下の衆へ能き様よ何卒分て下されと云ふよ今更三右衛門も夫迄とハ辭退し兼て夫なら然云事にしやうと夫より酒宴を催して又幸藏と饗應たり扱また子分の金藏ハ先に才助を尋ね行しが漸く連立歸りしよぞ幸藏ハ二人よ向ひ今日よりの親分三右衛門と兄弟分よなりたりと先此事を語り聞せておめへ達の別段ありとて我分取一兩百と二ツよなして金藏と才助よ廿五兩宛と與へ己れハ五百兩の内僅五十兩を取置一ハ盗み物と云ひ乍ら慾を放れ一所業なりけり

○幸藏次郎吉と改名の事

并に先の半次圓覺寺の繁昌と告る事

斯て其日の夕方に三右衛門ハ幸藏と打違立て天満なる近江屋方へと急ぎ行き先淀辰よ對面して三右衛門ハ花又の仔細よりして五百兩の金の割符を告知せ金百兩を渡しければ此方も幸藏が氣性を譽め然ばと其意よ打任せ禮と述べ、請取て又返禮の爲様も有んと其夜ハ二個を厚く

饗應し扱淀辰の手下の者へ幸藏よりの断を告るよ翌日より二三個を限りとなして近付よ幸
 藏が座敷へ入来るに儼然なる武士もあれば柔和なる町人風もあり又ハ殊勝氣の出家も来る寄
 席出稼の諸藝人抔何なる人が目を付るも盗みを働らく者共との思も寄らぬ人々が其名を告
 て叮嚀よ土産金の禮を述るに幸藏大いに淀辰が遠慮のほどと感ずる中にも是でハ上の役人の
 目を盗むも尤もなりと思ふよつけても淀辰と三右衛門が賊よして義心の厚きを稱したり扱又
 獨り思ふ様我父母の恩を忘れ遠く古郷を離れ来て不義の業をばなしながら父母よ名付られた
 りし幸藏と呼ぶハ勿体なけれハ切てハ名を改めんと或日淀辰よ打對ひ豫て三右衛門と兄弟
 分の義を結びたる事をれハ彼が弟となるを以て次郎吉と呼替へんと言ふを淀辰打笑つてお主
 の才ハ三右衛門の遙かよ上にある事あり何ぞ自身が年を以て卑下する事のあるべきやと言へ
 ど幸藏ハ聞入す次郎吉と名を改めぬ扱鼠小僧次郎吉ハ淀辰が受人と成て長町に世帯を設け表
 向ハ博奕打の附合と一内証ハ夜毎に大家へ忍び入り多くの金銀を盗み取りそれを博奕場へ時
 散一又ハ新町の遊女屋よ現を抜いて金錢を湯水の如く遣ひハすれど又貧苦の者と見れば身分
 よ應じて與へたり然れど平常姿を窺して少しも其名を知らせざれば貧人共ハ何れも皆其何者
 なるやと知らず且又人の疑ひを避んが爲よ博奕場よて二三十兩も勝時は今日は百兩儲けしと

言ひ五六兩も負る時は十五六兩負たりと恒よ偽り言ひ置く故誰も次郎吉が金錢に不自由な
 きと疑はず只々博奕の上手なる若者なりと評判能く三年餘りも暮したれど絶て悪事を知る者
 なかりき扱次郎吉は盗みハすれども中人以下の家へは這入す且又大家たりとても隠徳をなし
 善根を施す家ハ都て除き假令無慈悲の家なりとも二度盗んハ不便なりと思ひし故に大坂よて
 目を懸一家の大方ハ這入盡して此頃ハ少一金よ差支へしより能き相談も有んかと淀辰方へ到
 りしに幸ひ三右衛門も來合せて三個一座の酒盛にうち寛いで話して居一時會釋をあして入來
 るは此淀辰の手下あるお先の半次と云ふものあるが聲を密めて言けるは親分鳥渡聞給へ私が
 先頃京都へ出て處々を遊んで居た處餘り噂が高い故見物がてら尋ね行しハ二里半許りの在所
 にて字を十生目といへる無明山圓覺寺と言ふ山寺あり今の住寺ハ今釋迦とも又生佛とも言觸
 して其隣村はすに及ばず五里十里の道を厭はず加持祈禱を願ふ者實に夥多しく有て大繁昌の
 御利益は盲目も目が明き跛行も立など針程の事を林程に言て投出す寒錢ハ塵も積つて山寺の
 山なす許りの容子もえ透りの出茶屋で仔細を開一に今の住寺ハ四五年以前雲水の僧で何處か
 らか此山寺へ來しものよて逗留中よ先住の和尚がくれくの遺言とて自分が忽ち跡へ直り夫
 より後ハ一概に不思議の利益著く人の信仰次第よ増て今でハ大壯富貴を爲し噂に由れば三千

兩も金を貯へ居るとの事殊に住持の大力にて彼古への辨慶とも言ふへき程の者なりと茶屋
 の主人の物語りまさか嘘つく亭主と見えねど疾く親分に告んものと急いで只今歸りし處と言
 ふに淀辰二人に向ひ此頃の味い仕事もあさ折なるに幸ひ半次が聞込し彼山寺の賣僧坊主共奴
 を欺き有金を取るの如何と言詞よ三右衛門も思案をなし私も豫々其噂の聞及んでも居る事に
 て今半次が言ひし如く富有の寺に相違なからん然れども大力ありとの事ゆゑ此方も心掛へな
 ふてハ毛を吹き傷を求めると云ふ諺よ落んも知れず能々手段を巡らされよと言へハ次郎吉打
 笑ひ兄貴の分別餘りよ過ぬ是より連立彼處へ参り三人寄て文珠の智恵手段ハ其時幾許も有べ
 し然も非ずや親分と言ふ淀辰打點頭虎穴よ入らざれば虎の子を得難し兎も角も今宵夜船で
 伏見へ行き緩り相談せんといへハ三右衛門も其意よ任せ先の半次を供とまで四人連立旅支
 度管の小笠に脚半草鞋何れも腰に覺えの一刀日足も長き水無月の暑と烈しき下旬船場を指て
 出行ぬ

○三賊十生目村よ到る事

並三太郎後家物語りの事

鼠小僧の淀辰等と共に夜船に打乗て其次の朝伏見に着朝の支度を調へて夫より京の片邊の彼

十生目をさして行き其日の晝頃その里の山寺近くへ到じ以前ハ邊鄙の土地よして酒食の店
 も無りしを先頃よりして圓覺寺の加持や祈禱の御利益よ諸人の參詣夥多しく爰や彼處よさま
 しいの物賣店も數多出來て今ハ大方の驛路よりハ賑ハしかりき有様よ次郎吉等の感心まで或
 る酒店よ入り酒宴をあしつ、淀辰ハ二人よ向ひ兎も角も寺に到りて如何なる様子か見ての後
 計らひ吳んと隔けハ他の兩人も然るべしと半次を酒店に待せ置き是より三人ハ爪上りに二町
 あまりも登ければ小き茅葺の門の柱に圓覺寺と記しあり門を潜つて内よ入れば其正面が本堂
 にて御祈禱申の刻限りと書記したる札有にぞ參詣人の我勝よ前へくと詰懸るを世話人ある
 にや古變たる袴を着し二三人が其人々を制しつ、順番に出給へと只さへ熱き極暑なるよ群集
 の人よ蒸立られ老若男女押合へいあひ格子も倒さん勢ひに世話人共ハ呆れ果て途方よ暮るも
 いと可笑く加持する僧を遙よ見るよ年頃六十有餘にて頬骨顯ハれ白き髭ハ長く胸の邊りに垂
 れ身よハ金襴の袈裟衣を殊勝らしくも着用し結加跣坐して我前にハ經札よ飾り立て口に何
 やら唱へつ、加持祈禱をハ授けるよ田夫村婆ハ何れも皆隨喜の泪よ袖を濡せり淀辰等ハこれ
 を見て彼ハ正敷狐遣ひか左なくば山師か兎も角も正しき出家でハなからふと隔きながら猶も
 又群集よ紛れ入込て住持が居間杯見定め置き再び半次を待せ置し酒店に到りて淀辰が主人を

呼びてもう様へ今日取譯參詣人の多き譯にや何時迄待と御加持を受る事もならず併し翌日出直さんも誠難儀の事なるが爰等邊りに何處なりと宿賃家もあるまいかと問へる詞よ主人の思索し去ば此地の御寺の御蔭で漸々此頃開けまして斯は賑ひますもの、未だ旅籠屋までは出来ませぬが是より四五町參られると三太郎後家とて六十近き一人の婆が住む家は以前相應の暮しにて住居もあかく手廣のもの今では外へ便るべき者さへもなき獨身よて其日暮しも漸やくなれば見苦しきさへ御構ひなく元心宜婆もるに頼みを否とは申まひ兎も角行て御覽あつへと云ふ皆々打悦び酒酌替して額を築め密談戯刻よ及び一よ今夏の日の長ささへ早暮近く成たりき四人の食事も十分濟せて酒食の代の其外茶代をばすみ立出れば茶屋の亭主の宵闇の足元照す小提灯金の光りよ浮雲なく先立送て彼婆が早くも門に到りしかば此所よて主人を勞らへ歸し次郎吉へ先へ行き頼んで來んと皆々を門の處へ待せ置き本家よ入りて見し處婆は蚊燻しあし乍ら頻りよ糸を取て居たるに次郎吉の小腰を屈めて若御婆さん御無心乍ら道よ迷ひし旅の者連の者が底豆を煩らひし跡故につひ此日の長いのに歩く道さへ拂ららず最う京都へ行馬駕籠もあいの事御身請すて御願ひなるが何んな處でも能い程よ今宵一夜御厄介よ此方へ泊めて下さらぬかと云ふに婆の糸車の手を止めて此方を見遣り夫の嘸々御困りを

らん見らるゝ通り家の中は廣けれど壁も落て疊もあらず其上に蚊蚊を防ぐ蚊張さへな一然し夫を承知なら遠慮へ入ぬ此破家幾人なりとも泊られよと言ふよ次郎吉打悦び然様なら御願ひ中と表へ出て淀辰よ云々と囁くに皆々も承知して内へ入婆々よ厚く禮を遣れば老婆は圍爐裏に掛し土瓶の温湯と茶碗二ツを四人の客に饗應たり四人は家の貧さを互ひに不便と思ひつゝ淀辰婆々に打向ひ私共今そこで飯も酒も十分に遣つて來たれば決して構はずに仕事をあさるが能い夫に付ても見受し處以前何の何某とか由緒有氣の此住居夜なべ仕事の片手業身の上咄しを聞されよと云へば老婆の涙を流して水の流と人の行末いつて返らぬ事柄を御咄しやも泪の種元私一へ此土地の者ならず生れ古郷は江戸なれども若氣のついた誤りよ男と二人亡命して大坂の地に暮し居しが其男は流行病の數に入僅に煩ひ死しける故今更何と詮方なく江戸へ歸らんにも二親は幼き時に死果て頼ととするは兄許り然れど夫さへ死絶しと風の便りに聞し故他人の世話で漸々と料理屋の酌女に雇はれ居りしに此家の主人三太郎殿が大坂へ來られし時酒の相手よ呼れしが縁とあり此家の女房となつて間もなく男の子を儲け名を三吉と呼なして籠愛せしが三吉も成長に隨ひ酒を好む遊女通ひ乃放蕩より早晚博奕打の仲間へ入親仁殿の此村よて代々名主もする家なるよ三尺帯に長脇差自慢顔よて押歩行を種々異見を

したるに彼が甘才の其時親をば捨て置手紙江戸へ行とて家出せしが其後の風の便りもなく
 憎い奴どの思へども懸替の無き一人子故今日歸るか翌は又便りがあるかと夫のみを樂しみ
 暮す憂月日昔一の我身と思はれて親も等しき一人の兄は苦勞を懸し私しが因果の巡る我子の
 三吉斯迄親を歎かせなば又彼が身にも報はんかと末の末迄子と思ふ親の心の遣方なく其愛中
 は五年以前此村の頼み寺なる圓覺寺の住持が死なれて終に雲水の旅僧が遺言なりと云ひまし
 て後の住持と成しより今迄へ去る事もせざり加持祈禱ををし所々の人を集ると三太郎殿が
 鬼や角言ふて止めしが其罪を佛の憎ませ給ひいと未だ人々罵ると聞私しの胸苦しき其年極
 月の事なるが此家へ盗人忍び入三太郎殿を切殺し有金残らず奪ひたり夫より後此婆一人仕
 様摸様も泣ばかり寄る年故田畑の業も出来兼れば只有ものを賣喰して漸々今日迄生甲斐無
 命を繋ぎ居まするが行衛知れざる三吉が再び歸り來るか夫のみ日毎待まする斯身の恥と
 御咄しやも若其伴三吉に逢ひ給ふ事の有もせば婆が難義の今の身の上知らせて貰ひやたさ
 と云へ雲を掴むさか云ふ當にあらぬ事乍ら御深切の御講は甘ひてや懺悔咄し居薄き婆
 なりと笑ひ給ひぞ旦那方と泪乍ら物語りぬ

○三賊圓覺寺に忍び入事

並住持を生捕事

扱も老婆が身の上咄しよ孰れも不便と思ふ中も次郎吉の心中我身も矢張彼三吉と同じや
 うに親を捨て遠き他國より三年餘り江戸に居らる、親達へ今此婆の如くにて嘸や歎いて居られ
 んど身につまされて自から頻りに古郷の懐かしく今宵の仕事を限りとて最早江戸へ出立せ
 んと思案しながら淀辰等と俱々老婆を慰めつ、奥の一室を借受て蚊燻しの灯を燈火に代へ何
 れも時刻を待内は老婆も最早寐たる様子次第に更る真夜中の丑滿頃成ければ時分は良と半
 次をば其家へ残して三人連立見定め置し圓覺寺へ到るや否や淀辰が先へ立て本堂へ其手を翳
 して差招けば得たる奇術の不思議にも自然と入口の戸が開たり三人其處より忍び入俱々住持
 の居間より有明の燈火を掻立て釣たる蚊帳を三右衛門が切落して和尚起よと呼はる聲と諸
 共に次郎吉の用意の細引取出し蚊帳より出ると戒しめんと待折しもぬくくと這出る住持
 さらぬ五十計りの老夫なり三人の顔見合せ是はと計り呆れしが淀辰の老夫は向ひ汝は何者ぞ
 住持は何方よ在ぞ偽らず告よと言ふに老父の三人の様子を見て何れも盜賊と見て打撃き聲を
 震はして我の當寺の下男與助と言ふ者和尚様の毎も夜分の居りませぬ留守の我等が獨り寐の
 寺の明店同様にて不んの佛の造作許り禪宗ならぬと無一物盜人さんなら御氣の毒と斷り言ふ

と淀辰が是親仁手前も此寺の下男と言ふからい豈夫住持が居處と貯へ金の在處を知らぬと言ふ事これ有まじ若言ぬあら言して見様と腰の一刀抜放目先へすつと指附れば下男顔色青冷てマアく待て下さりまじ是許りの和尚様より豫々堅く口止され何な人が尋ても云ふてはならぬと云ひれたれども命は替る實はない實に此本堂の後より別間が有て其所より旦那居らるなり併し其座敷へ外より這入所なり此座敷の下を明けて見られよ坐敷へ通ふ抜道あり斯許り致へ上からの我等が命に此まに何卒情に助け玉へ南無阿彌陀佛と伏拜むよ不審乍らも次郎吉が疊を一枚押明て下なる板を取除るに中分らぬ眞暗黒手を差進て探り見れば其處に階子を懸てあり次郎吉先へ入んとするを淀辰が押し止め私か先へ見て來やうと階子を下りて行程に僅六尺許りよして又横の方へ行く道あり其道六尺許りを行けば又横は道あり又々其所を行よ三間餘りよして突當り又登り口あり其階子を登つて見るよ六疊計りなる綺麗の座敷に蚊帳を釣て行燈の側に酒肴杯取散し蚊帳の中に晝間見覺え老僧が年若き女子二人を左右に寝させ酒は甚く酔しと見へて高軒は眠り居たり扱へ此坊主も矢張賊の仲間なるか今斯の如く寝たる處へ我一人にても縛しめらるれど斯ては兩人が本意あく思はん先々兩人を喚來らんと彼階子と下りんとする時和尚早くも目と覺し蚊帳の中より覗き見るに一刀帶せし曲者か階

子を下りんとするさまは驚きたれども年經し曲者盜賊待と言ふから蚊帳を削除突然と淀辰が帶引捕へ捻伏んとする勢ひよ淀辰横に身を捻り其手を取て捻上んと攫るか、りへせいかども年に似合ぬ和尚の大力淀辰元來然者なれど終に組伏られたりける其時和尚の女を起して細引と持來よと言ふよ女の震ひ乍ら戸柵より細引出して和尚に渡せば住寺の夫を愛取んと左りの手を出すと俱よ側を見遣る其折しも穴藏の中より踊り出るよ次郎吉が和尚の肩よ手を懸てやつと仰向し引倒すを淀辰得たりと刻返し今三人上と下へと組合ふ折柄三右衛門も早く此場へ走來り俱よ力を添し程よ流石の和尚も縛しめられしに切齒をなして目を見張こ、あ小盗人共汝等如きに縛しめらるべき我ならねども昨夜の酒を過せし故不意を討られ此不覺率速かに繩を解左なくば蹴殺し呉る、ぞと息急荒く匂りしに實に凄じき勢ひなりし

○鼠小僧天井働きの事

并三賊穴熊の金を奪ひ去る事

狸諺よ毒を以て毒を制すと今惡僧の三人を口を極めて罵るを此方の三人の笑ひ居しか淀辰竟よ聲を聞まし此賣僧め汝先空言を止めて命か惜く今迄諸人を欺きて貪り金を疾く出せサア其有所と白状せよと云へば和尚の聲を荒らげ汝等如き小盗人に我名を語るも殘念乍ら今宵



の仕義は是非なくもゆひ聞ず問能く聞き以來は此身の手下となれ我の北國は隠れなき穴熊大
 太郎といふ強盗あり汝等如きが迫ればとて争か金の在所を知らせん夫より早く頭を下て報謝
 と願へば百や二百の呉ても遣ふと云る詞を打消しながら淀辰が業突ばりの欲張坊主め云す
 云ふと腰刀切より早く首打落し傍なる二人の女は向ひ汝等は何者ぞと問ふ女は慄いて恰も面
 色土の如く聲も出兼しが一人の女云ふ様私しは京都の島原に近き藝子の龜とや者はなるの同
 業の花とや者なるが此月始めは二人して相談し互ひは持病の癩が強き故人の噂も聞及びし圓
 覺寺様ハ何様の難病よても御加持で愈すと云ふ事故何卒愈して頂き度と漸々暇を貰ひ駕籠に
 乗て此寺へ参りしに其日は生憎休みとや事よて御断ありしより力も氣も抜て歸らうとせしよ
 此寺の與助とやらが呼止めて和尙様の言るゝよ折角京都より態々來りし者と無下は歸さん
 も氣の毒なれば連れて來いと仰ゆるゆゑ一所よ來よと違られしを偽りとハ露しらず其詞よ任せ
 し處一人宛此隠れ座敷へ押込られ否應なしの無理往生憂き月日を半月許り地獄の責も是程の
 苦しき事ハ有まじと泣てばつかり居りましたと今晚貴方様方が御出ありしハ誠ハ幸ひ何卒御
 慈悲に二人が命御助け下されて此寺を遊して下され拜みますと年増の龜が云ふ尾は付てお花
 もともよ手を合して頼む詞のいぢらうとに淀辰ハ打黙頭前達ハ罪ハなし命取らぬハ勿論

なれども此惡僧が財へ置し金の在所ハ何處あるか定めし知て居るたらふ夫を包まず知らせよ
 と云ふに二人ハ居置る行燈に指さして是の上よと云ふ側より次吉郎私が見ませうと云ひつゝ
 其身を閃かして件の行燈を踏臺として天井へと手を懸るが否や板と一枚押明て天井裏へ這上
 り中を尋る形勢と藝子二人ハ云ふも更なり淀辰三右衛門も呆る、許り其身の誠に軽くして自
 由自在なる働さよ舌をぞ巻て感むける借次郎吉ハ天井の中を那處此處を探りつゝ、文庫三ツ四
 ツ取出し手渡しするを三右衛門ハ下にて是を請取よ跡ハ蜘蛛の網ばつかりだと戯れ乍ら次郎吉
 ハ足を放すと見えたるが飄然と下へと飛をりければ兩個は是を勞らひつゝ、終よ三個一致して
 麻風呂敷の大なる文庫の金を打明けて其儘確と包みければ今度ハ私が荷物持親分先へ行な
 さへと三右衛門が金包を肩よ引懸立上れば淀辰ハ先よ立又次郎吉ハ跡よ添ひ二人の女子を誘
 ひて元の座敷に立出るに最前次郎吉三右衛門が彼抜穴へ這入し時下男の與助を確りと柱よ縛
 し置しかば動きもやらず眼許り光らし亂視くゝ居る有様を見る三人ハ打笑ひ見向もせず
 よ門へ出れば半次ハ其處よ待詫て親分餘りよ遅い故先刻より待て居ました首尾ハ如何と尋る
 を夫ハ固より上々吉夫ハそうと宿を借た老婆よ幾何か遣たかと云へるを待す次郎吉が夫ハ先
 刻私が出懸る居爐裏の側へ小遣の餘りが四五兩在た故鬘斗を付て置て來たが又此後幾何でも

持して道たが宜らふと云に淀辰三右衛門も行届きたる次郎吉か取扱ひを感じつ、夫より半道程行しよ早夜も明近くありにぞ此處にて淀辰以下三人の二人の藝子と道引違へ大坂指て立歸りぬ

鼠小僧實記上卷終

鼠小僧實記中卷

○與助大太郎が惡業を白狀の事

並次郎吉宿屋の亭主を欺く事

借も十生目村よての其次の朝世話人共が例の如く圓覺寺へ打連立て行けるに何か様子之怪しきより直さま住持の居間へ到れば下男與助の慘酷にも縛しめられて居たるにぞ早速解て仔細を問へば此與助も和尙どの同類乍ら偽りて只盜賊の忍び入しと語りしのとよて和尙の惡事の少も言ひぬに世話人共の不思議に思ひ先二人許り中へ入て彼座敷へと至り見れば和尙の横死の有様よこは是如何よと打驚き只事をらずと早速村役人に告知すれば直其筋へ訴へ出しは檢使の役人出張して彼拔穴の様子より和尙が死せし有様杯篇と委細に取調べ與助を召連役所へ到り嚴しく吟味たれども與助の偽り陳ずるのみ然れども何か口の合ざる處ありたるより拷問よ悪て責問ふに與助の苦痛よ堪へ難て和尙の事を逐一よ白狀したる趣き今の圓覺寺の住持といへるの元北國の強盜にて穴熊大太郎といふ者あるが彼ハ山中に成長して自然に備はる大力あり壯年の頃より山賊となり旅人を殺害し金銀を奪ふ事數知れず殊よ山中よて怪しき異人より奇術を傳はり人を迷はす事に妙を得たれば其業を以て愚民を迷はし金銀を貪

り榮花を盡せしが邊鄙の所の自由が足らずと都近くへ姿を替て來りしが幸ひ圓覺寺よ逗留の折から先の住持が死去せし故遺言と偽り後住と成り彼奇術を以て愚民を迷はし加持祈禱をなす多分の賽錢を貪りしが十生目村の長たり一三太郎と云者が是を拒支へしを意恨し思ひ或夜其家へ忍び入三太郎を殺し金子を奪ひ諸人よ佛の利益を妨げし罪に依て此禍ひに罹りしならんと云ひ觸し其後の誰も憚る所もなく加持祈禱をなし不思議の業を見せし故諸人の活佛と尊敬し毎日の參詣の夥多し賽錢の山の如く集るよ大太郎思ふやう斯敷多の金銀集まり酒食よの飽足と雖も我四十歳よりて異人に奇術を授けり時女の肌を觸事を戒められしが最早六十に及びぬるに何迄生んや人間の樂しみをなさざるの愚なり此後奇術の驗し失るとも顔能き女を寵愛して樂しまん夫よ就て其隠れ家を設けんと手下の内に大工の有しを幸ひと他の七八人の手下に手傳のせ夜なく忍びて此春より普請に懸りし處漸々五月頃出來上りたるに大太郎の手下の口より洩れん事を恐れ其事を係りし者と祝ひにとて酒を十分よ飲せ酔潰れし處を切殺して墓所へ一所に埋めし故誰知る者も無りしなり然るに此月の始め島原の藝子龜八小花といへるが休日知らずして來りしを大太郎垣間見て其顔美に心を迷はせ加持をなすと欺き彼座敷へ止め置き奸淫せし事共の仔細を逐一に白狀せしかば與助も大太郎の手下にて年

頃悪事に遣はれし悪者故死罪となり又大太郎が首の獄門に懸られける依て今迄活佛と尊敬せし諸人も此有様に始めて夢の覺たる如く大驚き合りとぞ扱も淀辰等の大坂へ立歸り彼近江屋の離れ座敷にて彼大太郎が貯へ置し金を改め見るよ一千二百五十兩ありたり依て四百兩宛を配分なし残り五十兩の半次と與へ互に悦びの酒宴を催しけるに次郎吉の言ふ様我等事最早三年も當所よ居て此頃頻りに古郷の親の懐しくなりたれば此酒宴を別れの盃蓋として一先歸國する所存なりと告るよ淀辰三右衛門も名残惜くは思へ共親を案じて古郷へ歸ると云を止むる譯にも行ぬ故よ切て今宵の夜と俱に飲明し翌日緩々と出立あれと種々に饗應して四方山の咄しに其夜を明し扱翌日次郎吉の名残は盡じと暇と告跡の住居の事ハ兩人よ頼と置き終に大坂を出立して東海道を下り或日水口の驛に宿を取て草臥休めよ按摩と呼療治をさせ乍ら土地の様子杯を咄し面白き事ハなきかといふよ彼按摩の言樣世の中よ欲と色氣のない者ありませんが此家の旦那ぐらぬ強慾の御人の澤山ありますまい先御聞なされよ私共の治療代さへも二割宛の割符を取る程故百でも錢の儲かる事なら夜中でも駈歩くよ又斯云ふ金設けがあるなど、人か咄でもするを現よ成て慥に儲かると見込が付ばずんく金を出しますよ又這入事も多く先此土地での金持なれとも毎も變らぬ泣事計り特に今より遺言して己が死んだら有金

は一所早桶へ入て埋めて呉と云ふとの事と物語るよ次郎吉打笑ひ金の誰しも欲けれ共死してから一所早桶へ入られても地獄へ行て世帯を持たしよも成まい而して此家の主人の幾歳位と聞バ五十五六歳位で御座りませうと言乍ら旦那腰を揉ますから横よ御成なされと背中を擦るを次郎吉ハ居直つて何さ足の草臥ぬから止に仕様と二朱金一個を療治代に與へければ按摩ハ是を探り見て是ハア仰山を斯様に多分頂きまゝてハ驚くを能いから持て行ふ大きよ御苦勞と言ふに按摩ハ悦び勇み其處の座敷を出て行跡に次郎吉ハ寢乍ら煙草を吞今按摩が咄した慾張た此家の亭主どうか驚かして遣度ものと思案をしながら其夜ハ眠り明る朝顔杯洗つて後下女を呼び時よ女中さん私ハ商ひの事で暫くの内逗留するから御亭主よ左様言ふて下されと朝飯を喰ひ夫より二階を下來りて一寸買物が有から下駄を貸して呉んな荷物ハ二階置て來たうら氣を付てよと頼み置き表の方へ出行が問もなく小さな金籠の様な物と其外何やら買調へ二階へ上り乍ら姉さん何か味ひ物で酒を持て來て呉と云ひつ、我借し座敷へ行小屏風を立て廻り何か聲々と叩いて居る所へ女が來り酒肴を出すに次郎吉ハ屏風を出て姉さん氣の毒だが此小判を兩換屋へ持て行て二朱金と取換て來て呉なと五六枚出すにハイくと云ひ乍ら出行しが程なく取換て來りしを次郎吉ハ二朱金二ツと紙小包んで是ハ使貸だと女中よ遣

れば女ハ禮と迷酌杯して暫く居てを次郎吉ハ未だ仕事有から酒ハ晩に仕様と晝飯を食ひその女を下へ遣て又聲々と夕方迄叩いて居りしが頓て屏風を取除け手を叩ひて下女を呼酒肴を眺へつ、又小判十二三枚を出して二朱金に換て呉よと頼むよ下女は畏まりまゝた二階を下り表へ出んとするを此家の主人が呼止め是々其兩換するといふ金と一寸見せなと金を受取目鏡を掛て色々と捻り廻すよどう見ても正銘の小判故其ま、下女に渡腕拱ひて考へる様那二階の逗留客は晝前四五枚程小判を二朱金と換今又十二枚同じ小判を同じ二朱金に換るは何と一た事と聞バ屏風の中で聲々何う叩いて居ると言ふが何にしる怪しい奴と一人不思議と思ふ折柄下女が金を取換來るを又主人ハ呼止めて今度は己が持て行と金を受取二階へ上り次郎吉が座敷へ至りて私ハ當家の主人權右衛門と申者取換のお金か大金也へ手前持參致しませしたと次郎吉が前へ差出しぬ

○次郎吉金子を騙つて水口と出立の事

并關の地藏尊由來の事

人を欺くに道を以てすれば賢者とも欺き得るとかや扱も次郎吉ハ權右衛門よ向ひ是ハく御主人の御使がら恐れ入升と云ひあから彼二朱金一兩と紙に包み當分私も御厄介よ成升故少

しをがら御前さんへ御近付の印よと差出せの權右衛門の満面に笑を含み是はく多分の賜も
 の有難く頂戴仕つりますと押戴く折柄女が持来る酒肴次郎吉の權右衛門の猪口をさし猶も女
 よ肴を云付て馳走をするよ亭主も兼より飲口故腹の痛まぬ御馳走酒多く飲程店の儲けと追従
 たらしく幸藏と互ひに酒酌換す中よ權右衛門の聲を潜めて斯申て如何なれ共旦那なか
 く御器用の御方先刻の小判の御手細工かと云ふよ次郎吉の打驚きたる風情をして御亭主に
 斯見顯はされて何ぞか隠し申さん實に私しの手細工なれ共石や瓦を手細工とするよ非ず
 白銀を求め私しが秘傳の薬を用ひよものよて手敷と考へると然程の利益も御座らぬと云へば
 權右衛門の膝摺寄シテ其徳の何程位と聞に次郎吉の仕濟したりと然様さ先千両拵へるに百
 兩程の白銀を仕入ずば出来上るまじと云ひつ、懐中の胴巻より金包を取出一見見れよ此金の
 大坂にて拵へしものなるが傍の者が五月蠅故實の逆て来ま一たが私も千兩程仕揚度今日知
 らる、通り仕揚たを兩換して見た處滞はりあく通るゆる御前さんの家の水も薬の性よ合のな
 らんと實の嬉しく思つたゆへ翌日早立に大坂へ行て白銀を四五千兩仕入て来て又此座敷を
 借る積りの處御前さんに見顯はされて宿を變ずるまい折角薬の性よ合し此家の様を宿
 屋を探すが難義あれど知られし上の詮方あし併し此事の密々にと云を權右衛門のこく笑

つて旦那斯御宿とて御馳走を受るも他生の縁何せ旅籠へ御泊りあらは我等が方よ毎迄も御
 滞留有様よ私より願ひます夫よ付物の御相談なるが當節柄當家も不廻りゆへ御手間次第に
 千兩程も拵らへて頂き度其代りに旅籠錢の勿論三度の御膳も肴を添へ御酒も御好み次第差
 上ますが如何でせうともみ手をして欲に目のなき權右衛門が額の皺を延一つ縮めつ頻りに頼
 むよ次郎吉の承知して夫なら翌日早く大坂へ行程よ何程にても元金を用意して置なされ併し
 見ず知らずの御亭主より只金子を預るも氣が濟ねば是はなくて叶はず又金で買れぬ藥あれ共
 大坂より歸る迄御前さんに預る程に大切に仕舞て置て下されと先に表へ出し時奇麗ある砂を
 拾ひ西の内に包み置きしを恭敬しく差出すに亭主の太いに安堵して然らぬ是は私しが慥かよ
 あ預り申ますと云つ、下へ行たるが頼て算筒より小粒金百兩と取出し直持來りて次郎吉へ渡
 し之よて白銀を買て早く千兩の顔を見せて下されと大悦びの大欲人次郎吉の員敷を改め請取
 て然様なら翌日早立故女にも能云付て下されと互ひに辭を約しつ、猶も女を呼び酌をさせ
 暫し酒宴をなせし後其儘枕に付たるが大膽極まる次郎吉の前後も知らず酔臥ぬ扱又亭主の嬉
 しく寝も遣らず一番鶏の鳴を待兼女を起して膳の支度をさせ次郎吉を起しけるよ漸々起て
 顔を洗ひ悠々と飯を喰ひ身支度して未だ明やらぬ闇きを幸ひ西への行かず東に向ひ土山さ

て行きたるに其日も暑き強き故日中の茶屋に休み晝寝杯をして申の刻下りの頃關の宿に差懸りぬ扱此宿の邊りに地藏尊の在りしが是は行基菩薩が作との事なるが一年再興の時紫野の一休和尚此地を通らせ給ひ我地藏尊に開眼なし得させんと讀給ひうの歌は「釋迦の過彌勒の未だ世よ出ぬ斯る浮世よ目をあげ地藏」と二三遍唱へ立乍ら小便を仕懸行給ひに里人共の餘りの事と呆れはて今の坊主其儘よの濟し難しと何れも立腹したるが先地藏尊を淨めよと洗ひ淨むるに其の夜よりして里人共大熱を發し且地藏尊に偶々名僧の來られて尊き開眼を受いと嬉しく思ひつるを凡夫の爲よ洗ひ落されし事恨みに堪はず再び彼名僧よ開眼を頼みてと踊上りく示現在しかば里人の中此事よ關係ぬ者大きよ驚き彼僧を呼來れとて跡を追懸漸々桑名にて追付しかば彼事共物語り何卒今一度開眼せらるゝ様と願ひけるよ一休は再び歸るも面倒故之を持行て地藏尊の首よ懸よと古く汚れし鼻樫を里人に與へられしに里人等急そぞ立歸り殺への如くなせしに彼崇り有し里人等の以前の如く平穩して何事もなくなりしと斯靈驗著なる地藏尊故次郎吉は參詣して其處を立出しが早日も暮果て七月三日の月影は西山よ出一かど行過る村雲に道いと闊くなりたり然れど元より闊路よ迷はぬ眼ゆる畔道傳ひに本街道を志ざし行に向ふよりとばく歩行來る者ハ年の頃定かあらねど老人と見え杖とつきながら

いと殊勝氣よ念佛を唱へつゝ溜息して今宵が此世の名残かや定めし後よ残りし悴めぬ歎くで有ふ嗚呼金が敵の淨世ぢやと吐き乍ら次郎吉よ摩達ふとも知らず道よ年經る松の樹よ我帯と結び下げて既よ首を縊んとするよ次郎吉慌て押止めマア親父さん何なせつない事があるかは知らぬが死んでは花が咲ぬ譬喻仔細を私よ咄しませへといへば彼者は泣聲よて何方の御方か知らねど御深切の其御辭併し生て居られぬ此身の上何卒見通し殺してといとも哀れの形様なり

○次郎吉首縊を助ける事

並幽霊よ止めらるゝ事

扱も其時次郎吉ハ彼者に向ひ今御前が獨り言に金が敵の淨世と言ひ一が何程あれバ死すよ濟のか私よ話して聞せなせへと問に彼者の涙を押へ其金と言ふも五兩か十兩の事なら又詮術も有ますが大枚五十兩と言金のなけれバ可愛や一人の悴めが終に牢へでも入られん若牢内で死んだなら跡に残り一此私が何様の歎きで有ふと夫が憂さに先へ死なふと思ひ詰たる今宵の仕義御深切ハ添けぬが助けると思ふて死して下されと言ふに次郎吉打笑ひ何の事だ五十兩やそこらの金で死んでつまる物か私ハ江戸の大商人何の某しと言ふ土藏地面も澤山持て居る者

の悴だが今度大坂へ親仁の名代は仕入に來た道すがら此宿の地蔵様の江戸でも名高い佛故供の者ハ宿へ待せ一人で參詣に來た途中御前の死ふと出懸た處へ行逢ひしも皆佛の助けて遣れとの御引合せ私が五十兩上る程に譯ハ知らねと息子の難儀早く救ふて遣なせへと胴卷より金取出し數改めて手は渡し最う夫で死なずとも宜からふから早く行なと言ひけるは彼者の腹を潰し夫ハ有難い事乍ら見ず知らずの江戸の方ハ大金を貰ふ所謂なしと田舎育ちの律義者返さんとする有様に面倒なりと次郎吉ハ金さへ渡せハ用ハなしと思へば其儘一趁道を撰ます逃出せしが素より身輕の早足故十四五町も遠ざかり發と一息繼ぐ向ふより是ハ是ハ遅き御着先刻より御待受申したと云ふに次郎吉ハ不審して星明りに透し見るに五十有餘の老人が杖よ継りて叮嚀に挨拶あすよ夫ハ親仁さん人違ひだらう私しハ江戸の者だが今人よ追れて道も知れぬハ此處へ出て來さばかり併し御前逢たハ幸ひ何卒宿へ出る道を教へて下せいと云へば彼老人ハ貴君の御存じなきハ御尤もあれ共私し事ハ三年以前桑名の宿の邊りなる小家の親仁で御座ります彼時ハ大病故御深切の一伍一什ハ失禮乍ら寝て居て殘らず承まはりました又跡よて娘お市が貴君より惠んで下された大金も私しよ見せて悦ばせ夫より十分の藥用で今でハ達者よ成し此親仁も皆々貴仁の御情よて其後の家業に取續き親子三人氣苦勞なく暮して居り

ましたか娘も今年十六歳庄屋殿の御世話よて爰より僅四五町先にて村の中でも律義者正太郎と云ふ者の女房よ成ましたが先よも親があれ故よ一所に成が宜らふと庄屋殿の差圖に任せ今でハ桑名の小家を賣て弟の太吉と私し俱々一所此方に住居して居ります程よ何卒是非御立寄と云ふよ次郎吉ハ心の中扱ハ孝女お市の親なりしかと思へハ今ハ疑ひ晴しが立寄て世話に成んも氣の毒と暫し猶豫なしけるよ跡より追來る二人連一人の若き男が提灯の火影をかざし咄として居る次郎吉に向ひ若や爰へ江戸の御方ハ参りませんかと尋る言と諸共よ連の親仁が次郎吉の顔を情々見て悴よ此御方ぢや今私に五十兩といふ大金を下されて死ぬる處を御救ひ下された江戸の旦那に違ひハないと云ふに若き男ハ腰を屈め是ハ親仁の命を御助け下されし旦那様で御座りますか私しハ此關の宿の者よて荒物渡世をする政吉と申者今度京都の本願寺様へ土地の講中の者が奉納金を致す迎集め一金が五十兩私し持て參る圖が當り今日晝過世話人方より金を請取て我家へ歸る道様子を知りし惡者が待伏して直に争鬭と仕懸二人して亂暴よも私しを打擲なし彼の五十兩を奪ひ取り行衛も知れず逃失しに詮方あく我家よ歸りばせしもの、無言で居る譯にも行ず親仁よ咄として何卒金の工面をと言ひ置き當りきければ如何にかせんと獨り我家を立出しが親仁ハ話をした時に痛く力を落したる様子に

見受し事あればどん間違ひでも有てはならぬと又立歸る我家より親仁の見えねば爰彼處と尋ねしよ漸々道まで出逢ひしゆる様子を聞ば云々と貴君の御慈悲の物語り切てハ一言御禮も申度追参らせし親子が心を汲分られ何卒今宵ハ私一方へ御泊りなされて下されと次郎吉か手をとるよお市の父ハ腹立て御前の方ハ何云譯か知らね共私の爲にハ大事の旦那今宵ハ御宿とする約束マア旦那此方へと言ふを政吉親子ハ承知せず何でも今宵ハ私等の家へ御泊申さねば氣が濟ぬと互よ争ひ果しなけれハ中に立たる次郎吉ハ迷惑してぞ居たりける

○次郎吉孝女が家を忍び出る事

並吉岡村の落着を聞く事

扱も次郎吉ハ二人の老人と一人の若者よ引止られて困じ果レが双方を宥め御前達の深切誠よ難有ハ併し一ツの體で兩方へ行譯にも行ぬから今夜は先へ迎ひよ來て呉た親仁様の家へ泊り翌日ハ政吉さんどやらの家を尋ねて行から其積りにして下さいと言ふよお市の親仁ハ悦びしが政吉の親仁ハ本意なく思ひ悴よ旦那が斯おつえやるを無理よとも言れまい兎も角も今夜御泊りなさる家迄御供して行ふではないかと漸々よ納得し四人打連お市の親の案内よて正太郎が家へ到るよ政吉は提灯と持居る故先へ這入て江戸の旦那が御出なすつた誰ぞ御出といふに

不審して娘も市今ハ此家の妻成レが奥の方より出來り次郎吉の顔を見るよりヲ貴命ハいつぞや御深切よ私共を御助け下されし江戸の旦那様能くマア御出なされま一た何卒此手ハ御上りなされて下されと甲斐くしく座敷へ通し夫正太郎に次郎吉が事を告るに豫て聞及び女房が一家の恩人との事ゆへ弟太吉と俱よ座敷へ出挨拶して其時の禮と進茶を進め杯しける内お市の太吉よ手傳ハせ酒の用意をするに次郎吉ハお市に向ひ今送つて來た政吉と言ふ親子の乘ハ歸りましたかと尋るよ否未だ出口に腰を懸て何やら此方の親仁さんに相談があるとの事併し一向譯が解りませんと云ハハ次郎吉は左様かへ實ハ此方の親仁さんがどうして知たか私を迎よ御出の處アノ親子の衆が是非自分の家へ今夜私を止ると云ふて先刻道よて争ひハ親仁さんと何か咄ても有のだらうシテ御前の親仁さんハ何處へか御出かへと云ふよお市の不審顔私ハ親仁ハ此間亡なりま一て今日ハ初七日で御座りますと云ふよ次郎吉ハ戰慄と一で夫でも今迄確よ一所に此家迄咄を一ながら來ものを其年の頃ハ五十あまり着物は確の相鼠で大きな三ツ柏の紋が付て居るのを提灯の明りで見覺えて居るが幽霊あるら夫とも狐狸の化せしかと云ハお市の泪を流しそんなら夫ハ眞實の親仁の幽霊で御座りませう其譯をいハハ三年跡に貴君にお金と頂き藥を買て養生を致しませ一たら段々と病氣ハ癒り親子三人樂々と御陰で

暮しを立て居りましたが私ハ此春庄屋殿の御世話にて此家へ嫁入参つた處爰ハ外に舅姉も
ない故家を一ツよした能いと庄屋様の御差圖に那方の家を賣拂ひ夫から親仁も弟も一所よ
此家よ居りまゝたが先月の中頃より又親仁が煩ひ出し病氣は左程でもありませんたか今度
はどうせ助らぬと自分も覺悟の様子よて夫に付ても貴君に一度御目に掛り何時ぞやの御禮が
云度と夫計りを云續け終よ其儘亡くなりましたが定め御歸りを草葉の蔭で知りし故私共よ
先年の御禮を云せる其爲よ幽霊の姿を顯したのに違ひの有ません証據ハ今仰や相鼠に三
ツ拍の紋付ハ死ぬ時着て居た着物で御坐りますと語るに次郎吉ハ更なり出口よ咄しを聞居た
る政吉親子も不思議の思ひ死んでも思を忘れぬとハ實に感心な此家の親仁と今ハ外に云べき
相手もあらぬ故次郎吉に翌日の約束を堅く契り所書を差置て政吉親子ハ立歸りぬ倍も市ハ
夫正太郎弟太吉と諸共に次郎吉を主人の如く敬ひつゝ酒宴をなして饗應しけるに其夜も更一
かば次郎吉ハ漸々酒を辭退して臥處に入りが獨り思ふ様此家の夫婦又彼政吉親子が僅の惠み
を有難がり長留するハ必定あれば早く此家を出立せんと夜の中よ身支度して夜明前に徐と寢
處を抜出て疾々草鞋の紐を結び朝の涼き内早く街道へ出んものと菅の小笠に面を隠し露階分
て裏道より東を指て走り行りに幸ひと關の宿へ出しかば只ある茶屋よて朝の支度をせし道を

急いで行しゆゑ其日よ桑名の渡しを越て宮の宿へと着しかど以前泊りし吉が家を素通り
て外の旅籠屋に泊りしハ成丈人に見知られまじと思ふ故あり斯て其次の日岡崎へ出馬よ
打乗て馬士と四方山の咄の中次郎吉が言ふやう私が三年跡よ大坂へ仕入物が有て來た處此
近所よ吉岡村の太郎左衛門とか言ふ大盡へ盗人が這入大金を奪ひしとか召捕れたとか言ふ噂
が有たが那仕舞ハどう成しかと問ば馬士ハ氣も付ず旦那聞あせへ世の中よは馬鹿な盗人も
有もので二千兩と云大金を背負たお蔭で二人の賊ハ窓に支へて出られぬ處を其儘藏の中で捕
り其筋へ訴へたより嚴しく吟味され終よ舊惡の護魔の灰と云ふ事まで白状したので首を捕れ
たが其仲間の幸藏とか言ふ奴ハ三百兩を盗み跡白浪と逸失て未だよ行衛が知ぬと言ひますが
其奴ハ中々氣轉の利た奴だとか云ふ事と聞て次郎吉心中よ掬ハ清兵衛文吉ハ首よ成しかと念
佛云も口の内歎息の外なかりが何時り馬ハ岡崎驛へ着にけり

○赤坂街道よ兩賊旅人を殺す事

並次郎吉旅籠屋を騒す事

扱も次郎吉ハ晝の中ハ暑さを厭ひ茶屋よ休み日のかけるを待て夕方よ道と歩行しか其日も遅
く藤川より赤坂へと心ざり彼方へ宿を借んと細き月影を便りとして道と急ぎ行に遙かよ那方

よてアツト人の叫ぶ聲するよ何事やらんと忍びやかに到り見るに無慚や一人乃旅人と二人の悪者が切殺せしまり次郎吉今の助ん事も叶難く旅人の息の絶し跡をれば切齒をみし彼等が様子を伺ふよ一人の賊の言たるの兄貴思ひの外脆い奴併し今迄の辛苦の並大低の事でのなかつたといふを今一人の夫のそうとも濡手で粟の掴み取り人の物を只とる商賈少し位の辛苦の當然の事とれ胴巻を改めて見様と懐中へ手を入れ引出す胴巻より爲落す二包み何だ作七己が眼の高からう此間より二百兩の確だと積つた目利何んと勘入よ驚いたらふと自慢顔よ言矜るを作七は悦びながら實に兄貴の當時の流辰にも劣らぬ盗人先生約束通り一包みと手を出すと勘入マア待あ今夜の赤坂泊りだから晩又緩くり宿で渡さう夫のさうとまだ旅人が腰の廻りに小遣ひ錢でも有たらふ置て行のも贅な事尋ねて見ると言乍ら彼金包を月又隠して何だ京都寺町通り佛光寺門前尾張屋彌兵衛ハ、ア印は山形よ與の字が朱印で封しよ押である此胴巻の紫縮緬下藤の紋を白く染抜であるから其處の主人にても有か知らん何しろ作七此胴巻ハ己が貰て置ぞと金を入れて懐中するよ作七の漸々二三兩の金を尋ね出し是でも當分の宿錢に困らぬと打笑みながら懐中して兄貴行ふと二人連立赤坂を指て行跡より窺かに忍ぶ次郎吉が跡に付添來るとの知らぬが佛か夫たらぬ鬼の面ある赤坂の或る旅籠屋よ着きしかば次郎吉

ハ少一後れて其家へ泊り例の獨酌で飲あがら今に那奴が膽を取挫ぎ呉んと心よ笑を含み少し酔を催して暫しの床に入たるが其夜寅の刻頃起上り烈しく手を叩き下女を呼ぶに女ハ何事よと坐敷へ來るに次郎吉ハ驚ける顔付して姉さん外の事でもあいが私の大金がなくなつたが何卒内々御主人を呼で貰ひ度と言に女も驚き主人の寢間へ行て斯と告るよ亭主ハ取ものも取敢ず早速次郎吉の坐敷へ來り其仔細を尋るよ次郎吉の言様我ハ江戸の者なるが京都へ仕入の事にて参りよ彼地よりも江戸へ詭へ物が有て金二百兩を受取て参りしが毎も泊りよ其宿へ預けし處昨夜の泊りも遅くなり殊に一杯機嫌で終に寢て仕舞今日が覺て氣か付ハ胴巻の儘金ハなし何でも私か思ふよ外より入し盗人ならす屹度合宿の客と見ゆるが何卒詮議して下さる様御禮ハ十分よ致しますと語れば主人ハ仰天し夫ハマア大變併し手前方ハ戸締も嚴重よて殊よの寐ず番も居りますから外より這入氣遣ひハなく殊に今朝ハ未だ御一人も早立の客もなければ御前様の言る、通り合宿の中に盗人の有違ひハ有ませんから能々吟味致しませう併し其胴巻ハ何か證據でもあり舛かど尋るよ次郎吉ハ有ますとも胴巻ハ紫縮緬に白く下り藤の紋が染抜てあり殊よ金を包んだ上書よハ京都寺町通り佛光寺門前尾張屋與兵衛と書朱印ハ山形よ與の字が封じめに押てあり升といハ主人ハ左様證據が委しくある上の尋るよ都

合も宜しく然らば其町 處名前丈の一筆書て下されと言ふよ次郎吉の用意の矢立よさらく
と認め主人に渡しけるよ主人の夫を懐中して少しの間待れよと座敷へ出て店へ到り手代共を
呼集め細引六尺棒杯非常の防ぎよ持せ亭主の先立て相宿の客の間へこそ到りけれ

○亭主相宿の金子詮議の事

並兩賊旅人に金を奪るゝ事

宿屋の主人の相宿の客を糺さんと客間に到りて一々仔細を告し上旅荷物を改め見るよ暑き七
月の時なれば旅人も皆々單物の身輕の立立裸になるも幸ひと衣服脱捨る身の潔白何れも荷物
を手渡して勝手次第改めさするも身よ覺えなき濡衣を着まじと計る人心笑ふもあれハ咳く
も數多の客の其中は彼勘八作七の兩人の何やら家内が騒々しく相宿の旅人が金を取れた迎他
の客を詮議すると聞我よ覺えのなけれ共昨夜道よて旅人を殺し奪ふた二百兩若し疑はれてハ
つまらぬと二人の座敷に頼を合せ惡ひ旅籠へ泊つたと今更悔めど詮方なく密々囁く其處へ御
はちの廻る旅籠屋の亭主が隔ての障子を明て貴君方も御聞及びもござりませうが昨夜泊り客
の金子が二百兩紛失に付御氣の毒様にハ存ずれ共御銘々の御荷物より御懐中の物まで押り乍
ら御見せ下さる様願ひます併し是はほんの彼御客への念晴し御早く何卒と急ぐよハ此方の勘

八腹を立て我等ハ正直堅固の旅人よて其様胡亂者でハ御坐らぬと云を亭主ハ夫ハ其様方許
りでなく皆正直の御客なれど念晴一の爲御頼みすて失禮乍ら御荷物を拜見致すも宿屋の役目
手前も數代此土地で旅籠渡世を致す者ゆゑ今街道の人よ知られハ暖簾一紙を付まじと昔様方
へ此通り七重の膝を八重に折て御頼み申譯なれば爰の所を篤くりと御聞分を願ひ度今更貴様
方ばかりを見ずよ濟すと云ふ譯よハ何分参り兼ますと云ふハ世間の情として拒む程猶疑はし
く居座る亭主の跡に付添男共まで忽ちよ必定此奴と目星をつけ主人が差圖あるあらハ直打据
て引縊らんと囁く様子よ此方の二人の氣を吞れたれど偵ハ惡者如何とも云て遁れんと先勘八
が亭主よ向ひ左様云ふ譯なら我々が荷物ハ改めさせ様が先ハ斷つて置度は我々逆も旅をする
者金を持ぬと云ふ譯なら調度二百兩所持して居るが是ハ全く我等の金子其方よ何あ証據が
有かハ知らぬが此洞卷でハ有まいと懐中より取出し主人よ見するを此方ハ直様受取て是ハ紫
縮緬に覺えの藤の紋白く染抜て有のはと云つゝも勘八が顔を詠むるに側から作七が御前
んなよ不審な顔をする事ハねハ其洞卷の年來兄が持て居る事ハ己も知て居る胡散臭い者でハ
ないよ口出しすると亭主ハ嘲笑ひ世の中に似た物を持つハ随分あるが是ハ餘りよ似過ます併
し入物の兎も角も此方よ慥の証據といふハ金の包紙よ書た物ハ有ますが此中にある金の包み

紙よ何の印が有ますと問れて勘入差詰り左様さ儘か山形と與の字の朱印が封よしてあり
 夫から京都寺町通りエ、と考へて居けるを亭主の見つゝも聲荒らげて、な盗人めが我持金の
 表包と夫も五兩か三兩の端た金あら兎も角も二百兩といふ大金の表を包む大切の名を忘るゝ
 といふ事か何處の國よ有物知らずハ私が致へて遣ふと懐中より端紙を取り出し京都寺町通り
 佛光寺門前尾張屋與兵衛サア此通り胴巻の中の包に書て有ハ一も二も入らぬ江戸客の仕入金
 といひ乍ら胴巻振つて取出す金其上包ハ紛ひなき主人か詞の町處サア是でも手前達の盗まぬ
 と強情張かと白眼付れハ勘入作七何一て此金包を見知られたかと呆れ返りて詞もなき其折此
 家の男共主人の下知もなき内に早折重りて二人を縛一め座敷の柱に縊一付ぬ亭主ハ胴巻の儘
 金を治郎吉か坐敷へ持參して悦び玉ハ以前さんの金か出ま一たサアは受取なきいと差出すよ
 治郎吉ハ押頂きは亭主さんの働きで命にも代難き此二百兩何と禮のサ上様もは座りませ
 ん併し盗んだ奴もほんの一時の出来心金子か元へ戻る上ハ勘辨して遣て下さいましと云ひ乍
 ら懐中より十兩取出し是ハ御亭主さんへの御骨折一盃上つて下さい私しも急く旅故よ此金ハ
 確よ御貰ひやて出立致します跡ハ何分宜しくと行んとするに亭主ハ十兩の金を押戻一何して
 紛失の金の出ましたハ御前標計りの御仕合でハ御坐りません私共の店の仕合決して御禮よ

ハ及びませぬと正直一圖の亭主か辭義を次郎吉ハ無理に進め左様ならば夕部の騒動で御世話
 に成た皆々様へ鼻紙代と思つて下さい夫で無つちや氣が濟ぬいと江戸子氣前の調子も能く人
 の物した其物を懐中なして暇を告そこく出立なしたるは實よ大膽の事なりけり

○次郎吉大井川の逆浪を越る事

并鞠子宿よて危急を遁るゝ事

名よし負ふ東海道の大井川流る水音凄しく昨日よりの霖雨よて往來も止り川端に十四五人
 の川越の雲助共か晴渡りたる朝日影何れも裸百貫の錢とは行ぬ小博奕の車坐よ並居て勝負
 くの高聲を次郎吉は其處へ行て川越さん一服貸て下さいと煙草の火を借て未だ川は急よは
 明ますまいかと尋ぬれハ川越の中よも頭立たる男と見ゆるが旦那御急ごなら極内々で渡して
 も上ませうが其處がそれ地獄の沙汰も金次第一升はづんで下されば命を限に遣つけませうと
 言を次郎吉打笑ひ大ぶ安い命だを良々遣て呉ねハ己急ごの旅だから金に糸目を付ては居ら
 れねへと小判一枚手渡一するに川越共ハ打悦び是ハ旦那御氣の毒皆々確り氣を付て御怪我の
 あい様するが宜いサアサア旦那お召なさいと金の威光の御手車連臺居て八巻も四枚肩なる腕
 つてき水を押切思ひの外容易く向ふの岸へ着しよ次郎吉發と一息吐き大きよ御世話といひ乍

ら島田驛へと行過る跡は残りし川越共が今の旅人は強氣な氣まへのい、奴だ何でも懷中に四
 五百兩は大丈夫何をしてても有所は有ものだと嘲するさへ聲高ある雲助共が後の方に様子
 立聞一人の旅人獨り何やら打點頭道引返し次郎吉が跡を慕ひて追行しが漸々追付て若旦那御
 前様へ江戸へ御出と見請ましたか私しは江戸横山町の者で御座りますすが兎角一人旅といふ者
 へ心淋しい者どうか道連れ成て下さいと馴々しい奇るよ次郎吉の其男を見るに年頃ハ四
 十位人品能赤銅造りの旅脇差柳行李を肩懸たる様子ハ二度飛脚とも言へるなるが眼さしの
 虚勞くしたるよ此奴も清兵衛同様の護摩の灰かど心付りが獨り旅より咄し相手の有こう宜
 けれど夫ハマア能い道連れ御察しの通り私しも江戸へ行もの左様ならば御一所參りませうと
 四方八方の咄しを爲乍ら行りが其日の夕方鞍子宿に泊りて名物の蕨漬汁食し處大酒も進み
 次郎吉も大層酔い体よては前様は免なさへ少し横に成ますからと宿の女よ枕を借て轉寝せ
 しが前後も知らぬ高軒彼道連の旅人の深く酒を飲して食事とを宿の女と呼姉さん此人ハ
 大層酔た容子ゆゑ早く蚊帳を釣て遣てお呉私ハ少し庭へでも出て涼んで來からといひ乍ら
 我赤銅作りの旅脇差を腰にぶつ込み二階を下り行くよ素より次郎吉ハ誠は眠りよハ非ず只
 道連れ成し旅人が様子計る嘘寢入故宿の女が釣て行し蚊帳の中は寢乍ら一人思ふ様彼旅人

が涼みよ行と言ながら脇差を指て行しハ何か了箇の有事ならん何よしても迂闊く寢ては居
 られぬ今夜ハ殊よ奇たら彼奴を置去にいて肝を潰させ呉んと蚊帳を徐と抜出て素より身輕の
 一人旅金より外よ荷よなるべき物のあければ身支度なして此家の庭口を忍び出るよ垣根に誰
 やら密々咄し忍びの術ハ知らぬ共自然と妙を得し次郎吉故彼等が側に身を寄て耳を引立聞と
 も知らず最前出し彼旅人の聲をひそめて語るよう今夜の首尾ハ十分よ一盃喰せた蕨漬汁泥の
 様に寢腐つた那生意氣の青年懷中なしたる金といひ又人体格好ハ彼清兵衛文吉が吉岡村にて
 白狀せし幸藏と云ふ盜賊よ必ず相違ない事とは大井川よて見止しが不覺の事をして仕損じて
 は折角見付し甲斐はなると此宿屋迄は味く欺して連となり今醉倒れとせし上ハ最早道さぬ此
 方の者腕に覺えは有とて天命盡し網の魚併し侮らぬ様我よ續けと懷中より捕繩出して身支
 度するに子分と見ゆる三四人が心得ましたといひあが何れも赤繻の十手を携へ然れば親分
 遣りませうと俱に隨ひ行程に兼て此家の主人よも内通をせしものと見え家の内の出口く
 下男杯に守らせる様子を窺かよ立聞したる次郎吉は大に驚き彼奴ハ清兵衛文吉と同じやうな
 る護魔の灰と思つて居たハ間違いで所の目明しで有たるか何ぞろ遊るよ如くはなしと垣根を
 乗越逃出一ぬ

○次郎吉狐付と成事

並徳助を討つ事

借も次郎吉の道連になり横山町の旅人と云ひ一の東海道岡崎驛の目明しよ一て高田屋卯之吉
と云者なり三年以前に吉岡村の太郎左衛門方へ忍び入たる賊の内二人其場で召捕れ追々吟味
よ及びし處逃し一人の幸藏とて其顔容ハ斯様くと委しく白状なしたるより人相書を以て忍
びく探索あれど其行衛の何分今まで知れざりしが計らず卯之吉ハ大井川の岸よて次郎吉
を見懸且ハ川越共の噂を聞彼幸藏と察せしゆ跡を付て道連となり油断を見濟し召捕んと
手段にてぞ有ける其時卯之吉ハ四人の子分と同道みし次郎吉の坐敷に到り蚊帳の釣手を切落
し上意くと四方より聲をかくれど一向に動く態さへあらざるより蚊帳をたぐれば是は如何
よ中は何時一か脱の亮身ハ空蟬の影だよ見えねば是はくと驚く捕手中にも頭の卯之吉ハ切
齒をなして口惜がり借の彼奴様子を悟り風を喰つて立去一か未だ遠くは逃去るまじ何れも東
へ下り道疾く街道を追駈よと先立行に子分の者共勝手知たる裏道傳ひ東を指て追駈ぬ爰に又
次郎吉は彼旅籠やを逃出せしが本街道を行ときは必らず追手に捕へられんと夫より道を横切
て野道畔道嫌ひなく何處を目當と定めなき身ハ浮雲の足に任せ三四里も馳たりしよ流石よ勞

れて息せのく暫らく何方でか休まんと立止りつ、四方を見よ爰は片山里の小村よや所まよ
らよ此處彼處茶屋幾軒か見ゆるにぞ次郎吉獨り打悦び豈夫爰迄追手ハ來じと暫しハ此處で一
休み仕度ものだと邊りを見れば右手の方に締りもなき物置小舎のありければ先其内へと這入
込み足を伸して横に成一が忙して走りし體の勞れハ昨夜の酒の酔が出て終に寝入一高軒夜の明
るをも知らざりしが此小舎の持主が鉞を擔て野邊へ出懸に計らずこれを目よ留めて驚き乍ら
揺り起し御前の何處の者か知らぬが斷りもなく悠々と人の物置へ寝なるといふとんだ人だと
腹立を次郎吉聞て眼を覺し面目をげに言ふやうの是ハとんだ事を爲ました鞠子宿うら出た處
何時一か道に踏違へ寝るともなしに終とろく而して爰ハ何と言ふ處と問へば彼者の次郎吉
が顔を情々見乍ら主ハ何を云つしやる鞠子宿から如何様よ道を間違よふ逆も其處へ來る事
ハ出來ハしねハ爰ハ山中といふ處でもと間違の事だから所の者の其外にハめつたよ此處と街
道へ往來としねハ筈だのに殊よ寄たら掴れたあ主が眼さしの虚勞附鹽梅狐々様よ違ひない
と云れて次郎吉したり顔態ととぼけた風をして汝ハ流石に目が高い實我ハ京都稻荷山の御使
にて江戸の王子の稻荷へ行孫太郎狐と云者なり昨日東海道を下りしハ鞠子宿よて計らずも犬
よ取巻れ餘義なく此男ハ正直者故暫く五体を借て此地へ逃來りしが最早東海道箱根手前ハ徳

々ゆゑ我が木の葉も非ず信者か奉納せし正銘の金子を出す程に此男を山駕籠に乗せて日數は少し懸つても能き程は裏道傳は箱根山を越ゆる様頼も度存する先手當金として金十兩汝に渡す間能く勤めよや首尾能く我を送らんよは汝が家内安全のや及ばず諸願満足すべいと金十兩を手渡しけるよ百姓の肝を潰し左様なら貴公様の御稻荷様の御使で御坐りますか實私しの寒村乍ら此里の村長を致しませ徳助とや者斯御手當金を下さる上の随分御送りませうが御案内か知りませんが東海道の裏道とやては大變な處にて山坂も多く御坐りますれば餘程入費も懸りますか夫さへ御承知なら御供致しますと始めに替りし挨拶に次郎吉大に悦びて徳助とやら入用の金子は何程よても所持致し居る故よ心配なく只餘りよ目た、ぬ様に正直なる者を見立て駕籠を昇者手代りとも四人を撰んで其方萬事道中の賄ひ致し日々の入費は帳面へ認める様又其方は世話人と神主と兼帯なす大役故よ毎日金二分宛を遣すべー又四人の者への金二分宛を賃錢よ與ふる間随分俱に心を用ひ人目に懸らぬ様隠密に計らふべーと尤もらしく云けるよ庄屋徳助は夫のく有難い事夫が眞實ならば道中の入費も手前が致す苦なれ共兩三年の不作打續き此村も殊の外困窮致し居ります故何も角も思ふ様よの参りませせず依て仰に隨ひます併し爰の餘りよ見苦しく候ま、先私し方迄御遷坐下さる様よと叮嚀に案内するよ次郎吉

其意に任せ庄屋が家へ連立ぬ

○次郎吉山中の里を賑はす事

並庄屋徳助演説の事

借も庄屋徳助の次郎吉を客間へ通し女房よ仔細を告て何でも不淨のあい様よ燧々で淨めるが能い而して御膳に強飯が能いけれども間に合ぬから今朝焚た麥飯よ昨日買て来た油揚げを焼て附るが能いと萬事言附て徳助の懷中に石と鎌を入置無闇に燧々と叩き散すよぞ次郎吉の見乍ら可笑しもあり又片山里よ住居して正直一圖の水納なるを不便に思ひ徳助を呼で共方の家内へ何人ほど有や又此村の家數何軒程有て人數何程位なるぞと尋るよ徳助の手をついてハイく此村の小村で御座いまして私共を入まて十一軒手前方の人數を退まて五十人程勿論一人前よ働く男女の二十四人跡の皆祖父婆々子供で御座ります私共共の婆々よ女房子供三人總領の今年十七歳で萬事私一の代りに農業を稼いで呉ます夫故私共共を入れて働く者が廿七人御座ります夫のそと孫太郎様よの御神酒を上りますか清酒の御座いませんが手造りの濁酒で宜しければ御備へ申ますと言に次郎吉其の有難へ何でも宜しい二合計り持て来て呉れ而して先刻頼んだ駕籠の用意を早くする様よと言は徳助のハイくと勝手へ行て女房の手傳を

して膳拵へも漸々と目八分よ持来り恭敬しく次郎吉が前へ出すよ其方の手酌で濁酒空腹時の無味物なく茶碗で傾け居たる折柄最前徳助が言ひ附しと見え屈竟の若者四人山駕籠を昇げ来るに跡よりハ村の者お狐様を拜まん和祖父祖母子供の手を引或は脊負又ハ抱き門前へ集るよ徳助門へ出て是々皆々騒々敷てはならぬ孫太郎様の静な事が御好故拜み度ハ私が差圖して一人づゝ拜ませてやると徳助ハ神主氣取よ次郎吉の前へ両手を付て御聞遊ばす通り村中一同貴君様を拜みに参りましたが御願ひにハ一人宛なりとも拜ませて下さりませれば斯申庄屋徳助も如何許り有難い事で御坐りますと云ふよ次郎吉も心に思ふ仔細めれば早速と承知して善哉く我適々此地へ来り其方達と結縁なすも全く稻荷山御主人の導き給ふ所あらん一人宛は面倒故一軒毎に打揃ひ来る様取計らふべし夫に付人数の多少に抱はらず一軒金一兩宛我が土産遣ハす間其方宜しく取計らへよと懐中より小判十兩取出して徳助に與へるよ扱々氣前の能き御狐様と庄屋を始め人々が信々前よ彌増て隨喜の泪芋売の萎びた親仁ハ第一番よて徳助披露しける様此者は此村よ年久々住まする一郎兵衛とや者家内の孫とも五人暮し彼の名うての達者もの今年ハ六十三あれども御覽の通り女房ハ三十六で八人目子供の手前外分も隠し負ふせぬ蝦蟇腹も早今月が産月で此處まで参るも困難の事苦しい體よしたと云ふなかなか甚

張親仁でございと開ぬ事まで喋々たてるも稻荷の罰の當らぬ爲やたらよ頭を下させて彼一兩と敷かせサア夫で宜いと立せれハ親仁は面目内証の夜なハ仕事さへ打めけられ禿た天志と諸共よ顔を赤めて送り下る第二番目よ罷り出る男を徳助打見遣是は新屋の勝右衛門とて此村での口得なれと生得の香高此上あしの變人で三度の食さハ十分よは喰ず一文銭に生爪を割さうと云やんかん者夫故人皆渾名を以て世の俚諺に客坊の柿の種といふを以て勝右衛門と呼あすやうよなりました去とも外よ悪氣はなく先々稼一方の正直者でござりますと頭と共よ上たり下たり動物にされるも狐様の御前なれば是非もあく且ハれ金も貰ひたさよ黙止て居ると徳助は次へ居直るいが栗坊主俗か出家か白髮雜りの頭を下て殊勝氣よ珠數爪繰て禮拜あすと又徳助は見て云ふ様是は此村の旦那寺妙傳寺の和尚にて名よ海珍と申者然共以前は矢張百姓天然備はる無性者で農業などは大嫌ひ其癖女と酒と博奕は米の飯より大好物有や無やの身代も僅の中よ棒よ振手ぶり編笠乞食よりせんすべもあき懶惰者誰も相人よする人なきと妙傳寺の先住が不便がられて拾ひ上げ坊主となして飯焚やら田畑の業とさせ乍ら喰して置れ玉ひーに一昨年和尚ハ九十九よて黄泉へ遷化あられし故ある甲斐もなき寺なれ共よなか其儘捨置れず餘義あく須を後任とし當時の和尚と頼め共經ハ切置一文不通ゆるは假名とハ覺束なきはんの

名許りの和尚なり然れども近頃發心して晝の田畑の事を一又夜をどよの繩をい今人並
 女房も持て三日一度の乾魚位に喰ふ様に成たれ寺の住持と又々跡を呼んとするは此方に見
 て居る次郎吉の氣の毒でもあり可笑もあり何分開て居られぬにもうく夫で澤山だ最早時刻
 も移るゆゑ聚つて來た銘々の古事來歴の廢止よして跡の一所に金子を遣れと云は徳助良まり
 て名前八丈を呼集め夫々金を渡しければ百姓共の打悦びこの能き福徳の御稻荷様迷子札より
 形さへ見た事もなき小判をの腐一文も上ぬ先から下賜る有難さ斯云ふ事の有ると云は我々
 共が身の幸ひ切ての宿の取附迄御稻荷様を見送らん皆の衆早く支度しなと悦び騒ぐ老若男女
 さて次郎吉の麥飯を否く乍ら喰ひ終りて徳助が女房を呼び當家の別段世話をし故是は内
 へ土産ぢやと金二兩を與ふるは女房の更まり婆々小供も小踊として打悦び親仁か日頃正直
 に宿りし福の神卒御立と門口へ送り出れば徳助が差圖よて持出す山駕籠に七五三廻し清ら
 かよ不淨を拂ふ先拂ひ村の子供が八九人短き竹と手よ持て下よくの制止聲次に村の若い
 者何時の間よやら認めけん正一位孫太郎稻荷大明神と紙よ書きたる旗押立次よ次郎吉が乗物
 の側を放れぬ徳助が持股立附添へ前後左右の村の男女打交りつゝ送ること實に仰くしき
 事なりける

○孫太郎稻荷利生の事

並次郎吉娘が身賣と關事

扱次郎吉の徳助が目違ひなせしを幸ひは狐付きぞと欺きて東海道の裏道を駕籠よ括て行たり
 しが彼仰くしき送の者を若や他人よ見咎められて化の皮の願はれんと一里程も行し頃徳
 助よ云ひ付て男女を一緒よ押歸し跡の徳助と百姓の駕籠昇四人の人数よて山道傳ひに日を重
 ね漸々にして箱根山の裏道を抜しかば最早街道を行とも更に氣遣ひ有まじと約束通り徳助
 に一日二分の割にて遣し駕籠を昇たる百姓に同一く一分の割にて遣し又路用とて徳助
 に預け置たる十兩の僅四兩程遣ひのみゆる六兩計りの殘金を錢に直し徳助よ渡し此内一兩
 は五人へ骨折の祝儀残り一錢の途中迄送りし村中の人数丈けへ分けて遣るやう致すべし我
 是より當所の稻荷へ用事ある事ゆゑ最早是よて別るゝあり汝等も今宵の此驛へ泊り翌日の東
 海道を急いで歸れ去らばくと夕間暮次郎吉足をあげるか否や元より身輕の早足なれば瞬く
 間よ何處へか姿の見へず成よける此有様に徳助等の借もくと感心なし只狐付とのみ思ひて
 少しも心に疑はず其夜の小田原驛よ泊り其次の日箱根を越し本街道を行し處日數僅にして山
 中の里よ歸り兼て云付られし如く六兩の錢の内一兩を五人に分け残りし錢に老若の男女は更

なす嬰兒は迄孫太郎狐の賜物なりと夫々分て與へければ皆々悦びの餘り小き祠を立て孫太郎
 稻荷大明神と崇め祭り五穀成就村内安全を祈りもに二三年の不作より引替其年より五穀能く實
 り殊に野菜物も十分の出来にて村内の者何れも家豊かよ成りかは是れ全く孫太郎狐の利益を
 らんと其後年々祭をなし其地の鎮守と信仰せしに誠心靈驗者かにて病氣其外も祈れば必ら
 ず其利益有しと彼翁の頭も信心がらとハ斯る事をや言ならんこは是後の物語りなれ共序でに
 爰も記すなり夫は扱置次郎吉は徳助等に別れ道三四町馳たりしが今ハ彼等も知るまじと只あ
 る旅籠屋よ泊り久々にて颯張と湯よ遣入獨り酒を酌乍ら最う江戸へハ廿里ばかりゆる日付に
 て行れる位併じ三年以來音信せぬ江川町の二親へ何ま野面で行れるものかどうか工風をせ
 ねばならぬと思案をさせる其折しも隣り座敷の二人連顔ハ知れぬと親仁と娘が語り出ける咄
 じ聲開氣ハないが聲高なる親仁の言葉ハ手も取る様にて是れ峯家を出る時から云ふ通り僅一
 人の手前をば買氣ハ更々ないけれど此盆前の大難滋苦しい苦面の筆段も十露盤玉ハ手ぬへが
 目當で漸々通れし盆の瀬戸深みへ陥つた博奕の埋草併し手前を品川の苦界ハ沈める土からハ
 向後心を改めて律儀者となる程は僅三年の事だから辛抱して稼で呉よと云ふ娘ハ泪聲夫ハ最
 う私しとて親の爲世間ハない事でもなければ何様辛い勤めでも辛抱して仕様けれ共阿母

さんが亡まつて未だ百日も立ない博奕に許り身を入れて家諸道具着物の更なり手當り次第に
 買拂ひ上旬の果ハ私しまでを賣ての博奕の元手とするとの餘りに強ひ其了簡夫故私しは品川
 とやらハ行の否だき云のと言へば親父の聲として馬鹿を云へ是から手前を買た金を博奕
 の元手とするのであし借た金を返すのと家業に取付く元手金にすると言のが分らぬか假令己
 の實子であくとも五年以來育てた恩ハまさか忘れて仕舞ハ一めへ今更否だと言たとて手前の
 體ハ品川の圍戸に咄しも仕て有からハ運鍾言でも贅な事夫より彌も行積りに覺悟をして寐る
 が能い草臥たせいか一盃やつたら強氣と酔が廻つて來て何だか眠氣が差し來たと言ひつゝ枕
 につつきしと見え咄し聲は打止みて跡は親父が肝の耳喧嘩しく聞えけり

○次郎吉お峰が身の上を聞事

並金を残して欠落する事

扱も次郎吉は唐紙を隔て親子が物語りを聞獨り思ふ様は扱は親仁が博奕に負け娘を品川へ賣
 といふ事だ可愛想よ何ば親の爲だとして是が病氣で困るとか年貢の金に差支へるとか餘儀な
 い譯なら仕方ないが自分の榮耀の慰み事に子を賣と言は強ひ親仁と兼より慈悲ある次郎吉
 故どうか助けて遣てハ物だと獨り心ハ黙頭つゝ翌日迄思案として見やうと麻支度なして小用

をたしは様側傳ひに用場へ這入小用をなして出合がしら隣の用場より出る女あり互ひよ手本
 鉢よて手を洗はんせしよマア御先へと辭義する折次郎吉ハ釣燈籠の火影に彼女を見るよ年
 の頃十七八の娘よて髪形の風ハ田舎育ちと見ゆれ共天然備はる美しき粧はね共色白く櫻の顔
 やせ柳の肩愛敬纏る、其目元よ潤みし泪の跡あるを次郎吉扱へと推量して若姉さん御前は私
 一が隣り座敷へ泊り合した親子連の方でないかへと尋るよ娘お峯はハイト言ひ乍ら次郎吉
 と見るよ年の廿一二位色ハ少しく淺黒けれど眼清く鼻筋通り最柔和なる男なるよぞ何となく
 恥しく外よ返事はなさね共立去もせず不居るに次郎吉ハ聲を密め私しの今度大坂から江戸
 へ歸る者だか先刻御前と親父さんが咄しを聞ともなうに唐紙一重聞さへ辛き身賣の相談餘
 處事乍ら私一人て泪を纏して居たが何程位の金子が有たら身賣をせず済事か斯一ッ宿
 屋に泊り合すも何かの縁蹟石さへ縁とり云は御前の身の上を聞た上ハ如何か相談の仕様も
 有ふと思ふが一体は前の家ハ何所だへと云に娘ハ深切ある男の詞に漸々とハハ私しの三島驛
 の者では坐りますが先刻は父さんか云た事を御聞の上ハ御承知で御坐いませうが今の男親ハ
 二度目の親父さんで私しの實親は奥左衛門と申せしが五年跡に亡なつて私が十三歳の時今の
 親父さんが近所の人の御世話よて御出せよはしたるもの、商賣の事は少しもせず只店の賣る

酒を勝手に飲み夜晝と出歩いて處々で博奕を打ばかり家でハ御母さんと私しが二人して何や
 ら斯やら其日の稼ぎ杉葉酒屋の身過世遇も暮し兼たる瘦世帯細き電の其前よ煤燵かへり御
 母さんが染々私しへの御咄しよ男が居らねハ家業が出来ぬと思ふが故よ嫁人を頼んで貰ひ
 ハ今の夫始めハ眞實よ勤ましも二三年も立が立ぬよ打て替り不行跡今の辛さを昔しに思ハ
 ハ寧ろ後家で暮したら斯云ふ難儀は爲間敷ものを殊に私しも此頃ハ次第に體も弱くなり翌日
 をも知らぬ露の命若も私しが死んだ跡て那の鬼の様な親父さんがは前を苦界に沈め様かと夫
 計りが冥途の障り何卒左様の事も有たら驛役人よ譯云て身と通れる様よせよと云れしが今
 更思ハ遺言よて其後僅病み煩ひ今年四月の月末に終に空しくなられに親父さんの私一の
 歎きの四半分思ひも寄らぬ身賣の相談欺されて來た此小田原幾許云ても親と云字よ勝れぬ此
 身知らぬ貴方に此様お恥かしい事やのも御深切の御詞よ甘へて不仕合せ何卒察して下さ
 んと娘心のせら一ぱら云も便りのなき身ゆえ跡ハ泪に袖濡すお峯が脊中を次郎吉が撫撫り是
 お峯さんとやら左様して今度御前と賣る共金ハ何程位か知て御出かと問よお峯ハハハ三年で
 廿五兩と小聞ましたと言は次郎吉思案して廿や三十の金ハ何でも宜が那親仁さんの様子でハ
 表向懸合ふたら彼是云て急にハ御前を放すさいお峯さん斯云たら否な奴と思ふか知らぬの親

父さんへの親子の縁切として私しが廿五兩置て行程よ今夜此處から私と一所に此家を逃て江戸へ行き所帯を持って睦く夫婦になる氣のあいかと云れてお峯の生娘の發と赤らむ其顔に袖を掩ふてしとすがよアイと返事の仕兼れと心の中の嬉しさの飛立許りの其風情を見て取る次郎吉憎からずお峯が手を取耳に口寄何かひそく囁やき示し後よくと別れしより直次郎吉の座敷に到り書認むる一通り

一筆ア入し私し事隣座敷に罷り在し所御娘子お峯どの儀此度江戸品川宿へ身賣の趣き承まはり素より罪なくて苦界へ沈めい儀誠又氣の毒に存せられ右身の代金廿五兩を結納として我等貰ひ受妻と致し候間右御承知下さるべし殊の外旅中取急ぎ御目に懸りやさず何もく縁と思し召御腹立無様は御頼り候以上

月 日

與左衛門殿

相宿何某

と云へる手紙よ金廿五兩を包み隣座敷のお峯を招きそんなら之を親父さんの枕元へ密と置て來な私しも支度をするからと云はれてお峯の唯々と忍び足にて出行よ此方は急ぎ身支度して金子二分を紙に包み其表書又酒肴代として我枕元へ置きたるの跡にて泊り遊なりと云れまじ

との用心なり扱次郎吉の忍び來し少女お峯が手を取て縁側傳ひに庭口の雨戸を明けて庭へ出雨戸の元の如くに閉め大磯さして行たりしが時しも七月下旬夜も丑満の物淋しく月さへ有ぬ間路をば戀と情の曲者が恐れもやらぬ忍び旅最膽太き事共なり

○次郎吉江の島へ參詣する事

並七里ヶ濱よて盗人を救ふ事

お峯の手をバ鳥が鳴く東をささて小田原を夜遊になせし次郎吉の婦女の足は搦とらじと駕籠を雇ふてお峯を乗せ己れの態と仕添ひ行いか藤澤宿より道を轉て彼江の島へと到り着き岩本院へ宿を取んと其儘急ぎ行たるよ江戸講中の大客ありとて斷られたるよ已を得ず外の旅籠屋よ宿を取り早いが徳と二分金を茶代に出せば響應も別間へ通す世辭氣轉相客なまの差向ひ離に遠慮も投出す諸腔に峯の瞻望やり無御草臥で御坐んせう些御休みあされまゝ御足を擦つて上ませうと寄添ひ來るを次郎吉の何勿體ない足あとを擦つて貰ふと罰が當るマア夫よりの茶でも飲で未だ日が在から湯よ入て汗でも流さ岩屋をバ一緒よ拜みよ行ふぢやないかと次郎吉先へ湯よ這入れ峯も代て行たるが間もなく湯より上りより二人連立岩山へ登りて御堂を伏拜み又岩穴の辨財天を拜み終つて元來たる道を行んとする折柄すれ違ふたる一人の旅人小辨

慶の單衣は道中差をぶつ込みまが昔の小笠に夕日を掩ひ豆絞りの手拭に汗を拭み行く様子
 と次郎吉一寸見るよりもどうやら知れた奴と思へば其場を早く行過てはて誰ならんと考へしが
 漸々思ひ當りし三年跡に宮驛にて出會て其後送去りし彼伊勢參の八藏故扱の今爰等を稼いで
 居るかど勘付たれど別よ心を注めずして彼旅籠屋へ立戻り上の膳部を誂らへてお峯を酌よ
 飲乍らサア御前も一ツ飲ねへ嘸勞れたらうと小盃を出せばお峯の袖を口よ當て不調法で御座
 りますから旦那の御酌ませうと銚子を持て次郎吉の不斷の兎も角今夜は別だ是は前と祝
 言の盃蓋だから少一でも祝ひよ飲で呉なくつちや己も何だか氣が濟ねへと銚子を取て半分許
 り繼ばれみねの嬉しさうよぶるく者で口へ當ぐつと飲み干し次郎吉へ酬て溜息する状を見
 て次郎吉の打笑ひ何だい此様に味へものを藥か何かを飲様よお前も餘程野暮ぢやアねへり夫
 へさうと今時分親仁さんの猿眼で多分江戸だと勘付てあの藤澤か戸塚邊りを虚勞く探して
 居るかも知れねへ夫ゆへ己が道を替へ此江の島へ來ののだといへばれみねいおもき口よて否々
 彼親父さんいあか〜ひどい方ですから尋ね立など致しますまい只でも逃たら兎も角も廿五
 兩と言大金を旦那か下さつて見れば品川とやらへ行より御金に徳の行事もある何で跡を追ま
 す物か彼處から歸つたよ違ひありませんが彼又た金を博奕よ取れ跡の振方を何致しますか

僅の内といひ乍ら親父さんといた事もある程心配で御座り升と鬼の様な籠父を案じ
 るおみねが志ざし次郎吉の感心して御前へ餘つ程能い心懸氣立と顔の可愛らしい私か迷い
 込だのもまんざら無理で無らふとおみねが手を取り引寄る折しも下女が御銚子と明る候よ
 仰天し次郎吉飛除き此方を見て姉さん跡の飯に仕様と酒も程能く夕飯もはや終りたる頃おひ
 に下女か伸たる夜の物一ツ布團よ並べたる二ツ枕と蚊帳の中二人が爰よ初契り何なる夢をや
 結ぶらん斯て其次の朝次郎吉の早立を好む故外の旅人より早く朝の支度を調てれみねよ鐵
 倉を見物させんと江の島と立出七里ヶ濱へ差懸るよ浦の童が錢乞ふて浪間を潜る兎とや見渡
 す海は青々と空か水かと思分たぬ云はん方なき景色に二人の其處邊迂濶くと微吹風よ送ら
 れて鎌倉近く來る時後より砂煙りを蹴立六七人聲々に泥棒くと罵りて追來る者有る脛に疵
 持次郎吉が仰天して胸よ釘我身の錆よ若もやと振向き見るに八九間彼方にて今捕へられし一
 人の旅人土地乃漁師よや六七人何れも揮一ツの眞裸手取足取散々に打叩き此奴懲しめの爲に
 水を喰はせ遣んと長き荒繩に體を縛め今海へ打込汝水を呑せんと情用捨めめらくれ男が宙よ
 釣して行んとするよ彼旅人の頻りに泣聲して赦し玉へくと打託るよ次郎吉見兼て彼漁師共
 を宥め何様の子細か知らね共此人の悪いと見へて涙を流して誤つて居るから最う勘辨して遣

て下さらぬか私しも辨天様へ参詣に行つた歸り道見ても居られぬ此場の様子と宥むるよ漁師の中も年重なるが御前さん聞て下され此泥棒が今朝早く私しが留守へ付込で仲間へ分る者の代を十貫許り盗んで逃る出合頭出くはしたる我々が折能く錢を取返したるが海人が汝汲辛ま錢を盗んだ憎さよ此始末と語るに次郎吉夫のママとんだ奴併し私しも今云通り辨天様へ参詣よ今來た事故どうか放生會同様に助けて遣り度思ふが私しが一盃買ふ程よ勘辨して遣て下さいと懐中より一兩取出し年重の漁師に與へるよ何れも目と目と見合せ俄に替る追従笑ひ旦那是てハ誠は御氣の毒様此様よ頂いてハ濟ませんと差戻すを次郎吉のママ少ないが取て置て御吳なさい何か此男を私しへと云ば皆々彼旅人が繩を解亂れし髪杯繕ひ遣りコレ手前の仕合者此旦那御口を聞て下さるから此儘勘辨して遣るぞ手前の爲よハ此旦那の命の親能く御禮を申が能と云ふが皆々も次郎吉に禮を云て答舎とさして立歸りぬ

○次郎吉恨みと忘れ恵みを施す事

並悪者素性を語る事

扱も今漁師等も打叩れし盗人の次郎吉を伏拜と大地へ頭を付て何方の御方が存じませんか既よ命を捕る、處御救ひ下され有難く御禮のナ上様も御坐りませんと只管悦び禮を云と次郎吉

ハ嘲笑ひ汝は今日始めてよても有まじ毎もくけちな野郎だと云に彼男顔をあげ次郎吉を能く見ても思ひ出さぬ其様子よ次郎吉ハ手前ハ己を見忘れたか三年前宮の驛で僅の端た金を攫つて逃た伊勢参り其時名乗た八藏だらう昨日岩屋の上り口すれ違ふた手前の顔一目見て知る晝蔭生た肴の有餘る此江の島へお餘りでも攫ひに來たかと思ふて居たよ今又手前の身の難儀見てハ捨ても行れぬもへ口出し仕たも他生の縁最早けちお盗みを止よして眞人間の家業をしろと懐中より金子十五兩取出し少ないが是を元手に取付て身を粉よ稼いだら喰ねへ事も有めへから心を改め辛抱しろと金と與へて行んとする次郎吉ハ袂をば八藏と捕へ旦那暫らくは待下さいまゝいつぞや宮の旅籠屋では前様の金を盗んだ私しと憎ひ奴とも腹立あく今の難儀を御救ひ下さるのみあらず又も元手よするが能と此十五兩を下さるとハ親も及ばぬ其御情三十餘年の誤まりを今更知りハ此身の罪私しとても素よりの護魔の灰に非ず色と欲とに親を捨て古郷を離れし旅鳥二十歳の時から江戸に破落戸悪い事よハ終馴安くいつか覺えし巾着切り夫がううじて街道の護魔の灰との成ましたが元私しは京都の邊り十生目村と申片在所の名主役三太郎の一子三吉とヤセ一者今でハ親もどうありハ歸りそびれハ不孝の私し是からハ貴方の御意見よ隨がハ古郷へ歸り人を頼んで親への詫事向後心を入替へて百姓業を致し

まず夫よ付ても大恩請し御前様の切てハ御名を知らせて下さいますし悪い心の出ぬ為毎日唱へて居りますと流石無頼の悪者も誠の情に立歸る眞實面に現ハれ一伊勢參りの八藏が我身の素性を打明すを聞て驚く次郎吉が此六月の下旬淀辰等と俱に圓覺寺へ押入り一時僅一夜の宿借一三太郎後家の一子三吉と云しは此八藏にてあり一とは是も不思議の因縁と思へば次郎吉猶更老母が頼みも甲斐ありと心よ思ひて三吉も御前さう本心よ立歸れば私も何程嬉といか知らねへ御前に少し咄しもあるが爰は往來最う八九町行は鎌倉の入口彼朝比奈の切通一名物の力餅でも奢るから一處に來ねへと先立行よ三吉は只ハイ〜と言つ、俱に随ひ行ぬ

○三吉非を悔て古郷へ歸る事

并次郎吉品川へ泊る事

扱も次郎吉は三吉を同道して彼朝比奈の切通をなる或る茶店へ入て奥の小坐敷を借り茶杯飲乍ら三吉よ向ひ縁と言ものは不思議なもの私が此六月の末頃に大坂連中と京都へ行き名高い十生目村の圓覺寺へ遊山がてら見物に行しが日の暮て御前の御袋の家へ一夜厄介み成て連の者が様子を聞ハ一部始終の身の上咄し聞た時ハ實に可愛想で何か三吉とやらを尋出し一日も早く逢せて遣り度と思つた念の届きしか今日の難儀を救ひ思はず聞た身の素性過去し事ハ仕

方がねへから今より直に道を急ぎ早く御袋よ逢て安心させて遣るが能いと云つ、又もや十兩取出し是ハ御前に遣るのでない御袋にいづぞや世話に成し禮を言て手渡して呉な併し親子の中故御袋から借るとも貰ふ共して夫を元手よ百姓なり商人なりして堅氣に成り親を大事よするが能いと金子を渡しけるよ三吉ハ有難涙よ咽び何と御禮を申て宜しいやら重ね〜の御厚恩死んでも忘れハ致しません就てハ貴方様の御詞よ随ひ是より直よ御別れ申夜を日よ繼で古郷へ歸り御袋よ託を致しますから先程も申た通り貴君の御住所御名前を御知らせなされて下されと云よ次郎吉ハ何も名を云よハ及ばぬが私ハ次郎吉と云者生れハ神田江川町子細有て三年以前大坂の親類を便りて行きしよ間が能く商法で金儲けをし古郷の空の懐數久し振での江戸への歸り併し御前よ意見ハ云もの、己も矢張親不孝御前と天秤よ懸たら五分と五分一寸先の知らぬ世の中縁が有たら又逢ひませう随分體を大切に是から健康よ暮しませへと茶代を出して其所へ置きサア御前も急ぎの旅故一刻も早く出立とするが能とねを誘ひ三人連立川口迄俱よ出で袖を分つよ三吉ハ次郎吉を伏し拜み〜見返し乍ら足を早めて終よ其まゝ立去りぬ斯て次郎吉ハ勝手知りたる鎌倉の第一番は鶴ヶ岡二とハ下らぬ建長寺長谷の觀音大佛殿裏と忘る、星の井戸其外名所舊跡と荒方おみねよ見物させ其日は早く雪の下宿

とり翌日の江戸へ行んと思へ古郷へ飾る錦ならねど或る古着屋よて未だ巳の時許りなる薩摩
 上布の當世好み口れも求めあまねも夫々揃て宿の女房よ髪を直して貰ひ錢よ糸目の内
 証の夜の稼の盗人といふみねの未だ白浪の其行末の兎も角も今の榮耀に暮さるゝ身の景況よ
 悦ぶと此方の相手に酒酌替し盧生が夢の樂しみも碎く枕よ告渡る早曉天の鶴の聲増放れて鳴
 鳥可愛く聞さへも口の憎さと次郎吉がねみねと呼び醒し朝の支度を調て駕籠を二挺懸
 其日の通一駕籠にて品川迄来りしが次郎吉の思ふ様三年以來音信せぬ實家へ打つけよ行れも
 せず誰を頼て託事として貰ふ迄假よ世帯を持ちみねを其所へ當分住はせ置んと思案を極め
 夫よしても家を借んよは店受がなく無闇に家主が貸まじどうか爰等で店受を拵らへ度もの
 だと工夫をなし品川の宿中で駕籠を歸し態とけちな旅籠屋を見立て這入れバ宿屋の女が是の
 御早ひ御着サアく此方へと奥座敷へ通に次郎吉はあみねに向ひ御前を賣と云た品川は爰た
 ぜ此宿ハ江戸の出口の四宿でハ一番能い所で女郎も吉原よ負ぬ處よさうして此様なけちな宿
 店ハねへと小聲て云折柄下婢が茶を持来るよ次郎吉ハ一分包んで茶代よ遣り酒肴を誂へるに
 入代つて茶代の禮に來る此家の女房年の頃ハ五十許りの太つちやう欲張婆よといふ事ハ離人
 の目にも誤りある一据らぬ先から追従笑ひ是ハく御速ふ御着様只今ハ又多分の御茶代を頂き

まして有難ふ存じます貴所方ハ江の島鎌倉へでも觀物のほ歸りで御座いますか御若い同士の
 御二個連嚙御樂しみて御坐いませう江の島も當年ハ大分參詣が廻りますくら賑やうで御坐り
 ませう夫に就ても御内室さんは能い御器量で旦那様とは能い御釣合ナニ御湯が出来たか左様
 なら旦那様御風呂が宜しいと申ますどうぞ御這入遊ばます様コレきよや御浴衣の奇麗なも
 のぞ二枚持て來さうして御二個様のお背中を御流し申なサア這方へと案内ナニ浴室をさ
 て出行ぬ

○次郎吉旅屋の女房と頼む事

並お峯が父有家と尋來る事

扱も次郎吉ハ湯より上りて毎の如く酒酌交ハ心の目論見下女よ吩咐此家の女房を其席へ招き
 おかみさんとした事を頼みますが實は私ハ江戸江川町の者ですが商賣用に大坂へ行き問が
 能くて金儲けハしました道中で此女と深くなり連て來たものゝまさか親の處へ自慢らし
 く連て行く譯も適ささうして友達の家を頼むも面倒ゆゑ寧ろ懇隔れた此近所へ一寸た小
 體な家を借て當分圍つて置たいと思ふが夫よ就ても店請がなければ困るが無理にとハ言ませ
 んが成べくハ這家で店請に成て下さらぬが夫も長い事でない二月か三月の間其中ハ表向

に然るべき人と頼んで内へ入る積りだが何と御禮の仕ますが其店請とて下さらぬかと言
よ素より欲の皮厚き女房ゆゑ齒を剝出して笑ひながら夫の何奇御安い事貴君の様も御方の御
世話ならどんななよも致しませう幸ひ高輪の中程に此間迄住て居りました富本の御師匠さんが
今度能い旦那が出来て江戸へ引越ましたが平家ですとあれ瓦家根中よりも克く庭も廣いとの
事夫に造作の勿論疊建具勝手道具も残らず就てサア御出ささいと言許りの住居ださうですか
三十両なら譲るとの事直這先に居る谷八と言圓戸が世話を頼まれたと云て丁度今朝参りまし
たが御覽なすつて御氣に入ら其谷八さんへ御相談なされの直出来ますし又受人の所の私
し方で此度致しませうと後先看ずの安受合欲よ目のあき盲目蛇に恐れぬ女房が詞に次郎吉の
打悦び夫の誠よ丁度好い今まで人の住た家別に視るよも及ぬ故とうか私しを御前の懇意の
者だと谷さんとやらへ咄しとして何卒取極て貰ひたいものと金を一兩紙に包み是の御前よ受
人の判錢又引移つた上の新宅開きの間似ごとよ借家ながらも祈ひ酒御禮の別よ致しませすと包
みし金子を與へるよ女房の打悦び善の急げと言ひますから外へ口の悪らぬ様谷八様へ言ひ込
んで萬事手都合の好い様よして置ませうから御二人さんで御緩りと御酒を飲つて御休みなさ
いと禮さへそとく立出るも判錢の一兩を書餅よせじとの欲心なり次郎吉の先一ト安心と其

夜は打臥翌日の宿の女房の挨拶を待より外も用はないと常引替へ朝寐したるがやうく起
て顔を洗ひ朝酒の腹直しも質よは置ぬ女房も峰よ酌をさせつ飲折しも此家の女房の彼圓戸の
谷八を誘ひ来て次郎吉よ引合せるよお峰は彼谷八を見るよりもオヤ御前様はと言に此方の谷
八もヲヤ御前の三島のお峰さん不思議の處でと言ひ乍ら次郎吉が顔を上げく詠むるよ次郎
吉の扱ひ彼與左衛門がお峰を賣渡す圓戸と言は此谷八成しか何にもせよ廿五兩の身の代金は
親仁へ残して来た事故只口入の世話賃を彼よ遣たら仔細は有じと若谷八さんとやら此娘の三
島の與左衛門殿から私かもらつて来ましたか今お峰と御前の様子此度親仁が是を賣と言咄し
が有たが若やお前が口入をいたので此娘を知て御出のか併し左様言譯で親仁の方からお前よ
れ禮をしさい事なら私が夫丈けの禮は仕ませう夫とも只知て御出のかと先を潜りて尋るに谷
八は質よ貴方が仰の通り此子の親仁様元江戸の者で私も懇意の中でしたが夫からどう言
縁か三島へ行てお峰さんの家へ入夫と成たとの事今度女房の長い煩らひて大さよ身代も不手
廻りよした故よ相談の上で娘を沽てどうか都合を仕様と思ふが世話をし呉ねへかと先月未
戸塚迄用が有て来たから御前の處へ態々頼みよ来たといひなされる故其處か商賣の事故或る宿
場の旦那よ咄した處その旦那が幸ひ箱根へ湯治よ行くら一所よ行て見様と仰しやる故私しも

御供をして此娘の家へ行き此子の親父様と相談調ひ年一杯百兩と取極私しは江戸よ用が有から湯治場で旦那別れ江戸へ歸つて來ましたがマア能く那の親父様か御前様の女房よれみね様を呉ました併し此子が賣買よなつた時の親仁様とも懇意故五分の禮金百兩で五兩貫ふ約束の仕まいたが未だ金の貫ひませんと語る折柄隔ての障子を足で明け勾引の大盗人斯見付た上の身動きもさせぬと其處へ居直り大安坐片髪禿一疵跡の一癖有べき面魂是ハ誰ぞお峰か親の與左衛門にてありなり

○おみね父を諫る事

並與左衛門後悔の事

再説次郎吉は計らずもお峰か父の與左衛門が此座敷へ來りいぞ折惡いぞと思ひけん差俯きて顔を擧ぬにお峰の氣の毒さも遠方なく親父の傍へ寄添て若御親父様此旦那が相談もせずよ私しを連出たのハ悪いけれど三年の身の代金廿五兩と言ふ金へ手紙を付て置て來れハ何も勾引盗人といふ譯はなし言は御前が子とした私しを救つて下さつた御恩のある旦那様御禮を云ふとも悪口をつく所謂ハないと云せも果す與左衛門のお峰を突除け騒ましい淫亂女手前ハ恩が有るか情が有らぬハが此親父よは盗人野郎手前よ三年の勤で二十五兩と云たのは實

ハ嘘の皮財布金の二十や三十で今十七の花盛り何で手前を手放す物か年一ばい百兩と爰に居る谷八さんと相談調ひ欺して手前を連出したがまさかと思ふた油斷大敵一盃機嫌で寐た隙をどう乳繰合たかアノ野郎と親の寐息を考へて忍び出まも白川夜船覺て悔しき彼宿を尻ハ帆懸て尋ねに出ーが何でも江戸と推量去て道々聞々様子を問へば馬士雲助ハ口裏も必定り夫と心も勇み昨日谷八様の所へ着き是から江戸中を毎日忍んで尋ね様と思つて居たを昨夜の事爰の御内室様が來なすつて味ひ咄しの相談を餘所事とのみ思つて居たが心當りの二人連大坂よりの戻り道江の島かけて鎌倉へ廻つて來た通し駕籠錢切の能い若夫婦と聞た故若も手前てハ有まいかと谷八様と一所に來て破れ小口の障子越一覗ひて見れハ案のじやう手前が居たから安心したか安心ならぬハ此野郎僅廿五兩の端金置て行たを能い氣になり亭主氣取も鐵面皮いアノ廿五兩ハ昨夜で三夜抱寝をさせた揚代金安いのだか負て遣ふ倘谷八さん斯言譯ですら何分此間の親方へ何卒れみねを頼ひ申ますサアあま此所よハ用はねハ己と一所に來やアがれと手を取て引立るに娘ハ身も世もあらハこそ泣聲立て親仁さん夫は前餘りではないかへ少しハ浮世の義理人情を思ふたら其様非道ハ云れないものをなんぼ私ハが親子の縁を結ハばとて其事許りハ前前の言ふよりハ成ませんとかよわき娘の一命懸命坐敷の柱よ緊擲着身

動きせじと居ずくまるを與左衛門の大に怒り此あま其了簡あらば斯くてもと拳を堅め打んとするも谷八と此家の女房の惚て、左右の手に絶り是ハマア短氣の事どうか咄一の仕様も有ふよマアくく止むるを聞ぬ親仁は打捨て置いて呉んねへ癖に成からど互ひよ三人争ふ折柄始終無言で差俯き居し次郎吉は膝を立直し是虎公金が欲くば呉て遣るゝら殺風景を立廻りを止にして酒でも一盃飲が能いと云れて親父ハ不思議顔己が名を知て居る御前ハと次郎吉が貌をしげくと打詠め仰天しておみねを打捨兄きでたか是ハくく始めの勢ひ何所へやら青菜ハ鹽の悄々とうづくまりたる有様よれみねハ元より谷八もあつけに取れし其中に宿の女房ハ勿と一息心の中の安心ハ既での事に判錢の彼一両を返す事かと大きに心配して居たよ此様子では大丈夫と胸算用の合たを悦び猶も様子を伺ひ居る人の心の種々なる中よも與左衛門は叮嚀よ手を付て兄貴が手前も面目ない今日の仕義早く知らせて下さつたら此様強い事ハしまいもの何卒今の不調法の勸辨して下さいまじと疊へ頭を摺付て恐れ入たる其風情よ次郎吉は打笑ひ御互よ知す知れず不思議の縁御前も達者で結構だの様子ハおみねから聞たが何も定まる因縁づくおみねが今度の身の代金ハ廿五兩と聞た故夫丈け置て来たけれ共百兩といふ相談なら跡金は己が遣る程におみねと親子の縁を切て己が女房にさして呉んねへと腹中へ手を入

るを與左衛門は惚て、押し止め御前様から金もらへる者か併し私しも那の二十五兩の中少は手と付ました殊よ爰よ居る谷八さんへも少しは禮もいなければ濟ぬ故どうか那の廿五兩は御世話よ成た虎松爺々と思すに三島宿のおみねが親仁見す知らずの與左衛門と云ものハ親子の縁切に遣たと思つて下さいまし私しの体も御存じの身の上最う御暇を致しますと懐中より金子五兩取出し谷八さんは約束の禮金請取て下せへ夫に付て御前様よ御頼みといふは此後私しに成代り此旦那の身の御世話且はおみねが不調法でも有た時ハ小言を言て旦那へ御詫をして下せへと鬼の様ある與左衛門も思義の綱よは悪念を我と我手よ取控さしほれ返りて居たりける

○次郎吉高輪へ所帯を持事
並父母の退轉を聞事

おみねが親の與左衛門は元來聞えし悪者なるよ何逆次郎吉なりと知り俄かよ斯せしものぞと言よ彼の元下谷生れの博奕打にて膨臭れの虎松といふ無頼者なりしが一年騙り押借等の悪事よ依て八丈島へ三年の流刑となり彼地よ憂年月を送りしに幸ひ命恙なく放免の時を得て江戸へ立歸りしが其後の猶々恣まの行ひをなして居しが強情我慢の者も病ひにハ勝れぬ習ひ

不計風邪の心地を明せしが終り大病となり重き枕より打臥たり元より獨り者なれば他に世話する者もあく殊よ他の博奕仲間の者にて付合悪く手前勝手虎松故誰一人見舞者もなく殆ど困窮極り一が聞傳へたる次郎吉が不便と思ひ早速山伏町の裏住居を尋ね金子と與へ長家の者へも金子と與へ虎松の看病を頼み折々見舞て深切に世話をしけるに虎松ハ夫が爲病氣全快に趣きしかば流石此悪者も其思ふ感じ何か事ある時ハ其恩義を報ぜんと思ひ居し酒狂此上仲間此者と口論して相手は疵を負せ一答に依て又もや半舎仰付られ終に江戶構ひ乃所置となり僅此知音を便りて三島宿に至りしに或人此世話よておみねが家へ入夫となり杉葉酒屋の名前を繼ぎ與左衛門とは呼しなり夫ハ捌置き次郎吉ハ虎松の昔しの恩義ハ打解し心を感じ宿の女房よ言付て酒肴を澤山出させ谷八虎松ハ馳走をなし暫し酒宴よ及びしが其日も晝過と成し故虎松ハ次郎吉よ暇を告げ三島へ歸らんと言に次郎吉ハ餞別として十兩を與へけるに虎松始めは辭退しけるが再三の進めよ黙止難く請納め厚く禮を述べ暇を告て出立おしぬ斯て酒宴も終り谷八が案内よ随ひ次郎吉ハおみねを連れて彼高輪の借家へ至るよ思ひの外座敷も奇麗よて家の様子も氣よ入しかば早速谷八が手傳ひにて家の掃除杯して夕方家移の酒宴をよ一万事谷八が世話を悦びて金五兩を禮として遣はしけるが谷八も過分の禮よ悦び勇みて立歸りぬ跡ハ

二人が差向ひ旅寢よ非ぬ我家と思へは心も落付て次郎吉は酒酌乍らおみねに向ひ縁と云ものは不思議な物で御前が親の與左衛門と己が知て居る者とは今迄知らなかつたらう併し今の様子を見たのでお前も大略氣が付たらうが私しが大坂へ仕入よ行たと言て商人の様を言しは偽りにて御前の親仁と同じ博奕打鼠小僧と仇名のある者さう聞たらお前も愛想が盡やうねと言へばおみねハ側へ寄添ひ何の愛想が盡る處で有ませう貴方の爲よ助けられた私しが身の上此上迎も御見捨なく可愛がつて下さいと膝へ凭て差俯く其可愛さよ次郎吉がお前ハ左様言心なら私しも安心したと言もの翌日ハ早く誰ぞに頼み親仁の處へ詫事も三年以來の不沙汰の不始末直に埒は明め何が何しろ出懸る積り最う能い加減酒も切上げ飯でも食て寝ると仕様先刻谷八様が何から何迄世話よして置て呉たから新世帯の様ぢやねへお前も一處には膳をやんねへと中睦じき取膳も又珍らしく漸々よ仕舞て取片付二人して釣蚊帳も結ぶ間短く其夜も明けて次郎吉ハ朝の支度をなしおみねに留守とさせ心當りは辨慶橋に春米屋をする森田屋市五郎と言ハ親吉兵衛の懇意の者故夫を頼んで詫事せんと其夜よ到りて市五郎よ對面おし久々大坂に有し事共を語り何卒親吉兵衛へ家出せし詫事を頼み度と云よ市五郎ハ打驚きそんあら未だ御前は家の様子を知らぬのか御前ハ三年跡よ家を出て行衛知れずよなられた故兩親の歎

きの何程か夜は目も寝ず心に心配して居ますつたが其翌年博奕が大そう嚴重く吉兵衛様も少し
餘炎にさめる中田舎へ身を隠すとして身代を仕舞夫婦連で遊られしが其後の風化便りもなしと
語るよ次郎吉打驚き忙然として居たりけり

鼠小僧實記中卷畢

鼠小僧實記下卷

○次郎吉途中大雪に逢事

並蝦賣菊松を憐む事

父母在せば遠く遊ばず遊ぶ事必らず方ありと古き教への有といへその白浪の次郎吉が縁り
の林に世を渡る盗みと業と仕乍らも流石恩義の忘れずして父母の行術の知れぬと聞氣の張弓
も打折て矢の根も抜し心地しつ致へて呉し市五郎に暇を告てそこくと辨慶橋を跡よなし高
輪へとハ歸りしが鬱々として樂しからねば是よりおみねを引連れて江戸の名所を見物させ己れ
も心を慰め居しが以前の朋友又ハ吉兵衛が子分杯に所々よて出逢様子を聞に此頃ハ少々宛博
奕も出来るよ云ふ事故素より好む手慰み己れが爲よハ表家業其所の賭場から彼所の内會大名
部屋の居續けよ遊び暮して日を送りしに其年も暮果て新玉の春となり今日ハ正月の初卯なれ
ば龜井戸へ參詣せんとおみねに仕度を促がせは雪催不しよや持病の癩の起りよもる留守をす
るとの事なるよぞ次郎吉は去ば一人で出懸んと龜井戸へ參詣なし歸り道よ或る鱧屋へ這入寒
さを凌ぐ熱焔に腹を拵へおみねハ土産の皮包み手よ提乍ら踰限と酒の機嫌よ道傍とらず加之
あらす春とは言と未だ日も短く且蒲燒屋で間取りもるよや永代橋近く來りしに火燈し頃とせ

殊に昨夜よりの冷たき風と諸俱に降出す雪は宛然と綿をさらりて投るが如く駕籠屋のもら
 へ乗て行んと町家の軒下と歩行つゝ尋ねるよ生憎なる業とする家もなく漸々永代橋まで来り
 しかど雪は次第に降積りて今は日和下駄では歩行かぬるに詮方なくも橋詰の出茶屋が仕舞し
 被賣張暫しとやみと待んとて其所へ這入て辻駕籠杯通らば乗行んと妻を誂め居たれども日は
 暮果て往來のなく犬の子さへも通らぬ折よ永代橋を渡り来るハ十二三歳位の子供よして小
 き盤盃と天秤棒にて昇ぎながら覗々と呼ぶ聲も寒さよめけて震つゝ雪踏分て来るよど次郎
 吉の嘆息なし雪の日や彼も人の子樽拾ひと酒屋の御用を憐れし秀逸も今ハ思はれて那の小
 僧も並々の子であるならハ此雪よは火焼へでも這入て寝て居る刻限あるに此永代と枯聲に覗
 々と賣歩行ハ其口癖か知らねども何一親の能々貧乏人と思れる實よ不便な者も澤山ある
 浮世じやと情心の次郎吉が思ふ折しも今我居る被賣の前を通るより其覗賣の姿と見るよ淺黄
 木綿の筒袖に草鞋も履ぬ形勢を見るに忍びず次郎吉が小僧よくと呼止れハ覗賣は振返り雪
 明りに透し見て伯父さん何だへと立戻る貌と一げく眺むるよ丸顔よして色白く最可愛らし
 き面よしもある次郎吉不便の彌増て御前今此橋中を覗々と呼で居たが不斷馴て居る口癖か又ハ
 残りでもあるのかと問ふ此方ハ打萎れ伯父様聞て呉んねへ今日の四盤盃早いで出たのに朝か

ら懸て今迄漸々三盃の賣て来たが未だ一盤盃ハ手が付ねへのよ夫だから終々人の居ぬも知
 らず呼で来たのよ御前安く負るから買て呉ねへか是を今日賣絲へと翌日の阿母よ藥を買て遣
 る事が出来ねへから後生だと思つて助けて呉ねへと詞の賤しき土地乍らも愛想のなきが猶可
 愛くさうの残りハ幾許でも己が買て遣ふが此大雪に終雨具を持って来なかつた也え辻駕籠でも
 通るかど此被賣張よ先刻から見張て居れども生憎駕籠屋も来ず困つて居る處だか御前番立で
 も能から一本買て来て呉ねへか澤山と使ひ賃を遣るからといふよ覗賣ハ伯父さん直に此佐賀
 町よ傘屋があるから己が買て来て遣らう錢を出しねへと盤盃を被賣の中へ昇ぎ込むに次郎吉
 ハ打悦び金子を一分取出しうんなら御苦勞だか頼むよと渡せば金を受取て伯父様買て来るか
 ら此盤盃よ氣を付て番をして呉ねへと雪を蹴立て走り行くよほんに可愛らしい小僧だと暫し
 歸りを待折から彼覗賣ハ買て来たりし番傘を片手に持五十ばかりの老人が杖を力よ辿り来る
 よ破れ傘をさし懸て勞はりつゝ漸々爰へ来り伯父様嘸待遠だつたらう今道で親父さんが己を
 迎ひに来て呉たゆゑ手問がとれたのよサア是ハ釣だよと錢と傘を差出だすよ次郎吉ハ請取て
 彼覗賣の親仁に向ひ御前様の此子の親仁様ですか私しハ今日龜井戸へ参詣に行た歸り道よ降
 出され詮方なきの被賣張辻駕籠を待折しも御前の長子が通り懸りゆゑとんだ用を頼みま

た聞ば此子の母さんが長々の病氣との事夫には前を見る處が大分五体も悪い様子さぞマア御難遊であんまりさるだらうと言ひ乍ら腹掛の隠しへ手を入れ底をえたいて八九兩の金を紙へ捨り是親仁さんは此子の親代と今の使ひ賃最う少し遣ていが信心参りの戻り道生憎持合せが少あいが何れ御前の家を尋ねて行が何所に住居して居なさると聞よ親仁はハイ私しの直よ蛤町の裏家住居家主甚兵衛が店を借て居ります花澤七兵衛と申者悴り貴方に對し何か御無理の押賣を致せしに御腹立もなく斯様は澤山御鳥目を頂きましては濟ませんが折角の思し召此下され物の頂きますがお入れ物もあいは様子この親の何して御持あさりませと律義一圓の七兵衛が金との知らねと多分の錢と心構へく我子にも禮を述さするに次郎吉の空打詠め身支度して親仁様私も此大雪に親を持ても行れぬから夫の御前よ預て置ふ翌日賣せらうつてもよい随分體を厭なせへ又此子にも緇絆や股引位に買て遣ねへと此寒よもし煩らひでもすると仕方がねへからと言つ、着物の裾を尻がらげ日和下駄を其處に脱捨て親仁さん失禮だか此下駄も昨日買た計りだか御前履なら履て呉な又此皮包の内へ持て行うと思つたが邪魔だから喰て呉なせへと傘をさし能く降雪だなど永代橋を雪路分て渡り行ぬ

○花澤七兵衛困難を助る事

井鼠小僧遊町よて夜盗の事

扱次郎吉に恵みを受し花澤七兵衛と云者の元九州の何某侯の家士なりしが生得律義正直にて人々媚諂ふを嫌ふより彼水淨ければ魚住すとやらよて重役の憎しみを受聊かの事を越度として惡様に上へ讒言なせいかは是非の詮議も及ばずして七兵衛は無實の罪よて長の御殿となりたり依て僅の知己を頼んで江戸へ來りしが外に世渡る術もなく己れの提灯の下地杯拵へ妻のあろくの人仕事などして親子四人細くも煙を立て暮せしが五年以前より七兵衛の大病を煩らひ只でさへ暮されぬ瘦世帯され僅の衣類調度さへ賣代あして今ハ藥を買ふ錢もなく世の諺の如く子を捨る藪へあれども身を捨る藪へなると姉妹のお雪といへるの容貌といひ心だてさへ艶しき者なるが父の大病と貧苦を打嘆さ十六歳の蕾の花我から手折て親の爲身を浮川竹へ沈めんよハ父が病の藥の代且ハ家の貧苦を救はんと勤め奉公を父母に乞しに物堅き七兵衛夫婦も然業させんは心に染ねども外ハ手段もあらざるも其道の人を頼み吉原江戸町二丁目松葉屋方へ金八十兩よて娘お雪を賣り其金子にて七兵衛が藥ハ更なり古き借財杯を返し日々必用の品などを買調へ殊よハ身の代金八十兩とハ云もの、彼是禮さどよ引よえ手元へ残りハ六十兩程の金子あれば七兵衛が其翌年病氣の全快せし頃ハやうく十四五兩ばかり殘

つてありしぐらゐあるよ如何なる崇りよや去年の秋七月頃よりまたく妻のおろくが大病よ
 打臥七兵衛も煩らひ後ゆゑ以前の如く體も健かならぬよおろくが大病娘を賣し殘金も今遣
 ひ捨お雪が弟菊松の今年十三のかよわき腕よ日々蝸を賣歩行一が親子三人か生活すほどの設
 けもあく殊よ母の大病よ貧苦の以前よ増のみゆる詮方つきて七兵衛が松葉屋の娘雪今の松山
 とて並びあき全盛の女郎となつて居るゆるに杖に携りて心あらずも無心よ行に素より孝心厚
 きお雪なれば工面をして金子は送りしが身まよならぬ勤めの身殊に親方の手前册輩への
 外聞着類や髪飾りまで質入れ杯して金の才覚なす様子を聞する七兵衛が假令子とは言へ
 淨川竹の勤めをさする其上よ又もや金の無心をして苦勞をかける人人間の行ひに非ず此よ
 飢死するとも此後のお雪よ苦勞の懸まじと兩三度行し後ハ吉原へも行ざるゆる此頃ハ貧苦
 云ん方なく折柄はからず菊松が次郎吉より貰ひし金は錢と思へど心痛しく親に連立彼鯉の皮
 包日和下駄さへ押頂き我家へ歸り貰ひ紙包を開き見るよ錢にあらで二分一分二朱など取
 交九兩足すの金子ゆる親子三人顔見合せ夢かとはかり打驚きしが何處の人だか名さへも聞ず
 彼時斯る金を貰ひしと知るあらば又詮術も有べきに殘念なりと七兵衛菊松彼方へ向て伏拜み
 おろくよ云々と宵の咄と聞するよ憂にいらぬ袖の雨煙し涙よくれたりける夫ハ扱置き次

郎吉は去年戻りてより貯への金子の少あからねば只酒食遊びに遣ひ暮せしが座して喰へば山
 も空し況て慈善を旨として貧しき者への夫々よ身分に應じ五兩三兩と恵み與ふるゆる最早貯
 へも盡しかばいざや本職に懸らんと時一も彌生の月始め麹町三丁目と忍び歩行して其夜も子
 の刻頃土藏造りの立派の店構ひ今日店開きと見え積物の明樽杯山の如く門よ積重ね何分にも
 富有の酒店と見ゆるよぞ一稼ぎして吳んと積物の明樽を足代として忽ち大家根より中庭へ忍
 び下り様子を見るに漸々店開きの祝儀よ酒宴の濟し跡と見え酒肴の器など臺處の片隅に積重
 ね飯焚男は其側らよ打臥居れり次郎吉は奥の間へ忍び行金銀等の引出とぬき口分したる金包
 を一個よ纏め敷は算ねど小百兩懷中なして跡白浪と立去ぬ

○次郎吉酒店の難澁を聞事

並三河屋へ再び忍び入金子を返す事

扱も次郎吉は久々よて百兩足すの金子を奪ひ取一かば其夜ハ新宿よ一夜を明一翌日ハ下谷に
 能き定賭場の出来一と聞て其家へ行んと巳の時頃麹町ハ差懸り一よ昨夜己れが忍び入りし酒
 店ハ戸を開て商ひをせぬ様子ゆる次郎吉は怪一と思ひ昨日店開きの様子なりしに何とて今日
 店を休みしやと其店の隣りなる煙草屋へ立寄て委細を聞よ此家の女房小聲よてマア世の中よ

人間の悪い人も有ものよてお隣りの三河屋様の去年旦那が亡りまして跡に今年漸々十五にな
 る息子様を心よして御内室様が一生懸命に働いて今度店の賣出ををるよ付店藏と表丈塗直
 昨日の景氣もよく積樽や何かも十分よ行届き思ひの外商ひの有たさうですが運の悪い事に
 昨夜盗人が這入て可憐想よ昨日賣た賣溜や問屋へ拂ふ金さへ都合九十三兩二分と云大金を盗
 まれて今朝氣が付た家内中の騒ぎに實に一方ならず息子は青くある御内室様は瘧を起す親類
 は眞赤になつて家事不取締も斯の仕合だと恨を云ひ又問屋からは約束の金を頻りに催促
 する見るさへ聞さへお氣の毒それもある今朝はあの通り店も明ない譯ですと仔細を語るに次郎
 吉の忽ち大よ後悔して其煙草屋を立出しが心の中快よからず我とても悪い事とは知り乍ら持
 たが病ひの盗人根生併し自分の榮耀計りではなく貧乏人を救はふと思ひ立たが賊の始め夫ゆ
 る今まで所々方々よて盗みし金も大方の人よ施したかまざか那の酒屋か夫程の内證とも思は
 なかつたよとんだ罪を作り事と氣も鬱ぎ其日ハ下谷の博奕場で遊び暮しけるか十四五兩の
 儲けも有しゆゑ次郎吉の心よ悦び是でハ酒屋で盗んだ金も纏めて返せると其夜子の刻過よ下
 谷を出て彼麴町の三河屋へ再び忍び入りし奥の間にて此家の親子が密々咄し唐紙越に次郎
 吉か聞とい此方の知らざれば彼母親の涙聲今も私一が言通り折角店も直一賣出までしたけれ

ども詮方もない夕部の災難今更金の工面も出来ねハ御前も其了簡よ爲て四五年も奉公よ出て
 辛抱して後少さくも此家の立様よ一なけれハならぬよと云に悴も泣聲よてハイ夫ハ屹度辛抱
 して奉公を致しますが阿母さんも段々と御年を御取なさるのよ不時の事にて此様よ苦勞とな
 さると思ひますと夫が悲一ふ御座りますと言葉艶しき殊勝一さに次郎吉の歎息して思はずな
 せ一咳の聲親子ハはたと打驚き昨夜よ懲し盗人の又も這入し事なるかと恐怖乍らも女房が其
 所よ居るのハ誰ぢやいと咎むる聲に次郎吉ハ唐紙押明ぬつと這入る姿を行燈の明よ透し見る
 よ見形もいきさ職人風唐棧づくめの着物と羽織盲目縞の股引腹懸淺黄の手拭に目許り出して
 顔ハ誰とも白浪の夜稼なせる悪者と知る物から親子の俱よ色青さめ聲を立よば命をとられ
 んかと震居たりしよ次郎吉ハ聲を潜め若御内室さん嘸驚さなすつたらうが實ハ私しハ昨夕此
 方の家へ這入た盗人だか今日様子を聞と私しが金を盗んだゆゑよ折角賣出をしなすつたよ戸
 を閉る様に成よとの事夫が氣の毒さに金を返しよ來ましたと懷中へ手を差入れ紙よ包みし交
 リ一金を二人が前へ差出一私が持て行た金高ハ九十三兩二分能く改めて請取なせ一併し僅の
 内との言乍らとんだ心配を懸ました堪忍して下さへと唐紙を切て何方へか逃去りける跡に
 親子は夢に夢見し心地して互ひに顔を打守り頓て包みし紙を開き見るよ正しく金高九十八兩

二分別に一通の手形の表に返済金認書とありき開き見るよ

昨夜貴殿方へ忍び入り御断り申さず金子九十三兩二分借用申恐れ入り右に付家業も被
休候段何とも申譯無之聊かながら利分として金五兩と元金返金仕つり候間御開展可被成
此段申入候先の返納金證書如件

江戸無宿何某

三河屋様

と認めありしかば親子の者へ嬉しくも又利分の添へ心懸りあれ夜の明るを待兼て家主へ
届け早速其筋へ訴へしに仔細なく事済になりしゆ取敢ず開展して以前の如く家業をなせし
よ次第よ其家繁昌して後々の先代にも勝りし身代となりしが其頃の盗人酒屋と仇名をされし
由彼徒々草に或る僧の度々強盗に逢ひたるを人々強盗法印と呼し事を書残されしが是に似寄
の事なりし

○鼠小僧諸大名旗本へ忍び入事

并藤堂家伊賀組の事

爰は又次郎吉の盗み一金五兩の利を添へ麴町の酒屋へ返せし後一人つくつく思ふやう大き

く見えても町人の身代の高の知れたるものたましく仕事をし見れど骨折損の草臥設け然れ
ば此後町人の家へ這入の能を聞定め全くの金持が無理非道の金銀を集める高利貸などであ
らねば再び這入るまじ夫に付て盗んでも害ならぬは大名旗本先祖の功とい言ふがら人の上
よ立て衣食住不足なく榮耀榮花よ日を送る誠よ羨むべき事あり彼も人なり我も人なり同じ
浮世の裸虫飛で火に入る業あがら諸侯の邸へ忍び入り御手元金を盗まんと大膽不敵に思ひ立
て諸々の大名旗本の殿が寢所へ忍び入り御手元金を盗みしが自然と忍びに妙を得し鼠小僧の
名よ恥ぬ身體自由の働きの三間四間の堀を乗越丈餘の堀はさらなり高き屋根より飛下けれど
も身の軽き事綿の如く物音さへもせぬ自由其他柱を登り天井を這ふと實は不思議の盜賊よ
諸家よても自然評判高く用心厳しく守れどもいつの間よら奪はる、金の行術は白浪の今宵
は寄せん翌日の夜は如何あらんと案じられ人数を増て殿の居間を警固の諸士追取刀に取巻け
ば又夜廻り嚴重に諸門の堅めは等閑ならず又町奉行所よても奉行役人等其賊の詮議大方あら
ざれども手掛なく徒らに月日を送りけるが次郎吉は只でさへ忍びよ妙を得し上は勝手覺えし
御殿の様子女中部屋よて恐る、女子を威しなどして爰に五日彼處よ十日と寢所の床下或ひは
庭の木影よ忍び出所を人に知せずして御納戸金を奪はぬ屋敷はなかりける或時外神田の和泉

橋ふる藤堂家へ忍び入りしに外の諸侯よりは用心も厳しからず且夜廻りなどもあらぬ様子よ
 次郎吉の得たりと御殿を志し忍び行間ばあやなき後より曲者待てと呼び止られ次郎吉大い
 り驚き身を忍ばせ右手の方へ足音なく走り通れて一息繼間もあらせず爰にも我を見咎むる一
 人の武士がエイト捕ゆる襟髪を振拂ひつゝ逃出だす何方ともあく八九人取たくと取巻れ
 次郎吉身体谷りて今は捕へられんとせし時誰とも知らず次郎吉が手を取て我と俱に來よと言
 ふうと思へば忽ち大地を放れ二三丈の高き處へ飛上りしに又どつと突落され驚きながら邊り
 を見るに闇といへども鼠小僧が目よの知る前町の御堀際なるよぞ不思議の中の不思議と怪し
 んながら恙なきを悦びて遂に逃去ける

傳よ曰く次郎吉が身體忍びの妙を得て諸大名方の金子を奪ひし藤堂家のみ御殿よも
 入らず召捕れんとせし何故ぞと云ふは該家には伊賀組とて忍び乃達人廿人あつて太平
 の夜乍らも懇切に扶持せらるゝ故に當時諸家へ怪しき曲者忍び入り恣まゝ御手元金を
 盗み取影を見せざる由評判高かりければ藤堂家よての外よ夜廻りを用ひず彼伊賀組に豫
 防の備へを命ぜられしよ果して次郎吉忍び入る事能はず却つて召捕れんとせしあり藤堂
 家の深慮賢しと云ふべし

扱も次郎吉の彼廻町の一條より志ざしを替へ諸大名へ忍び入り金子を奪ひしこと數多なれど
 も素より貧き者を救はんとするを本意とすれば取より早く貧乏人と見る時の五兩三兩身分よ
 應じて人知れず施し與へ己れも榮耀榮花に世を渡り彼の高輪の假の妻に峯の外に園ひし所
 々よ二三人ありて最寄りの假の宿月の内よ二三度も行通ひ居たりしが彼藤堂家よて危きを
 助り一時の命からく淺草清願寺園に園置くも園といへる女の許を志ざして走りたり扱其
 處へ來りし頃の早明近き寅刻頃なりしか我家ながらも直どの入らず先中の様子を伺ふに聞馴
 れぬ男の聲あり扱の園の外よ旦那とりでもして居るのか何の兎もあれ聞正さんと戸口よ耳
 をさし寄つゝ息をこころして居たりける

○次郎吉園ひ女の門に様子を聞事
 并に園仔細を語る事

扱も次郎吉が門にのみ聞ると知らず中なる男が密々咄しそんなら御前旦那を欺して株金とか
 いふ百兩を翌日首尾能受取たら跡の野となれ山の手へ當分忍んで世帯を持ふ夫に付ても目印
 の植木鉢をば忘れまいと云ふに園の聲として夫承知しまたが合圖の植木鉢を出したか
 らと言て餘り早く來ての八目があるから成丈遅い方が能いよさうして今夜の最う夜明よも近

いから早く御歸りと言ふは彼男がそんな何れも追出す事なね併し此ま、歸るも残念だが二階客が有るとの事なら仕方なねへドリヤ是から吉原へでも行へいと立上る様子も次郎吉の聞きと幸ひ隣の軒下へ忍び居るとの氣も付ず門の戸明て立出る男の手拭で面を包み頃も九月の末つ方明方寒き夜の道吉原さして行過る跡を見送る此家の女お園が門の戸閉んとする袖を潜りて次郎吉の座敷へ通り火鉢の際へ走り行き行燈の燈火を薄暗くなし頬冠のまゝ、大安座よて煙草をくもら居る折しもお園の門の締をぬり座敷へ来るよいつの間入り替りしや一人の男が煙草をくもら居けるよぞお前ハマアどうして爰へ何處から御出だと言ふを聞て次郎吉がお園驚いたらう己も驚いた色男嘸御樂しみで有りませうと言ひつゝ冠りし手拭取お園は仰天なしお前さんはどうして今頃と言ふは次郎吉は打笑ひとんだ時分よ不意よ來て御邪魔な成たか知らねへが勸忍してくんあせへと言はるお園の泪ぐみ次郎吉が側へ寄添ひて御前さんの御詞でハ何か私しが浮氣の事でも仕たやうに眞綿で首を締るやうお園疑ひ今出た男が有りますから御無理でハ有ませんがあの男の私が見も知らぬ者ですといへる詞を次郎吉押し止め何もあれが甚助らしく言ふのでハないが實に今來た處が中で男の咄し聲がするゆゑ是ハ必定の前が外よ旦那取でも仕たのかと様子を聞ハ百兩どりの株金を外の旦那から翌日受取て二

人此家を欠落と約束堅き常盤木の松か夫とも色深き黄菊か譯ハ白菊の何れもあれ鉢植を目印よ出すと云ふ味い事までを殘らず聞た内証話し今出て行たあの男の前の色と儘は知りし此次郎吉併し何もそれを悪いとい言ねへかお前も一人の母を不斷大事にする癖にどんな深い譯があるか知らねへが外の旦那か百兩といふ大金を出して何の株だか買てくれると言ふのを自分勝手よ欠落をしてハ第一は袋いどうする積りだお前に限りそんな了簡とい思ハなかつた忘れも一ねへ己が大坂から歸つて來た翌年丁度今時分九月の末時後れの枝豆をお前が雷神門前で賣て居たお様子をお父が亡なり御袋一人で其日暮しも困るお斯して枝豆や何かを賣て暮しの足にすると言ふて其時御前は未だ十五聞も不便と山崎町の所帯を仕舞せ爰に越させて足懸五年今でハ御前も奥山で梅本お園と言ふてハ指に折るゝ茶屋女多くの客を取扱えは能い旦那も付くだらうゝまた色男の二人や三人ハ有たと言ふて夫を兎や角いふ已でも無か親へ不孝よなる様を心得違ひハ止ませへと醉な詞乃強異見を聞てお園の涙を流し譯も御存じないゆゑに今出た男を私しか徒ら男と思ひなされるハ無理でハありませんか何れ私しが女心の薄情なればとて今仰しやつた通り山崎町へ居た時分阿母さんと只二人其日暮しも立兼て喰や喰すの貧乏世帯御前さんの御影で人並の暮しも出来るのみならず水茶屋の株ハ更なり此家

も買て下され月々小遣も下さるほどの御前さんを何で私りが餘處よして外よ浮氣を致しませう夫よつき今出て行た男の泥棒で御母さんか今日日本所の姪の所へ泊りに行きましたか夫と付込て這入しお裏口の兩戸を外し藪から棒に金を出せなんても能い旦那があるに違ひねへど懐中から短い刀を出して威した故もし聲を立て疵ても受ていつまらないと嘘八百の口車欺すよ手なしと色仕懸元より御前さんより外にありもせぬ旦那が株金百兩を翌日下さる約束も夫と受取翌日の晩欠落仕様と言ひくるめ又二階よ田舎の泊り客があるからと鼠の騒ぐを幸ひに漸々歸せし泥棒を色男との御疑ひの無理でないが斯言始末翌日の御母さんと相談してどうか工風を仕様と思ひし所御前さんが御出よ成たの私りが身にとり何ほど嬉しいか知れせん何とか翌日の工風をなされて彼奴が再び來ぬやうに御願ひ申上ますと仔細を語るに次郎吉が扱はさうかと今更にお園が手前も面目なく我疑ひも真解て跡の互ひに睦敷枕をかはして寝ぬるなるべし

○次郎吉植木鉢を出して賊を釣事

并三右衛門が手下よ逢ふ事

扱其次の日次郎吉のお園が咄せし昨夕の盗人ほどんを野郎か偽引よせ慰み遣んと合圖となせ

し植木鉢を目に付やうに二階の窓へ並べ置きお園を相手よ酒酌なから日の暮るを待居るよ其日も早く暮果て淺草寺の六つの鐘耳元近く聞ゆるに最早時刻と次郎吉おれ園を二階へ忍ばせて一人座敷に大安坐火鉢の側よ煙草をくゆらし待とは知らず曲者よ晝間慥かに見定め置き窓の植木の松ヶ枝の我を待との知らせかと時刻を計る宵閑の戀よ心もくらまぐれ門の戸明て咳ばらひ跡切て中仕切の障子を明て今上らんとする時まで無言で居たる次郎吉か手燭へ燈す大蠟燭思ひがけなき曲者よ鼻の先へさま出して御前へ何所から御出だと不意を打れて彼曲者私よはと跡の口曇り明た口結びかねたる其顔を打眺めたる次郎吉が御前へ金藏ぢやアねへかと云れて曲者又仰天し眼を定て次郎吉が顔を上げく打守り御前へ次郎親分とんだ所で不思議の對面しかし御無事で御目出度御聞なされいか知らないか大坂てハ大ぐりハ泥親方も又私しが親方もと云ふを次郎吉押止め聲を密めて金藏よ爰ハ少し咄しも仕悪いから直に此通りを出ると角に料理茶屋があるから先へ行て静な處で一盃飲て居てくれ今跡から直に行からと云ふよ夫ぢやア親分待て居ますとそこくよ立出ぬ跡よ次郎吉お園を呼び御前此間預けた金を出して呉んなと何氣なく言ふよお園はハイと簞笥の引出より取出す金財布と次郎吉の受取て其中より五十兩と取出しお園や今來た夕部の盗人ハ己が大坂に居た時分同じ博奕仲間の

悪者て顔も知て居る者もある今更只も歸されず殊にお前を己か圍つて置といふ事が知れると又無心にて来るも面倒だから己の只懇意の者で今日此家へ遊びに来た事に断しとて置から御前も其積りて又今の男に限らず此後どんな者が尋ねて来ても決して己が世話に成て居ると言ふてはならぬへよ己もことよ青少しの間田舎へ行かぬ知れぬから五十兩置て行ほどに翌日ても阿母あが歸つたなら能く相談として人を撰んで預金よするとも又能い株ても有たら買が能いと金子を渡し立出るにお園の何となく氣よ懸る次郎吉が詞のそーと思へども平常の氣質も知るもあるにそんなら此れ金の御預りやしますすが又近い内来て下さいましと送る門の戸次郎吉の立いでながら此處の締を能く仕など詞を渡し金藏か待て居る料理茶屋へ至るに奥座敷に酒肴を打並べ待構へたる金藏か先其後の挨拶などして小聲に成て云ひける何から先へ御咄しやさうやら私一も此春の騒ぎから大坂を逃延び古郷の此江戸へ歸たなれども二十年餘も遠ざかつた古郷もある知る人もなく僅かの稼ぎよ漸々と其日を送て居りましたがどうしても住馴た大坂か戀しくなり好機仕事で路用を拵へ高飛と思ひ懸なく昨夜御前の居た宅へ女一人と付こんで威した處か彼奴も業者其名も床と梅本のお園とかいふ茶屋女いやな旦那に圍はれて強面月日を送るのも欲と二人で漸々に欺して頼んだ百兩の其株金を翌日貰ふ約束ゆる其金を

貰ふたら私しを遣て逃て呉ろと牡丹餅で頬叩く味ひ咄しに今夜は二階よ泊り客も有ゆるよ明日金を受取たら印しよ植木鉢を出して置らと何から何まで抜目のあき女の氣轉よ心嬉しく彼か詞に随つて昨夜の吉原て夜を明し今日晝間来て見れば約束の植木鉢か出て居るから上首尾と約束違へず時刻を計り明る門の戸敷から棒に御前に燈火を差出され跡へも先へも行止りどうして能か逃端を失ひとんだ仕置を受やうかと心配したが御前の御顔て大仕合彼お園とやら親分の御樂みかへ左様とも知らぬ私しか不調法勘辨して下さいと云ふに次郎吉打笑ひは前も餘程女よいくじのねい男ださうー彼女己か譯のある女ていないか奥山て馴染ゆる今日午過ぎ遊ひよ行た所か昨夕の盗人が這入たから口から出任せに嘘を並べて置たか今更急よ此所を越す譯よも行かず實よ困ると鬱悶て居るからそんなら己かどうか咄を仕てやらうと女に代つて御前の來るのを待て居たか三右衛門の子分金藏といふ夢よも己ア知らなんだは前も折角百兩の金を盗ふと樂んたそのぐればまの心休め己かどうか仕様が氣よ掛るハ大坂の淀辰親分且ハ兄貴の三右衛門さまに何か怪我でも有たのかと問に金藏膝摺寄せ親分未だ聞なさらぬへか怪我處か此春の大騒ぎ淀辰方はいふも更なり三四十人の手下の者も大方上へ召捕れ首に成た其元を糺せば矢張女ゆる訴人を一たの御前か江戸へ來なざる時十生目村の圓覺寺て

救つて遣た藝子の二人お龜お花か恩を仇よて返せし始末マアお聞なせへと金藏か是より淀辰の咄しを仕出せり

○淀辰新町遊興の事

并藝子龜八小花の事

扱も大坂の盜賊墨屋三右衛門の手下の金藏か今説出す淀辰等の仔細といふは五年以前次郎吉と俱にお先の半次か知らせよ依て十生目村の圓覺寺へ押入りて彼穴熊大太郎を殺し千二百五十兩を奪ひ取て三人して配分なし次郎吉が江戸へ下り後淀辰等ハ彼十生目村の様子を聞よ下男與助が白狀よ依て穴熊の首ハ獄門になり與助ハ死罪と爲て圓覺寺の落着ハ濟しが其時忍び入りたる三人の強盜高ハ知れぬが穴熊が所持の大金を奪ひ取逃去たるハ是又容易ならぬ曲者なりと京大坂ハ申よ及はず所々草を分けて詮議嚴しけれども元より彼與助にハ三人共面を見知られざる事なれば人相書を以て尋ねる術もなく雲を掴むが如き尋ね者ゆゑ久しく其手掛もあく打過しが此年の春淀辰が同業の宿屋仲間と參會の戻り道今宵ハ是非とも新町へ出懸遊興せんと何れも酒の機嫌に勧められしに淀辰も否と言れぬ付合も表家業の詮方あく浮世の義理と共に新町の揚屋へ到りしに十四五人の大一座飲や謠へと人々と内よハ孫も有ふれて藥

鐘頭の親父が先立てそ、のかすよ若者等ハ得手よ帆懸て己れくの隠し藝閣黒の恥を明るみへ自慢らしい淨瑠璃のふも揃はぬ高調子聞に付け見るよ付け片腹痛く淀辰がかゝる酒宴ハ始めより樂みとせぬ生質ゆゑ只繼よ任せて酌酒よ一人心を慰め居しか早夜も次第に更ぬるゆゑ酒宴を止め各々相方の遊女よ連れられ夫々の寢間に到るに淀辰も相方の遊女薄紫といへるよ案内され其坐敷へ到りしが元來奇術に害ある女の肌一生觸じと覺悟せよ淀辰ゆゑ我合方の顔さへも碌々見覺えもなかりしが最前より人々の藝盡しを見聞しつゝ飲過せし酒の酔に流石大丈夫の魂ひも浮されてや我合方に成りし女ハ如何なる女よやと燈火の元にしげく彼薄紫を詠むるよ年の頃ハ二八ばかり其面影の美しさ櫻よ梅の香りを添しが如くなる容顔に鉄石心も忽ち碎け恍惚とせよ淀辰が前後のほども打忘れ彼薄紫が手を携へ一つ布團よ比翼の契りを結びしハかの奇術を破り且ハ龜八小花を寵愛せよ穴熊大太郎を一刀に切殺せし報ひなるか又ハ天命の爰よ盡たるか夫に付淀辰が身の亡ぶべきといふハかの淀辰等に助けられし京都の藝子龜八小花の兩人は彼時三人の者よ助けられ我家へ歸りしか半月も行衛知れずと成居し身ゆゑ其親方の所々へ手を廻しその行衛を詮議なし且上へも訴へ置きし事ゆゑ早速二人が歸宅の趣き又十生目村の圓覺寺へ捕はれ居りし事ども一々上しかば二人ともに奉行所へ招呼れ大太

郎か所行且其夜金子を奪ひし強盗の面貌格好等見知り居らば委一くや上べく旨を仰せ渡され一か二人とも隠れ座敷に居る時淀辰等か大太郎と組打なし包し手拭もとれ一事ゆゑ薄々面貌を知らざるにあらねとも流石に賊なからも命を助かり一恩義の有ゆる味なる御答へをや上しに上役人も大太郎か切れるほどの事ゆゑ若き女子ども驚き恐れて眠と見究めざるは尤もありと強ては尋ねず只此後もし三人の中一人たりとも見當らば早速其筋へ届け出べし本人に違ひなければ御褒美として一人に付金百兩宛賜はるべしと言渡され仔細かく歸されしか龜八小花も其後ハ心懸ず藝子の業をなし居たり一圓覺寺の一條より彼藝子の強盗よ奸淫されし者なりとて京中の評判高く座敷ハ勿論町中よても色々嘲けられ指さるゝも最愛く他所へ行んにも自由なならぬ抱への身ゆゑ其儘愛き月日を送り一か三年ほど過て后龜八ハ年季も明前とハなりしか京の住居ハ後ろめたく元より兩親もなき事ゆゑ心安く僅かの知音を便り大坂新町へ來りて稼ぎ居たりしよかの妹分の小花も龜八ハ一年も後れ是も年季ハ明たれども思ひは同じ身の錆よ京の住居ハ物憂くて同氣求むる龜八を便りて新町へ來りしよ同病相憐むとやらよて中よく二人一ツ家に稼ぎ居たりしか計らず旅籠屋仲間の大一座酌に呼れし龜八小花ハ近江屋喜左衛門と云と慥かに見知りし圓覺寺の強盗と淀辰ハ眼ハ付しかど彼方

は知らぬ様子ゆゑ成丈面を合さぬやう二人ハ其所を取廻し早酒宴も済しかば其家へ暇を告げ連立我家へ歸りしが留守ハ雙の雇ひ婆々一人ゆゑ龜八小花ハ頼を合一かの喜左衛門が事を騒きて彼を訴人なさんよ濡手で粟の百兩といふ大金を御上より賜る約束かの盗人に少一の恩義ハ有けれどもどうせ一度ハ御上乃厄介私しどもが訴人せずとも遅れ早かれ召捕れる喜左衛門なれば外から知れぬ其先には是から二人で訴人して五十兩宛の山分ハ味ハ相談でハないかへといふ龜八ハ甲よりも厚き心の強欲に夜半の嵐ハ露知らぬ小花も俱よ打笑みて何事も姉さん能きやうよ私しハ否との申ませんと云よ龜八ハ身支度してそんなら一所ハ會所までと打連立てぞ出よける

○淀辰等罪よ亡ぶる事

并三右衛門藝子を切て自訴する事

爰よ又淀辰ハ年來慎しみ守りたる奇術に害ある色欲を如何なる天魔の所爲なるか薄紫の色香よ迷ひ其夜樂なき夢を結び大に心氣を慰さめしが早きぬくの明の鐘又の逢瀬を約しつゝ何れも連立々出るに淀辰も身仕度して薄紫に別れを告出んとせせる唐紙を明る間遲しと組子の面々上意捕たと八九人花よ嵐の殺風景生捕んとて組付を右と左へ取て投て何ゆるの上意呼

ハリ此喜左衛門身よ取て悪事の覺に更よあ一人違ひとし給ふなと言せも果ザ口々証人有て
 慥かよ知る圓覺寺の大盗人殊よ汝か家内を詮議せし同類往返の書通且ハ深く秘置し奇術の
 一卷夫を所持する汝こそ出沒自在の賊の首領淀辰に疑ひな一最早天命違たる身の上さ尋常
 よ御繩を受よと呼はりながら追取圍む捕方ハ幾百人と數知れず空飛ぶ鳥よ非ざれば通るべく
 ハあらねども腕よ覺るの淀辰由る打破つて遁れ出んと一時定めし胸の中然れども荒き事とし
 てハ多くの人を害すよ至らん然る事なすハ本意よあらず且昨夜ハ思はずも酒宴の餘リ我なが
 ら女に肌を汚せしハ是運命の爰よ盡ぬる前表ならんと觀念よて莞爾と笑ひ云ひけるハ誰かは
 知らぬが訴人有て我悪事の顯る、上ハ今更陳するも無益の事又手向ひして殊更よ罪造り爲ん
 よりハ尋常よ繩受ん率何れハ成とも引立られよと少も動する景色なく手を後ろへ廻しける
 此捕手の頭人出來り流石は淀辰神妙の至りと組子よ命じて繩打せ奉行所へ引立て入牢させし
 かハ奉行ハ其後白洲よて是までの悪事を尋ねられしに淀辰申やう私事悪事を働きて金子を奪
 ふ事數知れず然れども善人を害せし事なく又奇術を行ふほとゆるるに姦淫等ハ勿論せず其得た
 る金と皆我自由に遣ひ捨しのみ又同類手下は四五人も是ありしかいづれも死果又ハ行衛知れ
 ずとなり今は一人もあく且近江屋方召使の者ハ皆々私一と實の旅籠屋の主人と思ひて奉公致

し居るものなれば彼等は一同御免し下さるべし其外にや上べき事更よな一日も早く御仕置
 仰付られ下さるべしと其後ハ一言も物言さるよ御奉行も淀辰ハ心底假令如何なる拷問に懸る
 とも同類ハ白狀致すまじと察せられ其儘牢内よ繋ぎ置れ忍びく餘類手下を詮議あらせら
 る爰よ疊屋三右衛門ハ淀辰が召捕れしと聞早速才助金藏の兩人を招き此度親分ハいつそや圓
 覺寺よて救ひ遣し二人の藝子の爲よ訴人され召捕れしと併し親分の氣質同類を白狀する事ハ
 なけれども追々手下も召捕れん汝等ハ早く此地を立退き身を全ふせよ我ハかの思を仇にせし
 二人の女を切殺し自首して親分と俱よ冥途の道進せんと思へば疾々支度せよと五十兩つゝを
 遣ハして逃し遣り猶召仕ひの男女を呼び此度我等用事有て江戸へ参るに付此家を仕舞ゆへ汝
 等夫々自分の荷物等今日中に取片付よと言聞せ所持の金子を分與ふるよ召仕ひの者ハ寢耳に
 水の思ひハすれども主の言付け辭する術なく夫々に暇を告げ金子を貰ふて立去りぬ三右衛門
 ハ残る方なく家を取方付淀辰ハ召捕れしより五日目の夜三月の始め覺への業物腰よぶつ込み
 新町なる彼龜八小花か家に忍び行内の様子を伺ふに未だ二人共座敷より歸り來らざるゆゑ暫
 しハ其軒下よイみ歸りを待に斯とは知らぬ龜八小花二人連立酒樓客の噂もとりにくよ歸り
 來るを確かよ夫と三右衛門が身を忍ハせ二人を家へ遁入せてメんとさせる門口より續いて還

入よ二人ハ驚き御前ハ誰たへと言と三右衛門ハ門の戸をひて上りながら冠リ一手持取より早く見忘れのいめへ己か面能も淀親分を訴人としたを其返禮ハ此金と強刀引抜き龜ハ胸板目懸け差貫くに叫と一聲魂消聲小花は驚き人殺しくと叫りながら裏口へ逃んとするを飛懸り肩先四五寸切付れば死鳴と俱倒るゝを髪に引摺來り龜ハ髪に毛片手よ摺り二人が顔を白眼て面よ似氣なき欲張女め斯されても金が欲かと頭と頭を打合するに二人ハ苦痛よ絶難く聲を限りに呼んとすれとも早息も枯々なるよ最早往生させて呉んと二人が首を打落し渴き咽と濡さんと鉄瓶の湯を口から呑みほつと一息繼ぐ折しも先に此家の雇ひ婆々か耳こそ聞えね眼で知りし三右衛門ハ有様よ逸早く裏口より近所隣へ知らせしゆ早速其筋へ通達せしよ幸ひ會所よ捕方の役人出張有し折なれば夫々人數の手分をなし三右衛門を召捕んと表の方の騒じけるよぞ固より期したる人殺し我より訴へ出んと思ふ三右衛門も少しも騒かず自ら名乗て縛しめを受終に奉行所へ引れ一か是も淀辰の如く自分の悪事は白狀せ一か同類は一人も告ず依て是非なく裁許も極り四月下旬淀辰と三右衛門ハ獄門に行ハれ其餘の賊は死罪に處せられたる其中よ三右衛門の手下金藏ハ親分より五十兩を貰ひ暫しは大坂よ忍び居一が幸ひ天の網を洩れ事落着の後江戸へ來りぬ扱ても元より無頼の悪徒ゆゑ所持の金子は遣ひ

果し所々よて小盗をなし居る中計らず次郎吉が圍ひ者お圍の家へ忍び竟よ又次郎吉よ對面一て淀辰三右衛門ハ事までを斯物語一譯なりき

○次郎吉金藏よ金子を與ふる事

並兩國よて覘賣よ誘引るゝ事

扱次郎吉は淀辰と三右衛門が鼻首されしと始めて聞て流石に我力と頼み又兄弟の約束さへせし者共なれハ片腕をもがれし心地をなし只溜息を繼ばかり暫一詞も無りしが併一悔て返らぬ事と思ひ返して金藏に向ひ知らぬ事とて迂濁くと此身へおはちの廻るを知らず能い氣に成て居たけれど最早斯してハ居られねへと斯己が言たら御前ハ三右衛門とも兄弟分の一人て命を欲がる臆病者よさげすむか知らねへが御前も知ての通り大坂から歸つたも親仁やお袋よ逢度計り返つて見れハ行衛も知れず頼の網も切果て木から落たる猿同様どうせ一度ハ御上の繩に懸る覺悟で居るけれども此世に生て居るならハ親よ逢て詫事を言度計りに斯遣て未だよ尋ねて居るものゝ如何した事やら手がかりなく今日まで逢ずよ居る事ゆへ猶更親が懐くどうにか巡り逢たなら最う先のねへ親仁とれ袋少々の氣休めでも言て見送りてい己が心底一かし植木鉢の一件たが五十兩路用を遣るから夫で金藏縁切にして呉ると懐中より金子を取出し與

ふるよ金藏の笑ひつゝ親分それで済ませせんが先刻も言通り最う餘熱も酔た時分是から此度
 の中仙道を登る積り夫に付親分への耳打だが御前が圓覺寺へ行た時供よ進た彼お先の半次め
 か拷問の苦しさを仲間の者の言も更なり御前の事も身北上を知て居るだけ饑口散したゆゑ來
 應又仕事をした三州吉岡村の極印金又花又の織越か家へ忍んで稼いだ五百兩の一件まで残ら
 ず上へ書留られ半次を始め二三人見知人として其筋から江戸へ送られ御前を詮議するとの事を
 道中でちらりと聞たか夫が實の事をらば御前も江戸の浮雲也へ何處かへ姿を隠しなせへと云
 れて次郎吉打點頭能く深切に知らせて呉たそんなら爰て別れるから随分達者で居るか能いと
 次郎吉の其家の拂ひとして金藏と俱よ立出其儘袖を別らしか獨り情々思ふやう金藏か贈な
 かも聞といふ彼半次等か我を見知人となつて此江戸へ來て居るとの事をれはうくく畫間
 の歩行れず夫に付お峯を始め圍つて置く女共へ跡の難儀を懸ぬやう始末をして置ずばなるま
 いと思案を定めて其夜ハ本所へ圍ひ置く女の許へ行てお園云し如く言聞せ金子を與へて其
 夜を明し次の朝此所を立出兩國橋へ來掛りに肌吹通す川風又冠りし手拭の如何けん解し
 ゆへ結び直さんと不心折柄旦那様てハ有ませんかと一人の若者か聲を掛るよ次郎吉の誰なら
 んとしげく顔を詠むれども終よ見知らぬ若者ゆへ御前ハ誰だか知らないか私しハ見忘れま

したと言を彼者の打笑ながら旦那様の御忘れぬされしも無理てハ有ません私しハ未だ前髪の
 有し時殊に日は暮雪明り永代橋で覗を賣とて貴君よ多分の金子を頂き親仁と共に立歸りし小
 僧で御座りますと言れて次郎吉さてハと心付言れて見れば見覺えのある面貌と打笑ひつゝ大
 壯立派の男よなつたのですつかり忘れて仕舞たが親仁さんは達者かへと云れて菊松悦ばし氣
 よ旦那さまハ御情よ頂きました彼お金賣の病の藥ハ誠利目早くしてれ袋も病氣が癒る其
 上よ私しの姉の身分も定まり今でハ此本所の相生町へ轉宅て小間物の渡世を致し居ります
 鳥の鳴ぬ日ハあるとでも貴君の噂をいない日は御座りません何卒家へ御寄なされて親父やお
 袋又は姉よも御逢下されましと云詞さへ大人びて以前に代りし菊松の様子に次郎吉悦ばしく
 夫はマア何より結構併し御前の風程どうも小間物屋さんとの見えさう見ても職人としか見
 えぬへと云ば菊松それハ旦那が仰の通り私しハ子供の時分から船が好で御座りますから彼年
 姉が世帯を持やうよ成ましてから私ハ親に願ふて此兩國川岸の船宿へ奉公同様履れて來
 て居りましたか今でハどうか斯か一人で船を漕やうよ成ました夫は兎も角今申た姉の家迄何
 本御出ますつて下さいと袖を取へて放さぬゆゑ次郎吉ハ迷惑とハ思へども是非なく菊松よ進
 られて相生町の其家へ到るに二間間口の二階家よて店も奇麗よ品々を並べ立たる小間物店菊

松のいそくと親七兵衛夫婦の雪に知らずるよ夫のいと親子の悦び下へは置ぬ二階の座敷へ誘引て引毛氈も赤き心を顯はせる正直一途の七兵衛が妻と娘と引合しぬ

○七兵衛身の仕合を語る事

并風小憎大川へ飛入事

斯る折しも菊松が詭らへると見え酒肴所狭まで打並一人の客を三四人代るくは歎盃盞七兵衛のいと嬉し氣よ云るやう若旦那さま貴君に恵みを受まいた彼時の酒所では御座りません薬さへも飲れぬ貧苦の中女房おろくが煩らひよ薬を買にも菊松が小腕又稼ぐ其儲けと私しが内職も鈍き手業の端た錢思ふよ任せぬ看病よいと、寢し病人あれと彼時頂きました鱈の蒲焼流浪の後の薬も喰した事なき賜物ゆへ其次の日少々づ、喰させたのか薬の利目驗か見へて一枚紙を刺如く日に増ゆる病人と俱に我等が身よまつはる貧の病も彼金子よ半年餘り樂々と暮して居りしに是あるれ雪か幸ひよも小網町の丸善とて紙問屋の御主人に身受され國ひ者とい云ひながら此家も買て貰ひ今での親子氣苦勞なく旦那が別よ月々の下され物のあらすとも活計の出来る小間物屋夫に今ての雪の旦那が御宅より表向賜はる分米冥加も餘る親子が果報も貴君が彼時賜り金子に繋いた今の仕合思ひ廻せば有難く何卒一度の御目よ掛り御禮

と一言申上度神や佛に誓ひを立心願なせし御利益よや再び御目に掛ります親子の者の悦びの何に譬へんやうもなくと眞實面も顯はれし七兵衛の悦びにつながらる女房姉弟とも嬉し涙よくれけるを次郎吉の能ほどと挨拶あし頻りに酒酌替して居しか分量の過しか強く酔て其座にも絶兼るほとなれの漸々盃盞を納めさせ少し寝かして下されと不禮を詫て横になれハハ御枕と姉の御雪かそれ者の果御風邪めすと絹布の夜着そつと懸れば次郎吉が憚りさよと云ふも廻らぬ計りに酔臥しが咽の乾くに目を覺し見れハ何時しか日さへ傾き申の下刻よなりしかば打驚きて起上り二階を下りて小用をたし口あど酒さ皆々も服乞し立出んとしるるを七兵衛無理に押し止め先刻御膳も上らぬゆへ御珍しくハ有まじけれども近所の事ゆゑ與兵衛すし御一つ何卒召上つて下されと大皿に盛り鮮を肴に酒の爛さへ程を計らふお雪か酔よ辭み難く二つ三つ猪口を受漸々よ一て暇を告れば七兵衛ハ左様ならハ最う御出よ御座ります生憎菊松が貴方が御休みありし時彼丸善の大番頭が淺草へ寺参りよ來られしとて菊松か世話にあり居る船宿より迎ひに参り無理よ連られ御宅までも御送りや甲斐もなき跡ハ年寄女子のみ何卒菊松か歸るまでと止むるに次郎吉ハ猶更ハ住所定めぬ己が家送られてハ面倒と親仁さん是非二三日の内よ此方へ用事もあれハ御禮かてら参りますよ今日ハ少し廻り道もある間ハ體大きよ

御厄介よりありました兄いへも宜しくと漸々其家を立出しし晝間の酔を迎ひ酒引出されたる微
 醉機嫌早爰彼所火燈頭面を包むに及ばずと手拭腰に引袂と船藏前と大橋へよろめきながら
 行折しもヲイ兄貴御久しぶりと春中を叩かれ誰かと振向見れば昨夜金藏の物語りせし先
 半次をりけれハ次郎吉ハ驚き胸に釘御前の半次かどうして此地へ何時来たのだと口には言と
 少しも油断せぬ様子を見てとる半次ハ寄りそひて親分そんなに肝を潰す事ハね一寸聞たい
 事があるから少一顔をのして下さへと言つて手を捕ゆると次郎吉ハ振拂ひ此犬めと言なが
 ら半次が横面張擲り付行んとせしに何方ハ忍びしや七八人の捕方が上意捕たと左右より打ん
 とするを次郎吉が彼方此方へ身を潜り飛鳥の如く一目趁に大橋の真中まで逃延し合圖や有
 けん彼方よりも捕たくと人数の次第加ハリ今の身体逃るに道なく最う是までと次郎吉が
 ひらりと登る橋の欄干名も大橋の川中へさんぶと計り飛込だり橋の上には捕人の面々上意
 くど匂りけれども流石に續いて飛込む者もなく夫川上よ川下よと呼ひる聲ぞ夥多し

○鼠小僧再び菊松逢ふ事

并丸善の番頭物語りの事

扱も鼠小僧次郎吉ハ思ひ掛なく先の半次ハ出會し兼て手配りありし捕方ハ追詰られ逃るに

よしなく絶体絶命身を捨ててこり浮む瀬もあるやと飛込む大川の底いと暗き宵暗し咄嗟と己れ
 も覺悟なし臂を任せて水中を遊ぎ道れんと思ひし豈計らんや水に浮みし猪牙船一艘橋の下
 を潜り出し其中へ飛落て是ハと驚く次郎吉より不意を打れ船の客船楹押切る船頭ハ寐耳に
 水と仰天をし是ハと夕汐は引れて下る船めしも早一二町行過る折次郎吉ハ手を付てもし
 旦那嚙々仰天をさしましたらうか私しハ今人違ひて盗人と言れ腹の立ま、捕方ハ手向ひな
 罪はなくとも夫ほどの所置を受けるか否さよ苦一紛れ飛込ま一たと思ひ掛なく幸ひは貴君の
 船へ遠近のたづきも知らぬ此暗さ捕人の衆か私を川下よ川上よと尋ねて居る那の様子何卒
 御迷惑でハありませうか御助けなされて下さいますと實と嘘とを打交て頼めば乗合たる船の
 客も心能き人を見え夫ハア飛込事でありました併し斯私しが乗た船の中へ飛込むといふも
 何か深い縁のある事世の譬にも窮鳥懷中よ入時の獵師も是を捕すとやらましてや今日ハ佛參
 の歸り道決して心配なく御同船をなさいま併し私しハ直よ永代から上ります但那の通りわ
 やわやと捕方衆が馳廻る様子彼處へ船ハ着られぬゆへ御前ハ何處へ御出だか道順の能い處ま
 で送らせませうと情けも深き其詞よ次郎吉ハ打悦び實よ有難う御座ります何卒高橋邊まで往
 て下さらば大概捕方の目よも懸るまいと思ひますから何分宜しく御迷惑様あがらと頼みつゝ

船頭の方を見遣若し衆様飛だ厄介者が舞込て嘸お前も臆を潰しなすつたらう堪忍一て下さい
殊に餘計な手間を掛て御氣の毒だが骨折の御禮の致しますからと言ふ船頭ハ星明で顔を見て
御前様の旦那ぢやアありませんと云れて次郎吉ハ情々見遣り菊松さんで有たか是ハくど
計らずも再び逢し嬉しさい我身にせまりし危きを通る、便を得たればなり其時菊松ハ械を
やつりながら旦那ハ先程は丁度御店の大番頭さんが淺草ハ佛參に出なされるよ付私ハ毎も御
供とする處より今日も親方から使が來たので御前さんの御休みの時御暇を告ずに出掛ました
が御前さんの未だ内に御出なさるかと思ひの外飛た災難ハ御逢なされましたと言つても船
を高橋の方ハ漕行ハ彼菊松の店の番頭ハ菊や手前ハ其方存じて居るかと言ふ菊松ハハイ
知て居る處ぢやアありません御前様にも御咄し申て御存じの五年以前大雪の時彼金子を下さ
れし旦那で御座ります今朝私しが久し振よて兩國で御目に掛り親や姉ハも御禮を申させ度無
理に相生町ハ御連申たが今日の中再び御目に掛ると云も能ハ深い御因縁御情請た御恩報じ御
前様ハの私ハ一生の御願ハ何卒此旦那不都合のな様御計らい下さるやうと身に引受
一菊松ハ頼み番頭小膝を打うんなら手前ハ早晚や咄した其御方ハ夫ハア何ハ貴君に御
怪我もなくして結構の事と云つ、次郎吉ハ向ハ不思議の御縁で御目に掛る我ハ小網町丸善の

番頭藤左衛門と申者御前様ハ御深切ハ毎度菊松親子ハ御噂を申て悦んで居りますと町噂の換
撥に次郎吉は猶も手を付て是ハく私ハ事は當時高輪邊ハ住居します次郎吉と云んとせしハ
思ひハ一ハ心に黙頭ハ鼠小僧次郎吉とて最早御上の帳に付ハ賊名を流石よも云ひ兼てハ
幸藏と申者御見知置れ下さるやう夫に付ても今宵の危難を御救ひ下さつた有りがたさ實ハ親
ども思ひますと云ば藤左衛門何思ひけんはらくと涙を流し扱は前さんも幸藏と云なされる
か始めて逢ふた御方ハ老の諄言御聞せ申も異な事ながら恥と云ねは譯ず私ハ武士の浪人何
とするよも商人馴ず其日ハの暮しを立兼て夫婦の中の一人子を捨てたか其子の名も矢張
幸藏守袋ハ書付置ハ今でハ何と名乗て居りますか三十四五年も會ぬ悴生て居る事やら死た
事やら此項不思議や其子ハ身の上聞て見れば悲ハひかな彼ハ今盗人となり所々を吟行居ると
の事捨て子ながら血を分ハ實子で見れば忘られず如何ハ一度ハ逢ひたいと今日も佛參より歸
りがけに御祖師様ハ參詣して御百度踏で參つたも子も迷ふ親心それや是やで斯まで運
く成たる船の中始めて御目ハ懸リハ貴君ハ斯様の事をアの菊松より聞た御深切ハ御方ゆゑ
奥底ハ一ハやますと云ハ次郎吉餘所事とハ思ハども盗みするるとハ我ハ同じく名も幸藏と云ふ
を聞扱ハ似た様者藤左衛門ハ心を推し何と應へもなかりしに船ハ高橋ハ着し也ハ次郎吉

ハ藤左衛門より厚く禮を述何れ御宅へハ別段に菊松さんよ案内頼み御禮よ出ますと懇切に暇を告げ又菊松に又の逢瀬を約し現在實の我父なる紀伊國屋藤左衛門とハ互に知らず知られずして別れけるこそ本意なけれ

○次郎吉お峰よ旅行を告る事

并實父藤左衛門に逢ふ事

斯て次郎吉ハ高橋より上りしが是非とも今宵ハ高輪の我家へ還りお峯か身の上跡ハ難儀の係らぬ様始末をなして置ばやと高輪際ハ兼て見覺へ置たり古着屋よて脚半甲掛又門の番太にて草鞋を調へて人目を繕ふ旅姿鼻の先への類冠りまた門々よて種々噂も高き永代橋を素知らぬ顔て打通り素より達者の早走り駕籠より早く亥の刻過る頃我家へ還るにお峰は不斷なれたる次郎吉が十日廿日の夜泊りゆへ外よ苦勞ハなさねども姿ハ異なる旅出立よ不審ながら草鞋の紐も俱々に解き火鉢の側よ居直る次郎吉に打向ひ何で御前さんは旅の支度をして御出さるります最早御還りなされたのか夫とも是から御立なされるのかと問よ次郎吉ハ態と笑ひ御前も悦んで吳お實ハ今日下谷よごろ付て居た所漸々親の有家か知れテト遠方だか翌日ハ託せながら逢よ行積りと何氣なく言よれ峰も打悦び夫ハマア能い御咄しうて何所て御座いますと云れ

て次郎吉差支へし口から出任せに何ぞ京都寺町通り佛光寺門前尾張屋彌兵衛と云者の内よ居るとの事よと兼て赤坂宿にて悪者勘八作七カ旅人と殺し奪ひし金の包紙二百兩を騙り取り其名よて常に心に忘れぬも當座通れよ云くるめ何れ百二十里もある所の事あれば日數も長く掛るだらう就てハ己か留守中万事ハ翌日谷八さんへ頼む積りと云ばお峯ハ心の中夫と思ふ次郎吉か親を尋る長旅も急俱又嬉しく思へども遙か隔てし上方と聞ものからよ女氣の行ぬ先から歸る日と尋ね杯して扱云やうれ前さんか何時七里ヶ濱とやらて救つて御遣なされた三吉さんとやらか今日貴君を尋ねて参り内々御咄しかあると云ましたが御留守なれば又翌日参りますと申て彼旅籠屋の御内室さんの處に今夜ハ泊るとの事てすか縁と云ものハ何處よあるか知れないもので私一の親仁さんとハ元江戸て懇意の處丁度三島宿で逢ひ御互ひよお前さんの咄しか出たに付品川の谷八さんの世話で高輪よ住つて居るといふ事を私しの親仁さんから聞たとの事又親仁さんも此頃の博奕を止て大壯辛抱して私しの御母さんの甥を養子にまて女房と持せ三人して稼いで居るとやら是非御前さんよ一度ハ江戸へ來て逢ひ度と云て居るとうですと云ふよ次郎吉夫はマア何しろ結構だそんなら翌日三吉か來たら殊に寄たら一處に道中してお前の家へも寄つて來よう兎よ角今夜は寝て翌日の事と仕様と其夜は俱々打伏て明る

朝次郎吉ハ峰に酒肴の用意をさせ彼十生目村の三吉ヲ尋ね來るを待折柄門口よりハイ御免
 なさいと云ふお峰が誰様だへと立出見るよ一人乃若者が微笑ながら旦那へさう仰やつて下さ
 い菊松が参りましたと云にお峰が挨拶も待たず次郎吉ハ障子越よ菊松さんかどうして私ハ居所
 を知て來なすつたといひつゝ立出れば菊松ハ腰を屈め旦那へ昨夕の番頭さんが御前さんよ少
 し御咄しか有から一寸來て下さる機にと此先の料理茶屋へ待て御出なさるから直よ私しと一
 所よ御出下されまじと云に次郎吉ハ不審なまさか菊松が半次の如き犬よハ有まじと心よハ
 思へとも昨夕よ急し事ゆゑ其儘よ身繕ひして短りけれども旅脇差と腰にぶつ込用意の金を懐
 中してお峯よ向ひ御前にハ咄さあかつたが昨夜兩國で私が世話よ成た番頭さんが用が有と云
 から往て來が若も三吉が來たならば一盃飲して待せて置いて呉な夫に御前に此間預けた百兩の
 金ハ用意金として御前よ上るから大事に仕なせへ又後に咄しも仕様と云つゝ菊松と立出る次
 郎吉が心の内にハ若も是限お峯よ逢れぬ仕義よも至るかと餘慮ながらの暇に我住家と云な
 がら外を憚る煩冠り人目を包み菊松が案内に連れられて料理茶屋に到りよ待設けたる藤左衛
 門が是れへくと差招き又菊松を呼何やら囁くに打黙頭て其座を立跡ハ二人の差向ひ次郎吉
 ハ昨夕の禮を述今朝又早く來られし仔細を問よ藤左衛門ハ暫し次郎吉が顔と詠め居たりしが

潜然と涙を流し聲を潜めて是幸藏今更千萬云迎も甲斐なき事と云ながら己れハく惜い奴
 斯云ハ合點も行まいが此身の己れが實乃親紀伊國屋藤左衛門と云者我等が素生己れを捨し昔
 と語りの次第ハ夫とも知らず大略を昨夕咄して聞せたるか己れを捨て其時ハ肌さへ寒き如月
 の闇き宵間に或家の其軒下へそつと置き泣聲立なハ其家にて氣か付拾ひ上げ呉んと待内に程
 なく來掛り往來の或る人が見止て拾ひ上られしか何方の人とも知らず居りしよ終豊島町と
 ハ鼻の先の江川町よ名も高き鼠と仇名も人の知る吉兵衛親分ハ養ハれ實子の如く寵愛され直
 よ乳母やら子守やら大家へ生れし子の如くものせらるゝと聞もしつ又濟ねども忍びてハ見も
 しつ夫婦ハ悦びハ何に譬へんものなく只々吉兵衛御夫婦を朝な夕なよ伏拜み其世渡も裏家業
 何卒御夫婦よ別條なきやう又二ツよハ虫氣なきやう我子の成長する様にと神佛を念じつゝ夫
 のみ思ひて日を送りしよ己れが十四に成し秋女房の長の煩ひも終よ養生叶ハずして亡りしハ
 丁度今年が廿二回忌昨日が祥月命日ゆゑ寺参りに行し戻り道計らず飛込船の中物語りせし
 己れをハ我子なりとの知らざりしが彼時橋の上ハ様子といひ且ハ己れが詞の跡先どうも怪敷
 思ひし故菊松よ云付て夫とハなしたに跡を付させ住所を見定め駕籠で飛せて今朝來りしに最早
 鼠小僧次郎吉と配符の廻りし己れが體知らぬ時ハ兎も角も菊松より年頃面と云開ハ健よ我子

ぞと知ればみすく召捕るゝを知りつゝ捨て置れぬ我の鬼もあれ養育の大恩受し吉兵衛様へ悪き耳を聞かせまじと迂闊くして居る己れをバ通さん爲に來りしなりと懐中より金百兩を取り出しサア是を路用よ少しも早く何國へありとも身を忍びどうせ一度ハ天命通れぬ悪事ハ科召捕るゝ夫までも一日なりとも生延よと始めて明す眞實の親藤左衛門ハ物語よ次郎吉ハ仰天あゝ扱ハ吉兵衛様夫婦ハ我實の親よてハ無りしか重ねゝの不幸の此身又懐しき實の父今ハ豈かよ暮さるゝ御様子あれども其昔一子を捨る程の御娘難思ひ廻せば勿体なく空恐しき我身やとどうと伏臥男泣其時藤左衛門は目を一ばたゝき今更何と云ても詮無き事手前ハ旅出の餞別にて逢する人かあるやよと後の唐紙引明る中にハ吉兵衛夫婦の者共よ涙よ暮居るよぞ次郎吉ハ二度仰天何と詞も無りける

○藤左衛門立身の事

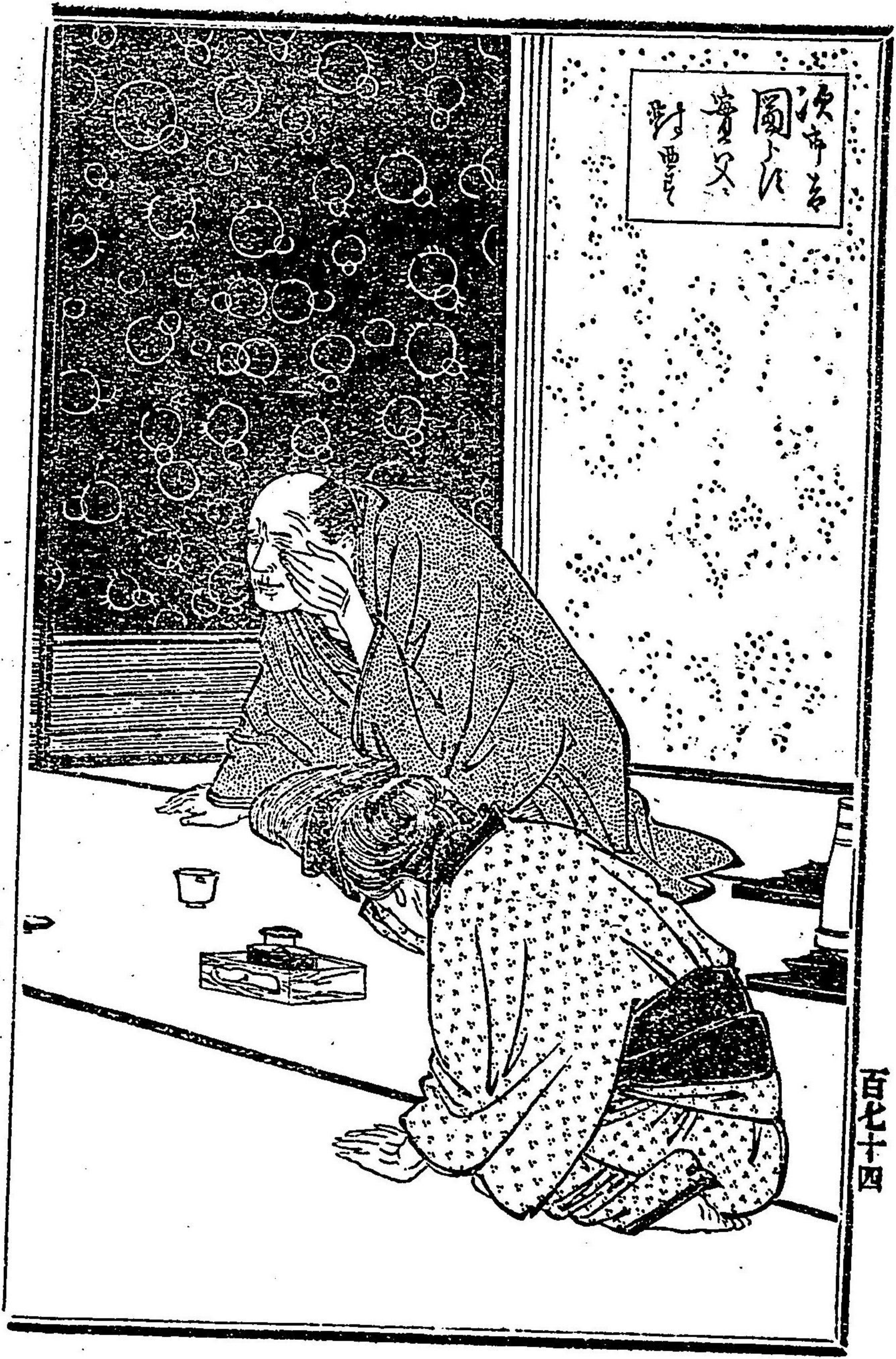
并吉兵衛夫婦身分の事

次郎吉の實父紀伊國屋藤左衛門ハ貧苦に迫りて其實子を捨る程なりしか如何成仔細よて丸善の支配人と成て且吉兵衛夫婦を今次郎吉に引合せしやと言ふ藤左衛門は次郎吉の十四の秋女房の死亡りしより暮しの立兼るより寧奉公して身を立んと世帯を仕舞或人ハ世話よて小綱町

の丸善善四郎といふ紙問屋へ奉公に這入多人數の飯焚として律義一方ハ勤め居りしハ流石よ大家の主人善四郎が見處の有者と店の手代とせしに自然商賈の道に備はりしよや商ひ先の評判能く次第くよ出世して終つて店支配人と成て箱崎宅を構へ下女を遣ひ店へハ通勤ハ身分と成しよ當時の善四郎ハ幼き時より馴染といひ親善四郎よりの遠言よて我亡後よハ親とも思ひ詞に背くまじと云れし程に正直律義を見拔れし藤左衛門あれハ店の番頭手代は更なり丸善一家の者も籠略にせず殊よ人々が妻を迎へられよと進めしが藤左衛門隨ハすして云様我貧苦に迫りし時艱難を俱よせし妻ハ世を去今先代の御主人の御蔭を以て大家の支配人と迄よ出世せしに今新たに妻を迎へ安樂を俱よせん事は亡妻へ對し我恥る所なりとて二番ハ頭の二男と養子として相應の所より嫁と貰ひ親子俱々當主善四郎を助け奉公怠り無勤め居しよ今の善四郎も利口の者されども若氣の至り不圖吉原松葉屋の松山に馴染雨の降夜も風の夜も通ふ廊を内として家を外なる振舞よ藤左衛門ハ大よ驚き種々に意見をなし密よ松葉屋へ至り松山が様子を探りに豈計らんや泥中の蓮媚態といひ心立といひ類ひなき女なるにぞ藤左衛門大に感じ早速善四郎ハ母親と相談なり松山を身請して親花澤七兵衛が住居 始町を立退せて相生町へ所帯と持せ表向當主の妾となしけるにぞ主人善四郎も殊の外藤左衛門が計らひを悦



新



次市
圖
書
對
面

び且ハ恥カシク其後ハ月の中一二度相生町へ行と樂一みどて家業を勵みぬ夫ハ初置藤左衛門ハ當時安樂の身とあり已に我子を養ひ呉る吉兵衛が宅を知ると雖も捨し我子の養ひ親ハ何と云ひ寄る手術もなく折々様子を聞よ一年吉兵衛がなせる博奕の最嚴重にありしかば吉兵衛も家を仕舞何方へか逃去しと聞本意なく思ひ居しが爰に又吉兵衛夫婦ハ彼時江川町の住居を手早く取片付成田海道の白井宿ハ懇意の者が有ゆへ其處へ尋ね行三年程忍び居りし吉兵衛夫婦共に大病を煩らひ何事も皆他人の手にてする事ある日々の入費ハ夥多一半年計りの中に有金を遣ひ果し幸ひ二人俱ハ病氣ハ全快したれども手振の編笠一蓋とあり何國よても黄金乏しければ交りも薄しとやらよて白井も住居難く殊にハ江戸の懐かしさよ夫婦連立來りまが吉兵衛ハ今ハ貧苦の身の上ながら詞と下げて以前の懇意ハ物を借んは好ぬ生質ゆえ本所業平橋の近邊ハ裏家と借受夫婦ともハ僅の内職として貧しくも其日を送りよ去々年の暮藤左衛門は計らずも吉兵衛を見受しに何共身形の宜しからねば扱ハ當時貧しく暮して居る事ならん我子の兎も角吉兵衛夫婦と見繼で恩義を報へんと彼が跡に付業平橋の住居よ至り吉兵衛夫婦よ改めて對面なし我身の事共を物語り是非とも御兩人の身の上は我等よ任し給へと言けるに義心強き吉兵衛ゆゑ強て固辭せしが藤左衛門ハ涙を流し立去氣色更もなく我拾し子を

養ひ給はりし御兩人を主とも親とも言ふべきなれども願ハくハ我等一人身よて當時ハ養子の外に親類もなき者もある何卒今より兄弟分となり咄し相手よ成り給へと事をわけ理を盡し種々とかき口説にぞ吉兵衛も藤左衛門が眞實の心を悦び其意に任せけるよ藤左衛門も俱に悦び早速其世帯を仕舞せ我家より一二軒隔てハ小家を買求め夫ハ居らしめ月々の分米小遣ハ更なり我養子又此頃迎へし嫁にも我眞實の兄ゆゑに日々機嫌を伺ひ大切よせよと言論しければ若夫婦の者も藤左衛門と同様に敬ひ仕へける扱は吉兵衛夫婦は思ひ懸なく安樂の身と成て何不足はあけれども廿餘年手元よ育てハ幸藏が事のみ互ひに言ひ暮し其便りを聞度なす事もなく自分ハ樂隱居の身の上もある日々所々の神社を禮拜ハ幸藏よ廻り逢ん事のみを願ひしに蛇の道ハへびとやら此春計らず聞ハ大坂の強盜淀辰が事其渠が手下の白狀よ江戸出生にて以前幸藏と云ハ者先年上坂し三ヶ年餘りも大坂に居て淀辰と深く交り所々の大家へ忍び入大金を奪ひ古郷江戸へ立歸り候由具よ上しとの事風の便りよ聞しゆゑ吉兵衛夫婦ハ大に驚き其次郎吉とやらんハ正しく我子幸藏よ疑ひなしと思ひ去る惡業をなせし上の天命通れず上の御厄介となるは必定なれども切てハ存生の中今一度顔が見度と子と思ふ親心最早六十の坂を越し老夫婦が髪を下し無理なる願ひと雖も神佛に祈誓を懸今一度對面なすまでハ幸藏が身を守らせ玉

へと念じけるが神佛の老の心を憐れみ給ひしか次郎吉が危き大橋の難と藤左衛門を救はれて
吉兵衛夫婦は對面するも實に因縁の然らしむる所成ずや扱も次郎吉は吉兵衛夫婦は面會せし
何と我身の不埒を詫ん手術もなく吉兵衛は漸々に涙を拂ひ其後自分の成行且は實父藤左衛門
が年頃の正直の行ひもど物語り今更替す詞のあし只何事も藤左衛門殿の心は随ひ今一度身を
遁れよ併し噂は聞し昨夜の騒ぎ品川始め其外とも江戸の出口は嘸か捕方の衆が固め居らん
と歎息なせし其折しも遠たゞく唐紙明て入來る人あり人々驚き誰かと思れば別人ならず彼
船頭の菊松よてありたりき

○次郎吉次郎吉の自訴を聞事

并三吉命に替て團みと解事

其時菊松は藤左衛門に向ひ旦那が御差圖は依て表の様子を伺ひ居りしに物騒き通りの人聲
何事かと走り出て聞バ今迄方鼠小僧次郎吉と名乗て御繩を受んと品川を固めて居らる、役人
衆へ自訴したゆへ諸方の方が聞傳へ夫を見よ行との事と云て又次郎吉に向ひ聲を密め若旦那
へ今申譯ゆゑ最早諸々の固めは緩むでせう東海道の道を嫌ひ一刻も早く御立退なされて何卒
体を御達者よと涙を含て菊松が夫と云ねど心の中淺間敷次郎吉殿が眞實の心に似氣なき悪事

と跡の詞も呼咽短き袖をぞ絞りける次郎吉は菊松の手前も面目なく俯向きて居たりしが頭
を上げて藤左衛門は路用よと渡されし金子を戻し今更何と申譯もあき此身最早實父と養父母
よ廻り逢し上から一時此場を立退とも御歎き懸ぬ様になし他國で自訴さて今迄の悪事を償
ふ覺悟の處計らず今聞次郎吉と我名を呼て訴へ出しの我を助けて立退せんと計らひ呉る者な
るか夫とも上の役人が事を偽り油斷させ我を釣となす業か何れも免れ何れも様の仰よ任
せ一時此場を立退きますは是が最う今生の御暇乞親は先立を不孝といふ況や身から作り
ます悪事の爲に首取る、人非人の大不孝御免し下されまゝ夫よ付今頂く金子よ代ての御願ひ
の我等が大坂より戻り道小田原宿よて不便さの餘りよ江戸へ連來りしお峯と言ふ女は吉兵衛
様も御存じの虎松が三島宿の與左衛門方へ入夫とありしが其與左衛門の娘にて彼虎松の心能
らず親無ものを賣んといふ様子を聞いていとさ金を残してお峰とば俱に誘ひ五年此方夫婦
に成て居りますが今度の高飛する所存も昨夜の我家へ忍んで歸り餘所ながらの暇乞跡の万
事世話なる谷八といふ者よ渠が身を頼まんと思ひしに其間もなく菊松さんが迎ひよ來られ
し今日の仕儀繋る縁とて彼が身よ罪を懸るは不便も我手を切し離縁狀是此通りに認めあれ
ば何卒渠よ御渡し下されて今の父與左衛門も此頃は心も直りしとの事慮外ながら三島宿まで

彼を御届下され度猶も氣掛り我者告て自訴した者は逆も偽りならず眞實の人よてあ
 れば夫が身の上陰ながら宜敷御願ひや上ますと今更名残の盡ねども又各々罪か、ら不孝
 の上の不孝ぞと我と心を勵して立出る後影是か此世の別れかと思送る三人の老人が涙を吞
 んで忍び泣菊松も門口まで送り出随分俱々御體を大切よあさいましと云ひ、用意の菅の笠面
 を包む其爲と渡せば次郎吉押頂き菊松さん何分跡を宜しくと暇乞へそこへ立出たれど
 次郎吉の素より思慮の深き者ゆゑ憐て、他國へ走らんとて却て江戸の出口よて召取れんも
 計り難しと思案なし彼普願寺店に住む楠本のお園親子は心立の能き者ゆゑ暫しの彼所の二階
 に身を忍び世間の様子を伺はんと淺草さへて忍び行ぬ爰に又次郎吉が妻とも云べさ彼お峯は
 次郎吉が嘘言に親よ逢んと言たるを眞となして旅立の支度を俱になしつ、今朝の約束の三吉
 が來るりと待ち、其折柄菊松の迎ひに次郎吉が立出一跡、何と無心も浮す居たりしよ入來り
 たるの三吉にて次郎吉様よ歸られ、やと言へるをお峯の座敷へ通して昨夜歸りましたから
 お前さんの咄しをした處そんなら今朝の御出りと待て居りしが云々にて迎ひの者よ連られて
 直此先の料理茶屋まで行れしゆ少、乃中待て下されと酒肴を出し進むるに三吉一人思案し
 て居たりしがお峯に向ひ未だ次郎吉様の御歸りのなきの何か御用多の事と見えませ私しの後

程参りなすを止るを無理に暇を告げ其所を立出しが品川を固めらる、捕手の役人の詰所へ到
 り私しの昨夕大橋にて逃去し鼠小僧と仇名せる次郎吉よて五年以前大坂表にて當四月御仕置
 を受、淀辰と俱々所々へ忍び入大金を奪ひ、今この出口くの御固め嚴しくて逃る事も叶
 ず天命を知る故に則ち名乗出候間御繩下さるべしと言けるに捕方の面々の扱の神妙の至と早
 速に繩を懸町奉行所へ届け三吉の傳馬町へ送られける抑々三吉が此度江戸へ下り斯る計らい
 ぬせえと言ふの彼の七里ヶ濱にて次郎吉よ助けられ悪心忍ち善心となり貫ひし金子を懐中
 て古郷十生目村へ立歸りて近隣の人を頼り母親へ訃事を入り、待に待たる三吉が心を改め歸
 りしと聞母の悦び一方あらず早速家へ入り、三吉の生れ替りし如く親を大切よな、彼次郎吉
 より貰ひ、金にて田地を買求め晝夜農業を勵しが母の殊更打悦び是逆も我家よ一夜を借し次
 郎吉様の御惠み返すくも有難しと嬉し涙も暮る親より悴三吉の命の親とも思ふ次郎吉が事
 片事も忘る、隙なく朝夕神佛を禮拜し、只々恩人の身よ恙なき様念じたり然るに去年の暮母親
 の少し煩らひしが定まれる命數にや死去りしかども四年此方三吉が孝行を盡せ、故近隣の者
 も歎きの中にも三吉が母の果報者と言へり三吉の母の佛事を懇切よな、我歸りて次の年迎
 へ、妻よ男子を一人設け名を三之助と呼て此年四歳になる小兒を寵愛して夫婦睦く農業を

なけるが今年三月大坂より淀辰と言強盗が召捕れ其手下の白状は依て江戸出生の鼠小僧次郎吉と云者三ヶ年程大坂に住し所々へ忍び入て大金を奪ひ一か淀辰等と俱に圓覺寺へ押入大金を奪ひ住持を殺したる後江戸へ立退し由を申上しかば其筋よて見知人を添て江戸へ遣はし詮義すると聞扱は母親又此身を助け呉しは鼠小僧と言強盗なりしか何れ免もあれ我爲には命の親何卒江戸へ行て此事を告知らせ身を遁れさせんと女房にハ夫とハ言ず江戸の恩人よ久々打絶しゆ夫を尋ると跡は夫々に手當をして九月の始め國を出立し東海道を下りし計らず江戸よて以前見知り虎松に逢ひ次郎吉か住所を開急ぎ品川へ來り四戸谷八を尋ねれば家と問ひに次郎吉は留守なればお峯が兼て知る旅籠屋に其夜を明し其翌日鼠小僧といふ強盗捕方を遁れ逃去しかば夫を召捕んとて出口くへ捕方の固め嚴しさと聞今朝も次郎吉に逢ねども思の爲に身を捨て固めを解んとて訴へ出るとなり

○次郎吉高崎の忠五郎を頼む事

并夢を信じて江戸へ歸る事

悪事ハあせと次郎吉が年頃諸人を憐れみ救ひ一其善根の報ひにや危き場所を度々遁れ實父兼父母に廻り逢今の心に自訴せんかと思ひしかど眼前親よ歎きを懸ると忍び難き事なりと高輪

と立退彼梅本のお園の方へ忍び行き其後の所々の風聞又ハ江戸の出口くへの固めの様子を伺ひしよ今日品川よて鼠小僧といふ強盗召捕れ此由所々へ通達有しよ付捕方の人數ハ引取しと噂どりとくなる故よ去バ此間よ遁れ去んと其夜の明方お國の家を立出兼て上州高崎に忠五郎とて無二の友達今でハ彼處にて能き顔の博奕打と成しと聞彼に暫し身を頼んと中仙道を志して行しに二日路を経て高崎に至り忠五郎が家を尋ね面會して密に我身の悪事を告當分匿ひ呉よと頼みし忠五郎も心能承知なり我別宅へ匿ひ置き何不自由もなく世話致し呉しかば次郎吉は安樂よ半年餘り高崎に隠れ居しが只々心よ懸る事は江戸の親達なまじ親子の名乗はしたれど壁よ耳ある浮世の習ひ若其筋の耳に入親に難儀の係りはせぬかと夫のみを案じ暮し居りしよ時よ四月の卯の花降し四疊半の小座敷よ徒然詫る獨り居に忠五郎か貸置し讀本を見て有しが睡け付て其儘よ肱枕寝るともなよ睡りけるよ旦那くと揺起す者あり次郎吉ハ目と覺し誰かと思れバ思ひ掛なき船乗の菊松なればどうして爰へ來たと問よ菊松は涙を流し何ぞや旦那が高輪を御逃なされた其跡へどう聞付たり取手の役人が大勢來りて吉兵衛様御夫婦と大番頭様と高手小手に縛しめ次郎吉を何國へにがした尋常に白状せよと責問るれども素より知らぬ御身の行術其由具にやされしか疑ひハ更よ解ず次郎吉を召取迄は三人とも獄屋へ

繫んと引立られしを見聞する此菊松上よは別段御構ひなけれども大恩受一藤左衛門様縁に繋がる御二方どうか御助け申度も外に手段もなき故よ宙を飛で小網町の御店へ参り仔細を御知らせ申せしよ旦那を素より一家の騒ぎ早速上へ歎願せしが御前さんが御手に入ぬ内ハ三人共に免さじと嚴命強き上の仰夫故丸善の御宅にて早く此事を御前さん御知せやし三人に替一人の命捨て親御の愛目を救ふ様させ度ものと心配有て所々へ手配な一尋らる、其中に取分私しハ彼方を見知り人能く尋ねよと旦那の御詞夜の目も寝ずに御行衛を尋ね中りし此場の仕儀一刻も早く江戸へ御出なされ親御達を救ひなされるやう最早私しハ御目よ懸りし其仔細を御店へ早く御知せやまを故此儘御暇やますと行んとなせ一菊松を暫一と次郎吉押止めそんなら私が彼時逢た計りで何れも様が左様を憂目に懸りしか知ぬ事とて迂闊くと月日を送り勿体な直々私一も行程よ少一待てと止めるを否と菊松振拂ふ袖がらざれて次郎吉ハどうと後へ倒一に咄嗟と一聲叶ふ折兄貴くと揺起され次郎吉驚き目を開くよ是轉び寝の夢よして讀懸し本ハ未だ手よ持てあり今起せしハ此家の主人忠五郎よて兄貴どう一てうなされた餘り御前の寝言よ泣なされるから夫故私か起一たか何な夢を見あすつたと問よ次郎吉斯様くと仔細を告今より江戸へ趣き様子を探りて今見し夢か正夢ならば直よ名乗て親達を救はんよ所持

の金子三百兩を取出一猶忠五郎よ言けるハ此金ハ私ハ用心にと持て居たけれども今ハ用なき金子也る御前よ禮として二百兩を上ますから私ハ御仕置を受たと聞たら線香の一本も立て下さい半へ行よハ少しハ手土産も入だらうから百兩ハ私が持て行ますと言つ、も暇乞なし身仕度するに忠五郎ハ何も兄貴夢ハ五臓の勞れとやら平生氣にして居なされるからそんな夢を見たのだから江戸へ行ハ止にしてマア落付て居なされるが能い夫とも江戸の事ハ氣よなるなら子分を遣て探らせ様と頻りに止るを此方ハ固辭し二百兩を無理に渡し夫より酒宴さへそこくよ申の刻近きに高崎を出立して素より早道の次郎吉ゆる七八里を行て其夜を明し其次の朝も早く宿を立て道を急ぎ大宮驛に來り今宵ハ此宿よ泊らんと此宿の旅人宿を尋るよ柿色の大暖簾に柳屋と染抜し遊女屋の内より一人の女子が次郎吉を若々と呼止るに此方ハ不審ながら振向き見るよ年こそ少し盛ハ過たれいと美しき遊女が打笑ながら聞がしく出來り御前さん御久し振で御座りま一たねハ今夜ハ是非私しの所へ泊つて下さいと袖を捕へ放さぬにぞ次郎吉ハ彼か顔を能く見るよ豫て大坂へ出立の節芝田町にて一時迷ひの思を晴一た彼信濃屋の女房お松なるよこの折悪しと思へども振放一行んには却て悪かりなんとお松か言よ隨ハ柳屋へ上り一にお松ハ悦び他事あく響應す故次郎吉も十分酒肴を誂へ其夜子の刻過までいと賑やかよ遊

びける

○奥原九一郎鼠小僧を召捕事

井次郎吉御仕置落着の事

信濃屋藤助が女房お松が何故大宮驛の遊女に成しといふ次郎吉が大坂へ趣く折姦淫せせし
 か其跡にて誰言ともなく評判となり十日程立て藤助が歸り來りし所早晚これを聞しより大に
 怒り百兩よて吉原へ賣れ強面月日を送りしか流れくして此大宮驛へくら替せしなり扱もお松
 の我身の悪事と思はず只己れを欺きし次郎吉を深くも恨み居りに今日計らず見懸しめ表向
 の色で仕懸十分酒を進め次郎吉を寐かして後此家の主人の目明の親分あれば我恨みを報せ
 んと尾よ尾を付け己れか江戸よて見知たる大盗人の由を告しかば柳屋の主人の大悦び幸ひ
 此時本陣に八洲方の御見廻り奥原九一郎殿泊り居るも右の由を申上しかば奥原斯と聞より
 柳屋の主人と示し合せ召連し手先八九人彼是四五十人柳屋の表裏を取圍み次郎吉が寢間へ踏
 込むを次郎吉の左右へ三四人を投退け己れ等が手よ逢我ならず刃向ふて後悔すなど有合ふ器
 物を取手も見せず投付く中庭の松の樹へ手を懸ると見へしか忽ち大屋根よ飛上り道を求め
 逃去んと宿の様子を伺ふよ追々と馳集る捕方よ次郎吉の少し猶豫なし何れなりとも手透の方

より逃去んと見下し居るに夜も早明はあれ東雲近くなりしかば人の面も鈍よ見ゆるに捕方の
 頭人奥原九一郎の手先を下知なし召捕んといきまくと見やる次郎吉打驚き那なる捕手の頭人
 の紛ふ方なき我父吉兵衛殿か厚恩受しと聞福原重左衛門様の子息初次郎殿に疑ひなし彼人は
 身の放蕩も我親の厄介となり居しか何逆斯る身分に成しぞ开の兎も角もどうせ江戸へ趣
 きて我夢見しが信にて親達か獄屋よ繋れあらんに名乗出る我體なまじ隠れ忍ばんより今召
 捕れて初次郎殿か手柄となさば少しは親への孝とならんと心を定め捕手よ向ひ人々暫らく待
 給へ我今天命を知り縛しめを受んと存するゆゑ手向ひ仕つらず何れも我なす業を見物あれ
 と言ふと思へば身を閃然かし三丈近き大屋より今組子を下知なし居る九一郎か前へ飛下り少
 しも動する氣色なく卒御役人御繩を掛られよと手を後へ廻すよ九一郎も其身体の輕きを感じ
 則ち縛しめ顔を情々見るに兼て人相書よて配符の廻りし幸藏の次郎吉なる故扱ひ我と知て斯
 の縛しめらるゝか假令次郎吉の上比科人にもせよ我爲に恩人の子息にて兄弟同様の中なる
 を是の如何と後悔すれども今更詮方なく組子の者よ命じつゝ其宿の役所へ引せける扱も次郎
 吉の江戸表傳馬町の牢内へ送られしよ流石の名高き強盗也二三日の中に牢名主となり親方
 旦那と敵ハれ逆も無き命と思へば結句氣も晴々と眠下よ見下す牢内に彼八藏の三吉か居たる

ゆる打驚き近く呼て仔細を聞に委細の事を物語り只今愛てれ目も懸るハ面目なく誠に本意ある事と真心こめし其詞よ次郎吉ハ嬉し涙よかきくれて様子を聞ハ今てハ妻子も有との事夫を振捨我か爲に命を掛て自訴して呉た其志ざしハ死んでも忘れハ致しません何れ二三日の中御呼出しの節一伍一什を御上へ告歸宅する様致しますと悦びつゝ述たるハ次郎吉ハ其後南御奉行小田切土佐守殿の御番所へ御呼出しとなり御調へ有しハ彼三吉の事を上渠ハ全く狂氣でも致したるか斯る儀を上甚た不審千萬なりと述けるハ奉行も感心有て夫より次郎吉ハ爪印口書を取しハ彼か爲に年來恩を請命を助りし者日毎奉行所へ出て命乞をなす者引もさらず奉行もほとく持餘され助け度ハ思ひけれども御法の破り難く江戸中引廻しの上小塚原にて獄門の刑ハ處せられける其の前日次郎吉ハ兼て覺悟の事故命ハ更ハ惜まねども實父養父母の事且ハ便り少なきお峯の事如何なし居るハと夫のみ心懸居ハ新入なりとて次郎吉ハ前へ選來りし男を見るに豈計らんや船乗の菊松なるに次郎吉ハ夢ハ夢見し心地して御前ハどうして此様な所へ來あすつたと問に菊松涙と俱ハ替り果たる其御姿殊ハ翌日ハ御仕置になるとの事今更何と詮方ハなければども親御達ハ一言貴方ハ言入度も自由よならぬ其御身併し此度参りしハ幸ひ船宿に間違ひか有て是非一人半へ行ねばならぬ事ハ至り夫ゆゑ頼んで私しが参りま

たいつぞや高輪にてお別れサせし日御三人ハ相談なされてお峯さんの家へ行貴方の去状と渡して三島宿へ連れて行と言れしよお峯さんハ涙ながら次郎吉さんの親子達と有ならば假令五年十年夫に逢すとも少しも厭ひませぬか切てお宅へ連れて行れ嫁とヤハ恐れ多けれども下女ども思ハ召れお側へ置せ給はれと三島宿へ歸る心は更になく彼去状を戻されハかば御三人共不便に思ハれ其意ハ任せて吉兵衛様方ハ置れハか夫はハ御三人への孝行感心の外なく且貴方ハ召捕と聞より惜氣もなく黒髪を切捨て切て菩提を弔はんと仰やつて有ました申上度とハ此事と云へるを開て次郎吉ハ親の安否を聞のみならずお峯が貞實菊松が信義今更思ひ置く事更になしと死を待の外餘念なく覺悟極めて居たりしと扱次郎吉ハ御仕置となりととき諸人打寄て死骸を申受何某寺へ葬りて跡念頃に弔ひしとなり又彼菊松ハ出牢の後是と藤左衛門ハ養子として遂に家富榮えしとぞ

明治十八年十月廿一日御届
明治十九年四月八日再版御届
全 年九月廿四日三刻御届
全 年十月 第三版 出版

(定價金壹圓貳拾錢)

編輯人 不 詳

東京府平民

出版人 鈴木金次郎

東京日本橋區通登丁目登番地

發兌元 金 泉 堂

同 所

出版目錄

繪本鼠小僧實記	全壹冊	定價金壹圓廿錢
松井兩雄美談	全壹冊	定價金壹圓廿錢
明烏後の正夢	全壹冊	定價金壹圓三十錢
祐天上人御一代記	全壹冊	定價金八十五錢
武藏坊辨慶物語	全壹冊	定價金壹圓廿錢
はりまめぐりひざくりけ	全壹冊	定價金五十錢
繪入國定忠治實記	全壹冊	定價金壹圓廿錢
新體詩歌	全壹冊	定價金五錢
明細測量東京全圖	全壹冊	定價金卅錢
影芝居鸚鵡獨稽古	全壹冊	定價金五十錢

